

加古川市

東沢1号墳

—(主) 加古川小野線(東播磨市北道路) 道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012年(平成24年)3月

兵庫県教育委員会



加古川市

ひがし さわ
東 沢 1 号 墳

－(主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

2012年3月(平成24年3月)

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は、加古川市八幡町上西条に所在する東沢1号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は（主）加古川小野線（東播磨南北道路）道路改築事業に先立つもので、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。発掘調査は、弘和建設株式会社が請け負い、平成19年度に実施した。
3. 本発掘調査は、兵庫県立考古博物館 山田清朝が担当した。
4. 調査後の空中写真の撮影および図化は、株式会社 G I S 関西に委託して行った。
5. 整理作業は、平成22年度から兵庫県立考古博物館にて実施した。
6. 遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が株式会社 谷口フォト、株式会社 地域文化財研究所に委託して行った。
7. 調査成果の測量は、加古川市内2級基準点3点（No.53・No.106・No.107）を基地点として、3級基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。標高は東京湾平均海水準を基準とし、調査区内に加古川市内二等水準点をもとにした三等水準点を設置した。
9. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとに呼称した。また、各遺構は以下のように呼称した。
竪穴住居跡→SH、土坑→SK、溝→SD
10. 第15図は、国土地理院発行1/50000地形図「高砂」を使用した。また、第10図は、国土地理院発行1/25000地形図「三木」を使用した。この他、第7図は、加古川市発行都市計画図を使用した。
11. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
12. 本書の編集は八木和子の補助を得て山田が行い、第4章を除いては山田が執筆した。
13. 本報告にかかわる遺物・写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

岡本一士・西川英樹・高橋克壽



東沢1号墳遠景 南東上空から



東沢1号墳遠景 南西上空から

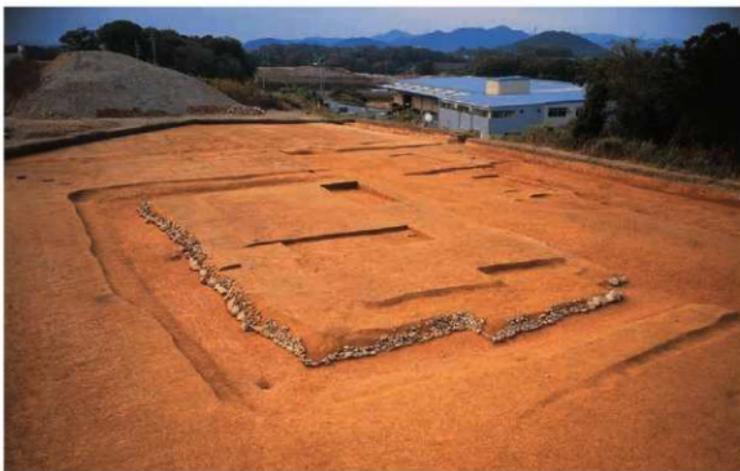
巻首図版2



調査地全景 北上空から



調査地全景 南西上空から



東沢1号墳全景 北東から



東沢1号墳全景 南東から

卷首図版 4



東沢1号墳全景 北から



東沢1号墳全景 南西から



北周溝断面 西から



東周溝断面 南から



西周溝断面 南から

巻首図版6



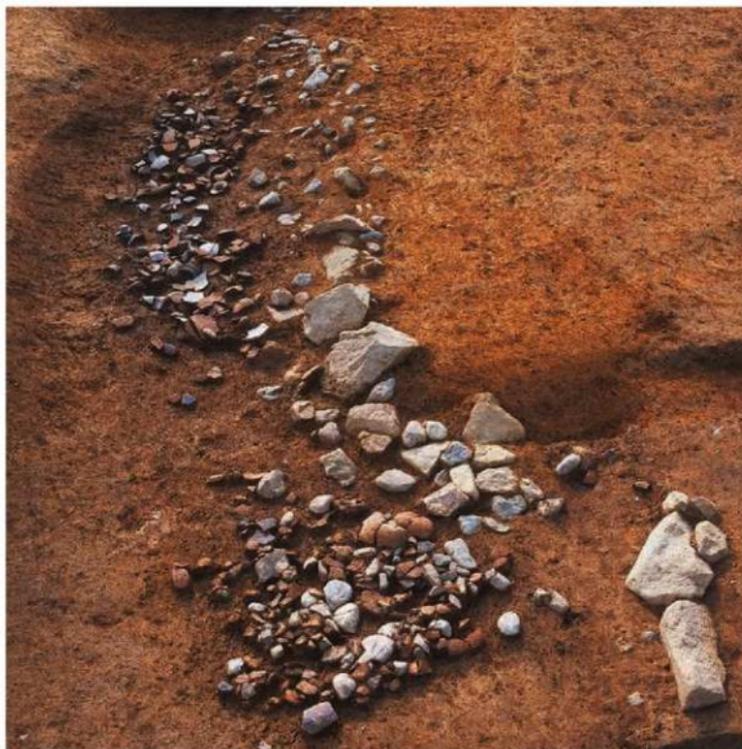
造り出し全景 北から



造り出し全景 北西から



造り出し側面 北西から



造り出し北側 遺物出土状況 西から



造り出し北側 遺物出土状況 北から



東沢 1 号墳出土埴輪・土器・土製品



東沢1号墳出土須恵器



東沢1号墳出土土師器・土製品



東沢1号墳出土埴輪



造り出し供献遺物群



家形埴輪 1



家形埴輪 1



筒形器台

目 次

| | |
|-------------------------|-----|
| 第1章 東沢1号墳 | |
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 6 |
| 第2章 調査の経緯 | |
| 第1節 調査の起因 | 11 |
| 第2節 分布調査・確認調査 | 13 |
| 第3節 本発掘調査 | 15 |
| 第4節 整理作業 | 16 |
| 第3章 調査の成果 | |
| 第1節 調査の概要 | 17 |
| 第2節 通称「望塚」の調査 | 19 |
| 第3節 東沢1号墳 | 22 |
| 第4節 他の遺構と遺物 | 74 |
| 第4章 分析・鑑定 | |
| 第1節 東沢1号墳の岩石同定 | 83 |
| 第2節 東沢1号墳出土土器および埴輪の胎土分析 | 87 |
| 第3節 東沢1号墳出土須恵器の蛍光X線分析 | 107 |
| 第5章 まとめ | |
| 第1節 遺物 | 112 |
| 第2節 東沢1号墳について | 120 |
| 第3節 「望塚」について | 124 |
| 報告書抄録 | 126 |

挿 図 目 次

| | | | |
|------|------------------------|------|-------------------------------|
| 第1図 | 兵庫県における加古川市の位置……………vi | 第36図 | 周溝断面の調査……………24 |
| 第2図 | 加古川市の位置……………1 | 第37図 | 造り出し……………24 |
| 第3図 | 加古川平野（南上空から）……………1 | 第38図 | 墳丘西側斜面……………25 |
| 第4図 | 加古川市の地理的位置……………2 | 第39図 | 墳丘南側斜面……………26 |
| 第5図 | 更新世段丘（●印：東沢1号墳）……………3 | 第40図 | 墳丘東側斜面……………27 |
| 第6図 | 加古川市域の地形……………3 | 第41図 | 葺石断面……………27 |
| 第7図 | 遺跡周辺の地形……………4 | 第42図 | 西周溝内遺物出土位置……………28 |
| 第8図 | 遺跡周辺地形横断面……………5 | 第43図 | 東沢1号墳周溝下層 遺物出土位置……………29 |
| 第9図 | 宮山遺跡から見た段丘崖……………5 | 第44図 | 南周溝内遺物出土位置……………30 |
| 第10図 | 主要周辺遺跡……………6 | 第45図 | 東側一括 遺物出土状況……………31 |
| 第11図 | 西条古墳群（南西上空から）……………8 | 第46図 | 須恵器壺（13）出土位置……………32 |
| 第12図 | 尼塚古墳……………9 | 第47図 | 須恵器壺・隼（14～17）出土位置……………32 |
| 第13図 | 行者塚古墳……………9 | 第48図 | 須恵器器台出土位置……………33 |
| 第14図 | 西条庵寺……………9 | 第49図 | 須恵器高杯出土位置……………33 |
| 第15図 | 東播磨南北道路と東沢1号墳……………11 | 第50図 | 須恵器壺出土位置（2）……………34 |
| 第16図 | 工事計画と調査位置……………12 | 第51図 | 器台出土状況……………34 |
| 第17図 | カマ谷地区・望塚地区の確認調査……………14 | 第52図 | 家形埴輪1出土状況……………34 |
| 第18図 | 東沢1号墳に関わる確認調査……………14 | 第53図 | 家形埴輪1出土位置……………35 |
| 第19図 | 調査風景……………15 | 第54図 | 家形埴輪2出土位置……………35 |
| 第20図 | 現地説明会（1）……………15 | 第55図 | 北側一括出土遺物出土位置……………36 |
| 第21図 | 現地説明会（2）……………15 | 第56図 | 周溝下層出土須恵器……………38 |
| 第22図 | 筒形器台の復元作業……………16 | 第57図 | 周溝下層出土須恵器・瓦質土器……………40 |
| 第23図 | 家形埴輪の復元……………16 | 第58図 | 器台拓影……………40 |
| 第24図 | 家形埴輪の実測……………16 | 第59図 | 周溝下層出土 土師器・土製品・韓式土器……………42 |
| 第25図 | 調査前全景（南西から）……………17 | 第60図 | 46拓影……………43 |
| 第26図 | 調査風景……………17 | 第61図 | 56拓影……………43 |
| 第27図 | 平面図……………18 | 第62図 | 周溝下層出土埴輪（1）……………44 |
| 第28図 | 調査前の望塚……………19 | 第63図 | 周溝下層出土埴輪（2）……………46 |
| 第29図 | 望塚の調査……………19 | 第64図 | 73拓影……………47 |
| 第30図 | 望塚断面……………19 | 第65図 | 82拓影……………48 |
| 第31図 | 新望塚……………20 | 第66図 | 周溝下層出土埴輪（3）……………49 |
| 第32図 | 東沢1号墳……………21 | 第67図 | 周溝下層出土埴輪（4）……………51 |
| 第33図 | 墳丘横断面……………22 | 第68図 | 周溝下層出土埴輪（5）……………54 |
| 第34図 | 周溝断面位置図……………22 | 第69図 | 112拓影……………55 |
| 第35図 | 周溝断面……………23 | | |

| | | | |
|------|--------------------------------|-------|--|
| 第70図 | 周溝下層出土埴輪 (6) ……………58 | 第95図 | 各粒度階における 甎物・岩石出現頻度 (2) ……93 |
| 第71図 | 周溝下層出土埴輪 (7) ……………61 | 第96図 | 胎土中の砂の粒径組成 (2) ……………93 |
| 第72図 | 屋根と壁体の接合……………62 | 第97図 | 各粒度階における 甎物・岩石出現頻度 (3) ……94 |
| 第73図 | 家形埴輪各部名称……………62 | 第98図 | 胎土中の砂の粒径組成 (3) ……………94 |
| 第74図 | 家形埴輪 1 (1) ……………64 | 第99図 | 各粒度階における 甎物・岩石出現頻度 (4) ……95 |
| 第75図 | 家形埴輪 1 (2) ……………65 | 第100図 | 胎土中の砂の粒径組成 (4) ……………95 |
| 第76図 | 家形埴輪 2……………66 | 第101図 | 碎屑物・基質・孔隙の割合……………96 |
| 第77図 | 周溝上層出土土器……………67 | 第102図 | 胎土薄片 (1) ……………101 |
| 第78図 | 整地層出土埴輪……………69 | 第103図 | 胎土薄片 (2) ……………102 |
| 第79図 | S H01の調査……………74 | 第104図 | 胎土薄片 (3) ……………103 |
| 第80図 | S H01横断面……………74 | 第105図 | 胎土薄片 (4) ……………104 |
| 第81図 | S H01……………75 | 第106図 | 胎土薄片 (5) ……………105 |
| 第82図 | S H01上面土器出土位置……………76 | 第107図 | 胎土薄片 (6) ……………106 |
| 第83図 | S H01上面出土土器……………76 | 第108図 | 東沢1号墳出土須恵器の両分布図……………109 |
| 第84図 | S D01 土器出土位置……………77 | 第109図 | 陶器群と神野大林群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr) ……110 |
| 第85図 | S D01・S D02出土土器……………78 | 第110図 | 東沢1号墳出土須恵器の産地推定 (K, Ca, Rb, Sr) ……110 |
| 第86図 | S X01……………79 | 第111図 | 造り出し上供献土器・埴輪……………114 |
| 第87図 | S X01出土土器……………80 | 第112図 | 壺形埴輪の分類……………117 |
| 第88図 | 整地層出土土器……………81 | 第113図 | 関連遺跡……………122 |
| 第89図 | 整地層出土土器……………81 | 第114図 | 望塚出土銅鐸……………124 |
| 第90図 | 試料採集位置……………83 | 第115図 | 調査地と望塚……………124 |
| 第91図 | 近畿南西部の地質……………85 | | |
| 第92図 | 岩石破断面の实体顕微鏡写真……………86 | | |
| 第93図 | 各粒度階における 甎物・岩石出現頻度 (1) ……92 | | |
| 第94図 | 胎土中の砂の粒径組成 (1) ……………92 | | |

表 目 次

| | | | |
|-----|-------------------------------------|------|--------------------|
| 第1表 | 主要周辺遺跡……………7 | 第8表 | 試料一覧……………87 |
| 第2表 | 東沢1号墳出土土器一覧……………70 | 第9表 | 薄片観察結果 (1) ……………88 |
| 第3表 | 出土埴輪一覧 (1) ……………71 | 第10表 | 薄片観察結果 (2) ……………89 |
| 第4表 | 出土埴輪一覧 (2) ……………72 | 第11表 | 薄片観察結果 (3) ……………90 |
| 第5表 | 出土埴輪一覧 (3) ……………73 | 第12表 | 薄片観察結果 (4) ……………91 |
| 第6表 | 東沢1号墳以外出土土器一覧……………82 | 第13表 | 胎土分類結果……………98 |
| 第7表 | 古墳出土岩石および周辺地域採取岩石 の特徴と岩石名……………84 | 第14表 | 分析値……………107 |

巻首図版目次

巻首図版1

東沢1号墳遠景 南東上空から

東沢1号墳遠景 南西上空から

巻首図版2

調査地全景 北上空から

調査地全景 南西上空から

巻首図版3

東沢1号墳全景 北東から

東沢1号墳全景 南東から

巻首図版4

東沢1号墳全景 北から

東沢1号墳全景 南西から

巻首図版5

北周溝断面 西から

東周溝断面 南から

西周溝断面 南から

巻首図版6

造り出し全景 北から

造り出し全景 北西から

造り出し側面 北西から

巻首図版7

造り出し北側 遺物出土状況 西から

造り出し北側 遺物出土状況 北から

巻首図版8

東沢1号墳出土埴輪・土器・土製品

巻首図版9

東沢1号墳出土須恵器

東沢1号墳出土土師器・土製品

巻首図版10

東沢1号墳出土埴輪

造り出し供献遺物群

巻首図版11

家形埴輪1

巻首図版12

筒形器台

写真図版目次

写真図版1 望塚

調査前全景 北から

望塚断面 南から

写真図版2 東沢1号墳・遺構

全景 俯瞰

写真図版3 東沢1号墳

全景 西から 全景 東から

全景 北東から

写真図版4 東沢1号墳

西側斜面全景 北西から

西側斜面全景 南西から

西側斜面北端 北西から

写真図版5 東沢1号墳

西側斜面中央部 西から

西側斜面 南端部 西から

南側斜面全景 南西から

写真図版6 東沢1号墳

南側斜面東半部 南西から

南側斜面西端部 南から

南側斜面中央部 南から

写真図版7 東沢1号墳

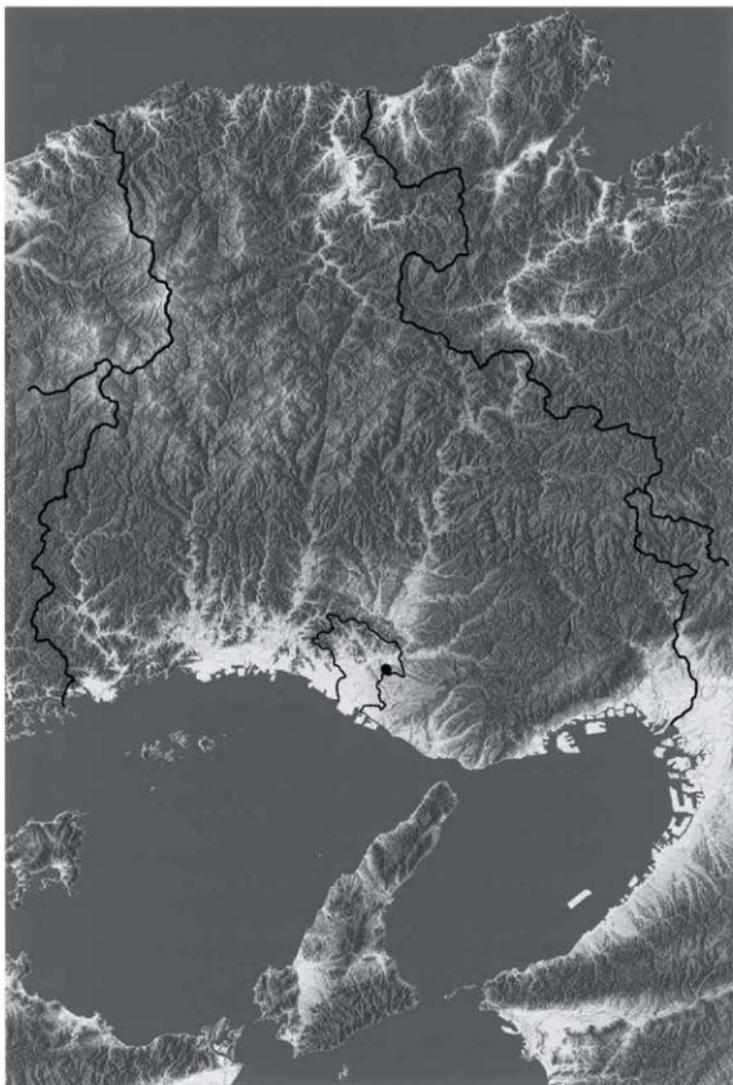
南側斜面東端部 南から

造り出し南東隅 南東から

南側周溝 105出土状況 東から

南側周溝 105出土状況 東から

- 写真図版8 遺構
 S H01全景 南西から
 S H01全景 南西から
 S H01全景 北から
- 写真図版9 遺構
 S X01 東から S X01 東から
- 写真図版10 遺構
 S X01 南から S X01 南から
- 写真図版11 遺物
 周溝下層出土須恵器 (1・4・6・8)
- 写真図版12 遺物
 周溝下層出土土器 (11~15)
- 写真図版13 遺物
 周溝下層出土土器 (18)
- 写真図版14 遺物
 周溝下層出土土器 (16・17・19)
- 写真図版15 遺物
 周溝下層出土土器 (23・25・26・28~30)
- 写真図版16 遺物
 周溝下層出土土器 (33・35~37・40・42)
- 写真図版17 遺物
 周溝下層出土土器 (41・43・44)
- 写真図版18 遺物
 周溝下層出土土製品 (45)
 周溝下層出土埴輪 (46・47・50・52・54)
- 写真図版19 遺物
 周溝下層出土埴輪 (55~61)
- 写真図版20 遺物
 周溝下層出土埴輪 (62・64~67)
- 写真図版21 遺物
 周溝下層出土埴輪 (70~73・75・77)
- 写真図版22 遺物
 周溝下層出土埴輪 (79~84)
- 写真図版23 遺物
 周溝下層出土埴輪 (87・89~91・96・97)
- 写真図版24 遺物
 周溝下層出土埴輪 (92・99・101・104)
- 写真図版25 遺物
 周溝下層出土埴輪 (94)
- 写真図版26 遺物
 周溝下層出土埴輪
 (105~107・109・110~112)
- 写真図版27 遺物
 周溝下層出土埴輪 (116~121・123)
- 写真図版28 遺物
 周溝下層出土埴輪
 (122・124・126・128・134・135)
- 写真図版29 遺物
 周溝層出土埴輪 (138・139・143・146)
- 写真図版30 遺物
 周溝下層出土埴輪 (145・147~149・151)
- 写真図版31 遺物
 周溝下層出土埴輪 (150・152・154・159)
- 写真図版32 遺物
 周溝下層出土埴輪 (160・161・164・165・168)
- 写真図版33 遺物
 整地層出土埴輪
 (183・184・187・191・193・194・197)
- 写真図版34 遺物
 周溝下層出土埴輪 (167・172・173)
- 写真図版35 遺物
 周溝下層出土埴輪 (167)
- 写真図版36 遺物
 周溝下層出土埴輪 (167)
- 写真図版37 遺物
 周溝下層出土埴輪 (167: 棟木)
- 写真図版38 遺物
 周溝下層出土埴輪 (167: 棟木)
- 写真図版39 遺物
 S H01上面出土土器 (198)
 S D01出土土器 (202・205・207・208)
- 写真図版40 遺物
 S X01出土土器 (210)
 整地層出土石器 (S 1)
 周溝上層出土須恵器 (174・180・214)



第1図 兵庫県における加古川市の位置

第1章 東沢1号墳

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

加古川市

東沢1号墳は加古川市に所在する。東沢1号墳の所在する加古川市は、兵庫県南部のほぼ中央に位置する(第2図)。南側は瀬戸内海を臨み、東側を加古郡稲美町・同播磨町と、南東端を明石市と、北東側を三木市と、北側を加西市・小野市と、西側を高砂市・姫路市と、それぞれ接している(第4図)。市域の面積は138.51km²である。

交通の要衝

加古川市は、古代以来、交通の要衝であった。一つは、畿内中央部と西国さらには大宰府を結ぶ山陽道のルート上に位置し、古代においては「加古駅家」が置かれていた。江戸時代以降においては、「加古川宿」として、その役割を担ってきた。

現代においては、JR山陽本線にその役割を受け継がれている。さらには、道路交通においては、国道2号線・同加古川バイパス・明姫幹線等が、同様の役割を担っている(第4図)。

ところで、この道路交通において、内陸部とを結ぶ南北方向の交通が未整備な状態であった。この問題を解決すべく計画されたのが、本遺跡発掘の起因となった東播磨南北道路である(第2章第1節)。

南北交通

もう一つは、加古川市の中心部を加古川が南北に流れている。加古川はその上流域、丹波市氷上町で分水界となっており、より北側は竹田川・由良川を経て日本海に通じている。古代以前においては、「加古川・由良川の道」と称され、瀬戸内と日本海を結ぶ重要なルートであった。そして、江戸時代以降は、加古川を遡り丹波市氷上町本郷まで、高瀬船が往来していたようである。そして、現代においては、山陽本線加古川駅を起点とするJR加古川線・福知山線がこれに替わっている。

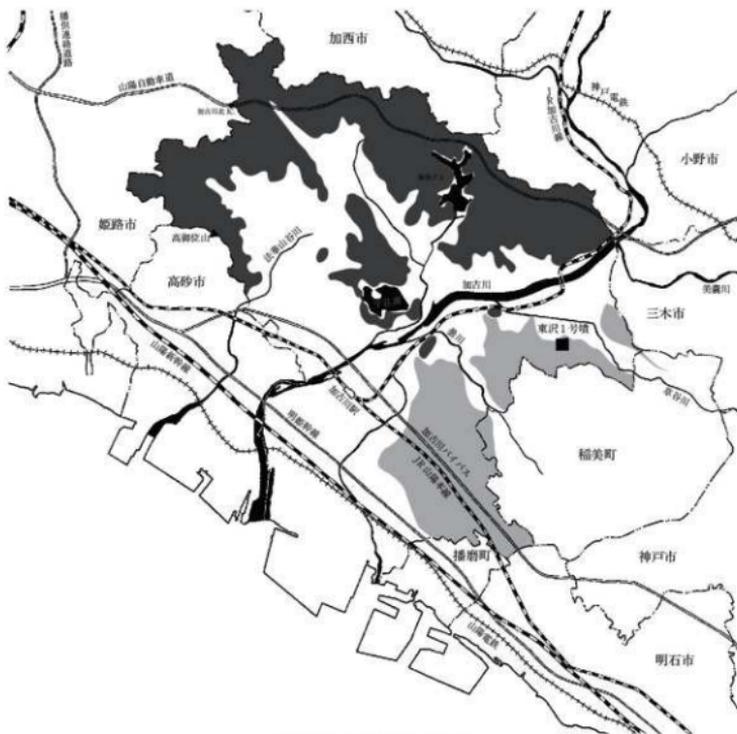
先に触れたように、本遺跡の調査の起因もこの南北交通の強化を目指すものである。



第2図 加古川市の位置



第3図 加古川平野(南上空から)



第4図 加古川市の地理的位置

このように、古代以来、加古川は東西を結ぶ交通路と南北を結ぶ交通路の結節点であり、交通の要衝であった。これが、加古川市の発展の基礎となっている。そして、現在においては、臨海部を中心とした工業都市として、加えて阪神地域のベッドタウンとして展開している。このように加古川市は、東播磨地域のなかで中心的な役割を担っている。

平成23年12月現在の人口は約26万8千人である。

遺跡の位置 東沢1号墳は、加古川市のなかでも東部の八幡町上西条に位置する。加古川の左岸にあり、南側850mは稲美町との市境となっている（第4図）。

2. 地形的環境

加古川 加古川市は、その市域の大半が加古川平野となっている（第3図）。加古川平野を形成した加古川は、栗賀山南麓付近（丹波市青垣町）を源とする一級河川である。丹波市水上町を経て、篠山川・美濃川・万願寺川等と合流し、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注いでいる。全長90kmを測り、その流域面積は1835km²に及ぶ。

更新世段丘 加古川平野の東側は、更新世段丘の形成が顕著である（第6図）。この更新世段丘は、高

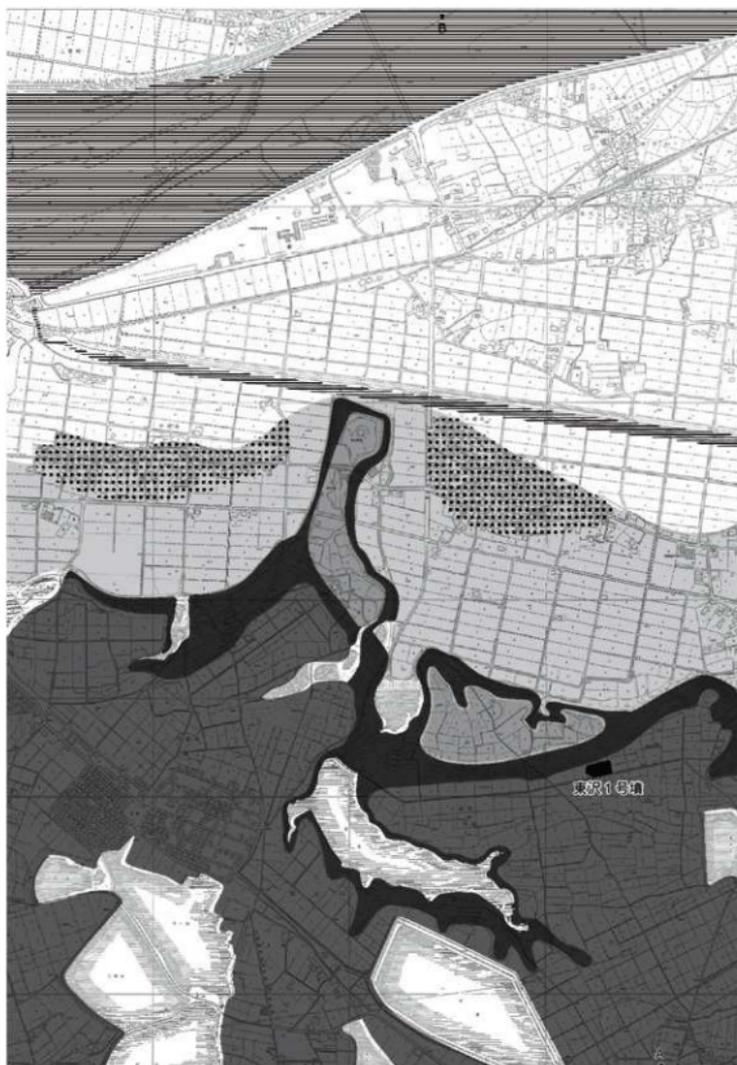
位・中位段丘面からなり、曇川と草谷川によって小谷が形成され、顕著な段丘崖が形成されている（第5図）。この結果、高位段丘面が北西方向に張り出す舌状をなしている（第6図）。「加古段丘¹⁾2-2面」にあたり、「いなみの台地」と称されている。東沢1号墳は、この高位丘面上に立地している。北側は加古川の支流をなす草谷川により段丘崖



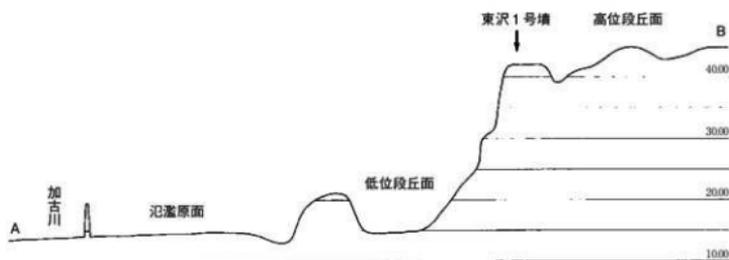
第5図 更新世段丘（●印：東沢1号墳）



第6図 加古川地域の地形



第7図 遺跡周辺の地形



第8図 遺跡周辺地形横断面

が顕著に形成されており、東沢1号墳はその段丘崖の際に位置する(第7図)。調査地現地表面上の標高は42mで、北側の低位段丘面とは27mの比高が認められる(第8図)。また、高位段丘面と低位段丘面の間には、わずかに中位段丘面が形成されている。低位段丘面は、完新世段丘と考えられ、段丘崖側(南側)は微凹地となっている。空中



第9図 宮山道跡から見た段丘崖

写真の判読からは、旧河道が存在する可能性が考えられる。また、完新世段丘面の北側は微高地となっており、その範囲は現在の上西条の集落とほぼ一致する。この完新世段丘面の北側から現加古川にかけては氾濫原面となっている(第8図)。

〔註〕

(1) 兵庫県加古川市『加古川市史 第四巻 史料編1』1996

第2節 歴史的環境

はじめに 東沢1号墳の周辺には、多くの遺跡が周知されている（第10図）。ここでは、東沢1号墳の立地する高位段丘面上の遺跡を中心にみていく。

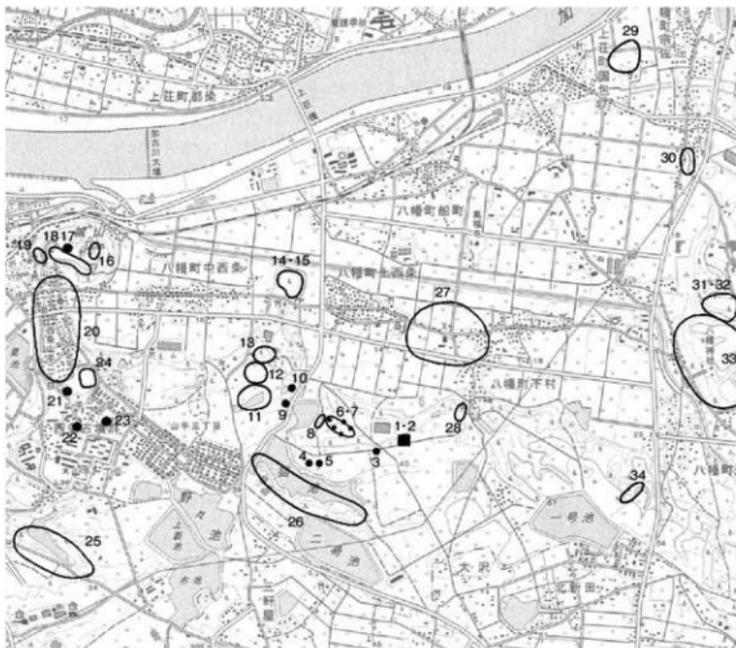
1. 旧石器時代～縄文時代

旧石器時代の遺跡としては、神野城山遺跡（18）が周知されている。

2. 弥生時代

概要 望塚（2）・播磨堂遺跡（9）・猫池遺跡（26）・下村遺跡（27）・大日山遺跡（28）・野村遺跡（33）が周知されている。

望塚 銅鐸出土と周知されている。⁽¹¹⁾ 扁平鈕式6区製姿押文に分類されるもので（第114図）、以前個人蔵であったものが、平成22年3月より兵庫県立考古博物館の所蔵となっている。当地は、今回報告する東沢1号墳と平面的にはほぼ一致するものである。調査地との関係については後述する（第3章第2節）予定である。



第10図 主要周辺遺跡（縮尺 1：25000）

播磨堂遺跡 甕棺墓が明らかとなっている。

大日山遺跡 甕棺墓が明らかとなっている。

3. 古墳時代

概要 東沢2号墳(4)・同3号墳・東沢中遺跡(3)・天王山遺跡(5)・天王山古墳群(6)・天王山窟跡群(7)・西田池古墳群(8)・池ノ尻古墳(10)・成福寺古墳群(13)・宮山大塚古墳(14)・宮山古墳群(15)・城山1号墳(17)・西条古墳群(20)・人塚古墳(21)・尼塚古墳(22)・行者塚古墳(23)・神野北山遺跡(25)・下村遺跡(27)・野村古墳群(31)が周知されている。

東沢2号墳 (主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴い本発掘調査が行われている。横穴式石室を主体とする円墳である。須恵器杯・ガラス小玉・土製小玉・耳環が副葬されており、6世紀後半～末に位置付けられている。⁽²⁾

東沢3号墳 東沢2号墳の東に隣接する円墳である。東沢2号墳の調査で明らかとなった古墳である。

第1表 主要周辺遺跡

| No. | 遺跡名 | 遺跡番号 | 所在地 | 時代 | No. | 遺跡名 | 遺跡番号 | 所在地 | 時代 |
|-----|--------|--------------------|--------|----|-----|--------|--------------------|---------|-----------|
| 1 | 東沢1号墳 | 110630 | 八幡町上西条 | 古墳 | 18 | 神野城山遺跡 | 110002 | 神野町西条城山 | 旧石器 |
| 2 | 望塚(益塚) | 110012 | 八幡町上西条 | 弥生 | 19 | 西条蔵骨器群 | 110229 | 神野町西条 | 中世 |
| 3 | 東沢中遺跡 | 110629 | 八幡町上西条 | 古墳 | 20 | 西条古墳群 | 110062～ 110094 | 山手 | 古墳 |
| 4 | 東沢2号墳 | 110628 | 八幡町上西条 | 古墳 | 21 | 人塚古墳 | 国史16 | 山手 | 古墳 |
| 5 | 天王山遺跡 | 110618 | 八幡町上西条 | 古墳 | 22 | 尼塚古墳 | 国史16 | 山手 | 古墳 |
| 6 | 天王山古墳群 | 110625～ 110627 | 八幡町上西条 | 古墳 | 23 | 行者塚古墳 | 国史16 | 山手 | 古墳 |
| 7 | 天王山窟跡群 | 110623・ 110624 | 八幡町上西条 | 古墳 | 24 | 西条庵寺 | 110226 | 神野町西条 | 奈良 |
| 8 | 西田池古墳群 | 110052～ 110054 | 八幡町上西条 | 古墳 | 25 | 神野北山遺跡 | 110635 | 神野町神野 | 古墳 |
| 9 | 播磨堂遺跡 | 110020 | 八幡町上西条 | 弥生 | 26 | 箭池遺跡 | 110615 | 八幡町上西条 | 弥生 |
| 10 | 池ノ尻古墳 | 110049 | 八幡町上西条 | 古墳 | 27 | 下村遺跡 | 110289 | 八幡町下村 | 弥生～ 中世 |
| 11 | 上村遺跡 | 110490 | 八幡町中西条 | 奈良 | 28 | 大日山遺跡 | 110019 | 八幡町下村 | 弥生 |
| 12 | 古堂庵寺 | 110227 | 八幡町中西条 | 奈良 | 29 | 国包構居跡 | 110252 | 上荘町国包 | 中世 |
| 13 | 成福寺古墳群 | 110050・ 110051他 | 八幡町上西条 | 古墳 | 30 | 宗佐構居跡 | 110253 | 八幡町宗佐 | 中世 |
| 14 | 宮山大塚古墳 | 110034 | 八幡町上西条 | 古墳 | 31 | 野村古墳群 | 110046～ 110048 | 八幡町野村 | 古墳 |
| 15 | 宮山古墳群 | 110055～ 110060 | 八幡町上西条 | 古墳 | 32 | 野村構居跡 | 110254 | 八幡町野村 | 中世 |
| 16 | 西条城跡 | 110242 | 八幡町中西条 | 中世 | 33 | 野村遺跡 | 110616 | 八幡町野村 | 弥生 |
| 17 | 城山1号墳 | 110061 | 八幡町中西条 | 古墳 | 34 | 野村古窟跡群 | 110512・ 110513他 | 八幡町下村 | 奈良 |

主体部は残存していなかったが、横穴式石室もしくは小竪穴式石室を主体とするものと考えられている。須恵器の壱片が副葬されており、6世紀後半～7世紀にかけてと考えられている。⁽³⁾

東沢中遺跡 (主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴い本発掘調査が行われている。掘立柱建物跡3棟からなる集落跡が明らかとなっている。出土土器から7世紀初頭に位置付けられている。⁽⁴⁾

天王山古墳群 天王山1号墳～5号墳の5基の古墳からなる。5基とも、本報告と同じ(主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴い本発掘調査が行われ、本報告が刊行されている。これによると、1号墳については、主体部は残存していなかったが、横穴式石室の一部と考えられる大塚が見つかった。2～5号墳については、横穴式石室が検出され、7世紀前半に位置付けられている。

天王山窯跡群 天王山1号窯・2号窯の2基が、(主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴う調査によって明らかとなっている。天王山1号窯は、須恵器と瓦を生産した瓦陶兼業窯で、12世紀代に位置付けられている。2号窯については、窯体・灰原のものは検出されなかったが、瓦がまとまって出土している。この状況から、この付近に窯が存在したものと判断されている。⁽⁶⁾

西田池古墳群 3基の円墳(西田池1号墳～3号墳)からなる。

池ノ尻古墳 円墳1基が周知されている。

成福寺古墳群 2基の円墳(1号墳・2号墳)と2基の方墳(3号墳・4号墳)からなる。このなかで、2号墳については調査が行われ、竪穴式石室を主体とする一辺10mの方墳であることが明らかとなっている。⁽⁷⁾

宮山大塚古墳 帆立貝式の古墳である。

宮山古墳群 6基(宮山1号墳～6号墳)の円墳からなる。

西条古墳群 34基(西条1号墳～61号墳)の古墳からなる(第11図)。A～Dの4群に分布が分かれる。この中で、西条52号墳と西条21号墳が調査によって、その内容が明らかとなっている。

西条52号墳は、竪穴式石室を主体部とする円墳である。石室内からは内行花文鏡や鉄剣に加えて、弥生土器が出土している。⁽⁸⁾ いわゆる墳丘墓の範疇で理解できるものである。

西条21号墳は、一辺約16mの方墳である。主体部は6基検出され、いずれも木棺が直葬されていた。円筒埴輪・家形埴輪に加えて、須恵器・土師器が出土しており、これらの遺物から6世紀初頭に位置付けられている。⁽⁹⁾



第11図 西条古墳群(南西上空から)

人塚古墳 帆立貝形の前方後円墳である。前方部の多くは削平を受けている。墳丘の東側では葺石が認められ、墳丘斜面には円筒埴輪片が散乱している。

この円筒埴輪の特徴から、5世紀前半¹³⁰に位置付けられている。

尼塚古墳 帆立貝形の前方後円墳である。全長52.10mを測り、周濠を伴う。主体部等の詳細は不明である。人塚古墳・行者塚古墳より後出と考えられている¹³¹。

行者塚古墳 全長100mを測る加古川下流域では最大の前方後円墳である。平成7年度に、加古川市教育委員会により発掘調査が行われている¹³²。後円部においては粘土郭が明らかとなり、最古級の馬具・中国製の帯金具の出土が注目されている。

また、くびれ部両側及び後円部2箇所¹³³で造り出しが明らかとなっている（第13図）。家形埴輪・圓形埴輪・甲冑形埴輪・鞍形埴輪・円筒埴輪・朝顔形埴輪などの埴輪類に加えて、魚形・鳥形等の土製品が出土している。

神野北山遺跡 県立新加古川病院整備に伴い平成20年度に本発掘調査が行われている。竈穴住居2棟が検出され、焼成不良の須恵器や窯壁等を伴うことから神野大林窯跡群の工房と考えられている¹³³。

4. 奈良時代～平安時代前期

上村遺跡 (11)・古堂廃寺 (12)・西条廃寺 (24)・下村遺跡 (27)・野村古窯跡群 (34) が周知されている。

古堂廃寺 奈良時代の寺院跡として周知されている。

西条廃寺 法隆寺式伽藍配置をとる、7世紀末創建の寺院跡である¹³⁴（第14図）。塔・金堂ともに瓦積み基壇である。軒九瓦8種、軒平瓦6種などに分類できるが、軒九瓦は素文縁半弁八葉蓮華文を基調とするものである。その他、銅製の風鐸・相輪・水煙なども出土している。

野村古窯跡群 4基の窯跡が周知されている。



第12図 尼塚古墳



第13図 行者塚古墳



第14図 西条廃寺

5. 平安時代後期以降

西条城跡 (16)・西条蔵骨器群 (19)・下村遺跡 (27)・国包構居跡 (29)・宗佐構居跡 (30)・野村構居跡 (32) が周知されている。

西条城跡 赤松則村により室町時代に築城されたとされる山城である。⁽¹⁵⁾

[註]

- (1) 兵庫県立考古博物館『開館記念展Ⅲ 光は西から 弥生人、文明との出会い』2008
- (2) 西口圭介「東沢古墳群・東沢中遺跡 - (主) 加古川小野線 (東播磨南北道路) 道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」兵庫県教育委員会 2011
- (3) 前掲 (2)
- (4) 前掲 (2)
- (5) 渡辺 昇「天王山古墳群 天王山窯跡群 - 主要地方道加古川小野線 (東播磨南北道路) 道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」兵庫県教育委員会 2011
- (6) 前掲 (5)
- (7) 山本祐作「成福寺古墳群」『加古川市史 第四卷』兵庫県加古川市 1996
- (8) 山内紀嗣「西条21号墳」『加古川市史 第四卷』兵庫県加古川市 1996
- (9) 日野 宏「西条52号墳」『加古川市史 第四卷』兵庫県加古川市 1996
- (10) 高野政昭「人塚古墳」『加古川市史 第四卷』兵庫県加古川市 1996
- (11) 高野政昭「尼塚古墳」『加古川市史 第四卷』兵庫県加古川市 1996
- (12) 菱田哲郎「行者塚古墳 発掘調査概報」兵庫県加古川市教育委員会 1997
- (13) 篠宮 正・深江英憲「神野北山遺跡の調査」『神野大林窯跡群 - 県立新加古川病院整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -」兵庫県教育委員会 2010
- (14) 「西条廃寺」『加古川市史 第四卷』兵庫県加古川市 1996
岡本一士「西条廃寺 - 発掘調査報告書 -」加古川市教育委員会 1984
- (15) 兵庫県教育委員会「兵庫県の中世城館・荘園遺跡 - 兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告書 -」1982

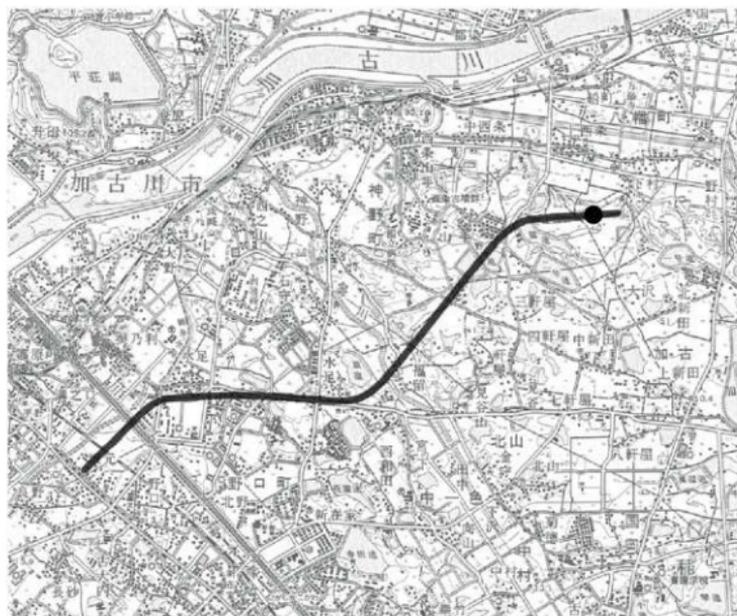
第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

東播磨南北道路 東沢1号墳の調査は、主要地方道加古川小野線（通称：東播磨南北道路）建設に伴うものである。東播磨南北道路は、南播磨地域と北播磨地域間交通の利便性の向上を目的とした地域高規格道路である。具体的には、加古川市野口町坂元（国道2号線加古川バイパス＝加古川中央JCT）と小野市池尻町（国道175号）を結ぶもので、全長12.5kmに及ぶ。このなかで、加古川中央JCTと八幡南インターチェンジ（加古川市八幡町上西条）を結ぶ約5.2kmが第1期事業区間として、事業が進められている（第15図）。

南北道路の調査 当事業に伴う調査としては、すでに坂元遺跡（加古川市野口町坂元）、天王山古墳群・天王山窟跡群（加古川市八幡町上西条字天王山）、東沢2号墳・3号墳（加古川市八幡町上西条）、東沢中遺跡（加古川市八幡町上西条）の調査が行われ、すでに報告書が刊行されている¹¹⁾。

東沢1号墳 今回報告する東沢1号墳は、八幡南インターチェンジ東側の本線部分にあたる箇所である（第16図）。第1期事業区間のなかでは最も北端に位置する地区である。



第15図 東播磨南北道路と東沢1号墳（縮尺 1：50000）



第16図 工事計画と調査位置（縮尺 1：6000）

〔註〕

- (1) 西口圭介「東沢古墳群・東沢中遺跡－（主）加古川小野線（東播磨南北道路）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」兵庫県教育委員会 2011
- 渡辺 昇「天王山古墳群 天王山窯跡群－主要地方道加古川小野線（東播磨南北道路）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」兵庫県教育委員会 2011
- 渡辺 昇「坂元遺跡Ⅱ－東播磨都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 2009

第2節 分布調査・確認調査

1. はじめに

東沢1号墳は、銅鐸出土伝承地として周知されていた「望塚」にあたる場所である。このため、(主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業が計画されるにあたり、分布調査・確認調査を実施した。

2. 分布調査

概要等は以下のとおりである。

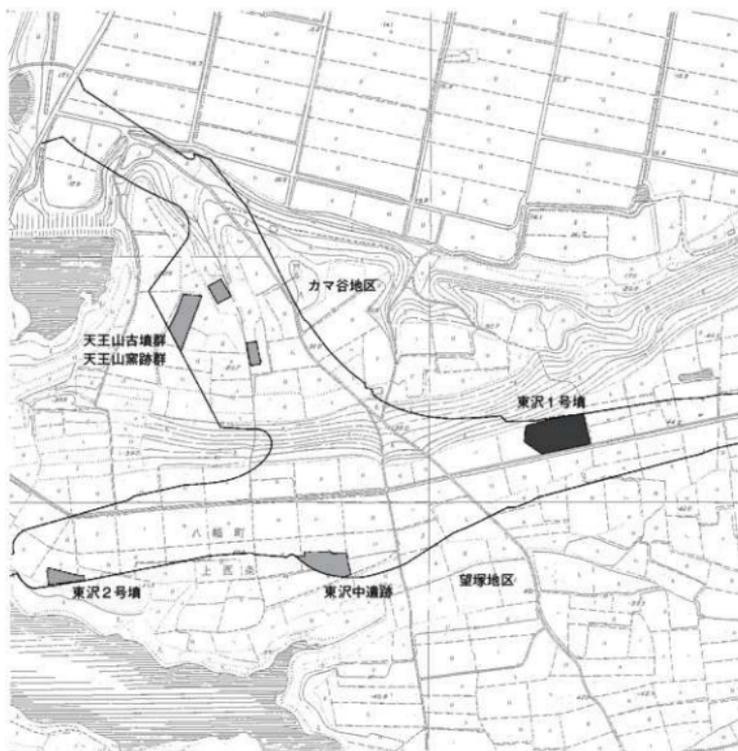
| | |
|--------|--|
| 遺跡調査番号 | 2000032 |
| 調査期間 | 平成12年4月25日～26日 |
| 調査担当 | 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(現兵庫県立考古博物館) 種定淳介・甲斐昭光・大崎晃司・小川弦太・海邊博史 |
| 調査概要 | 調査対象地は、(主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業予定地およびその周辺を対象とした。調査の結果、望塚の周辺においても須恵器等を採集した。このため、望塚を中心とした地域に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いとの判断に至った。 |

3. 確認調査

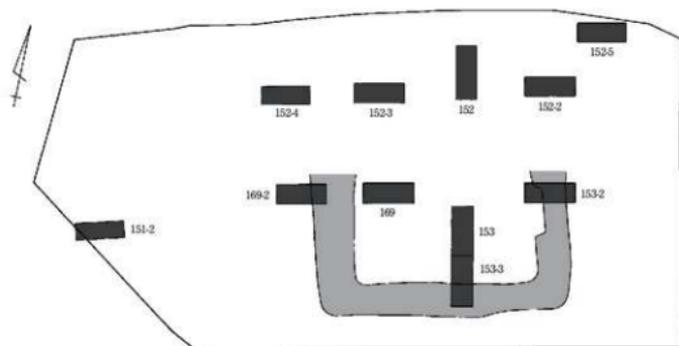
確認調査は、平成12年度に行なわれた分布調査の結果に基づくものである。確認調査は、(主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業予定地全域を対象としたため、広範囲に及ぶもので、大きく「溝之口地区」「水足地区」「カマ谷地区」「望塚地区」の4地区からなる。東沢1号墳に関わる調査は、「望塚地区」に関わる調査である。その概要等は以下のとおりである。

| | |
|--------|--|
| 遺跡調査番号 | 2004197 |
| 調査期間 | 平成16年9月13日～11月26日 |
| 調査担当 | 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山本三郎・吉識雅仁・深江英憲・池田征弘 |
| 調査概要 | 調査は、八幡南インターチェンジ付近北側の本線部分にあたる箇所、「カマ谷地区」と「望塚地区」の2地区からなる。前者は中位段丘面に、後者が高位段丘面に対応するものである。東沢1号墳は「望塚地区」にあたり、延長900m、幅100mを対象とした。5m×2mのトレンチ110本と2m×2mのグリッド1箇所を設定し、調査を行った(第17図)。この結果、西側から「東沢2号墳」「東沢中遺跡」「東沢1号墳」が明らかとなり、本発掘調査を行うこととなった。 |

「東沢1号墳」が明らかとなった地区においては、計11本のトレンチが設定され、調査が行われている(第18図)。このなかで、169-2・153-3・153-2・152-2において溝状遺構(調査の結果では周溝)を確認するとともに、152・152-2で須恵器と埴輪片を、152-5で須恵器と土師器片を、153-2で須恵器と埴輪片に加えて弥生土器の出土を確認している。以上から、当該地区において古墳が包蔵されている可能性が考えられ、本発掘調査を行うこととなったものである。



第17図 カマ谷地区・望塚地区の確認調査



第18図 東沢1号墳に関わる確認調査

第3節 本発掘調査

1. 調査の概要

調査の手順 当初、調査は全て人力により行う予定であった。しかし、調査地内の一部に本体工事に伴う残土があったことや、確認調査で確認できなかった整地層が存在したため、これらについては重機により掘削した。他については、全て人力により調査をすすめていった（第19図）。

調査成果については、11月20日に空中写真の撮影を行うとともに、これをもとに成果の図化を行った。ただし、葦石については手実測を行った。さらに調査終了後、一部を重機により掘削し、銅鐸の埋納のないことの再確認をおこなった。最後に、調査終了後には、安全上の理由から埋め戻しをおこなった。

普及活動 また、調査がほぼ終了した11月24日には、一般市民を対象とした現地説明会を実施し、250名以上の参加が得られた（第20図・第21図）。

2. 調査体制

主な調査体制等は以下のとおりである。

| | |
|---------------|-------------------------------------|
| 遺跡調査番号 | 2007I08 |
| 調査地 | 加古川市八幡町上西条 |
| 調査期間 | 平成19年10月17日～11月27日 |
| 調査面積 | 2006㎡ |
| 調査体制 | 調査員 兵庫県立考古博物館 山田清朝 現場事務員 覚野郁子 |



第19図 調査風景



第20図 現地説明会 (1)



第21図 現地説明会 (2)

第4節 整理作業

はじめに 整理作業は、平成22年度と23年度の2箇年で兵庫県立考古博物館にて実施した。各年度の整理作業の概要・体制等は以下の通りである。なお、土器の水洗については、発掘調査事務所にて発掘調査と平行して行った。

平成22年度

整理概要 土器・埴輪の接合・復元作業を行った。その後、土器および埴輪の実測をおこなった。

整理体制
整理保存課 山本 誠
調査課 山田清朝
囑託員 八木和子・鳥村順子・高橋明子
又江立子・荻野麻衣

平成23年度

整理概要 埴輪の実測（第24図）、土器・埴輪の復元（第22図・第23図）、土器・埴輪の写真撮影、遺構図の整図・トレースを実施した。併せて、原稿の執筆を行なった。

この他、出土埴輪・土師器の胎土分析をパリオ・サーヴェイ株式会社へ、出土須恵器の胎土分析を三辻利一先生へ委託した。この結果は、第4章に掲載している。

また、花園大学の高橋克壽先生には、出土遺物を実現していただき、多くの御教示を得た。その内容については、本文中に折に触れて紹介する。

整理体制
整理保存課 山本 誠・深江英恵
調査課 山田清朝
囑託員 八木和子・鳥村順子・尾鷲都美子・荻野麻衣



第22図 筒形器台の復元作業



第23図 家形埴輪の復元



第24図 家形埴輪の実測

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

1. 基本土層と遺構の検出

基本土層

調査地は以前水田であった箇所である(第25図)。調査の結果、耕作土・床土層の層序が認められ、この下面で遺構が検出されている。基本的には耕土直下での遺構検出となり、現地表面からの深さはわずが20cmである(第26図)。遺構の検出は1面で行われている。



第25図 調査前全景 (南西から)

2. 検出遺構

検出遺構

検出した遺構は、東沢1号墳とこれ以外の大きく2種に分類できる。以上から、本報告では、東沢1号墳とこれ以外の遺構に分けて報告することにする。

さらに、当地には「望塚(ほんづか)」と称される塚が存在した(第28図)。この塚については以前から銅鐸出土地として伝承されていたもので、さらに銅鐸が存在する可能性が考えられていた。このため、



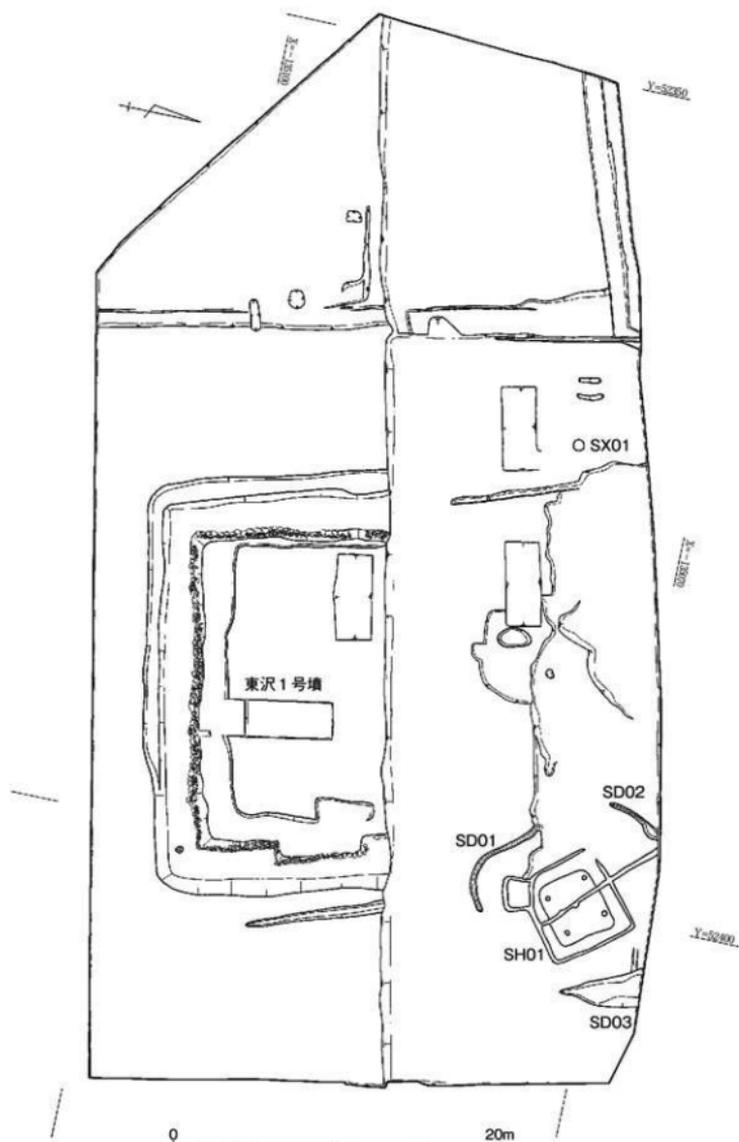
第26図 調査風景

この塚についても、通常の手順で調査を進めていった。したがって、この調査成果についても、1節を設け、報告する。

整地層

なお、検出した遺構は調査区東側に集中し、西側1/3では全く検出されていない。また、段丘崖に近い北側については、東沢1号墳の北半部を中心に削平を受けるとともに、耕作地化のため、旧地形を埋める形で客土が行われていた。このため、この範囲については、遺構は検出できなかった。

ただし、客土にあたっては、東側を含め周囲の古墳・遺跡等を削平し、その土が利用されていたようで、多くの土器・埴輪片等が出土している。これらの遺物については、本報告では、「整地層出土遺物」として報告する。



第27図 平面図

第2節 通称「望塚」の調査

1. 現況（写真図版1）

調査以前

望塚は、2筆にまたがる小規模な塚となっていた（第28図）。塚の頂上部には石柱が立てられていた。裾部での規模は、径3.00mを測る。塚頂部と水田面との比高は、北側で70cm、南側で40cmを測る。



第28図 調査前の望塚

2. 調査の結果

調査の手順

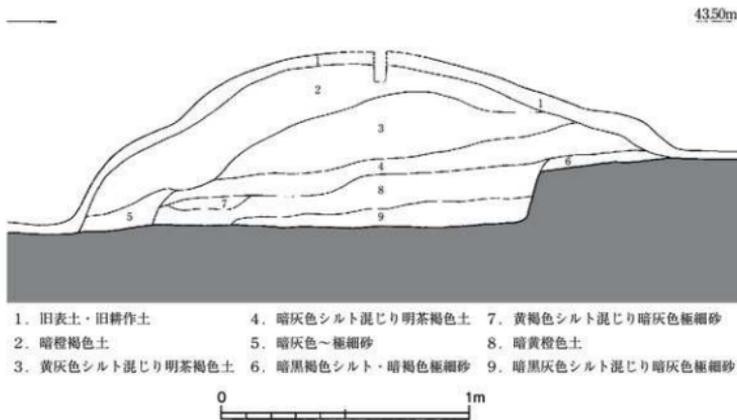
調査は、いわゆる古墳の調査と同様、墳頂部から少しずつ土砂を取り除いていった。塚を掘り下げるにあたって、最終的に塚の断面を観察できるように、塚を半截する形で進めていった（第29図）。



第29図 望塚の調査

調査の結果

塚を掘り下げていく段階において、遺物は全く出土しなかった。また、塚の断面観察においても、いずれも人為的に盛り上げられた層で（第30図）、その最下層を取り除いた段階でいわゆる地山に達した。この地山面は、調査前の水田面から耕作土を取り



第30図 望塚断面

除いた面と一致するものである。以上から、水田を造成後、この塚が盛り上げられたものであることが明らかとなった。

また、塚の下面において、土坑等の掘りこみは認められなかった。

3. まとめ

小結 以上から、調査直前まで存在した、いわゆる「望塚」と称されていた塚は、水

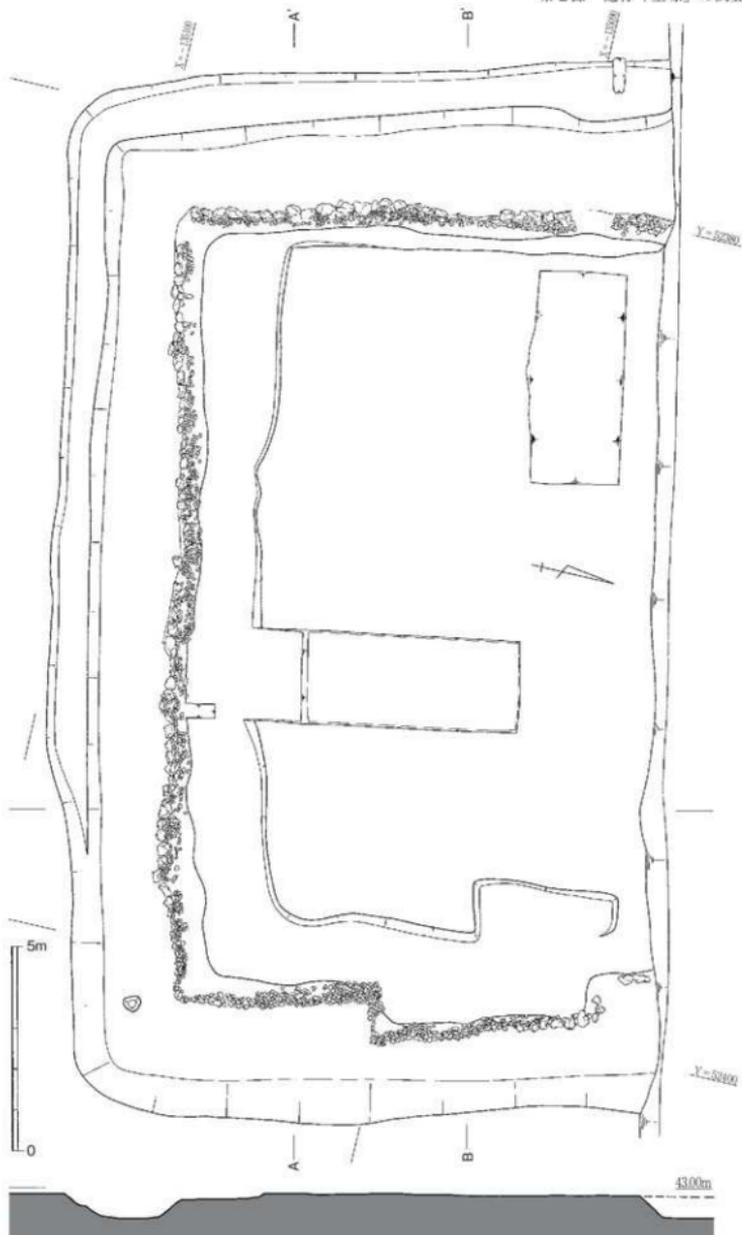
田造成後に造られたものであることが明らかとなった。

新望塚

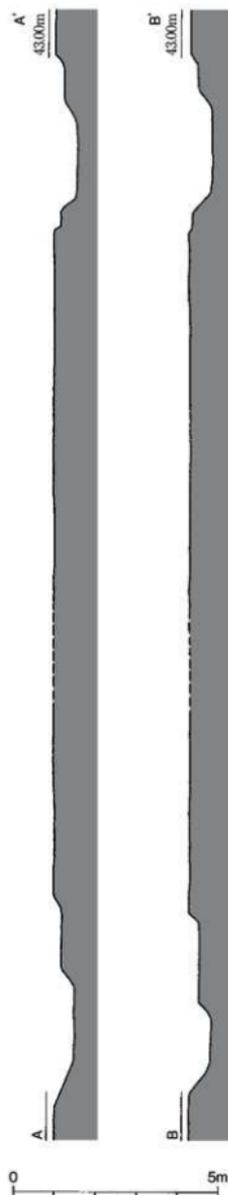
なお、調査で望塚を壊すにあたって、これに替わる新しい望塚が事業予定地北側へ移されることとなった。そして、調査前に新望塚が完成している（第31図）。これにあたり、旧望塚から新望塚へ魂を移す儀礼が執り行われ、旧望塚の上にあった石柱もこの際に新望塚に移されている。



第31図 新望塚



第32図 東沢1号墳



第33図 増丘横断面

第3節 東沢1号墳

1. 概要

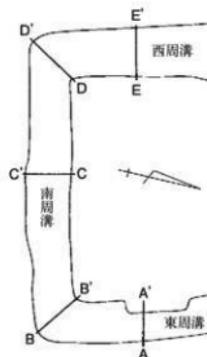
検出状況 東沢1号墳は墳丘部と周溝が検出されている(第32図)。墳丘部については、上部が削平されており、いわゆる主体部は遺存していなかった(第33図)。また、平面的にも、北側半分は削平を受け、全く遺存していなかった。このため、検出できたのは全体の約1/2と考えられる。

形状・規模 墳形は方墳である。その規模は、周溝外側肩部を基準とすると、東西方向で25.35mを測る。また、南北方向で13.95m残存している。

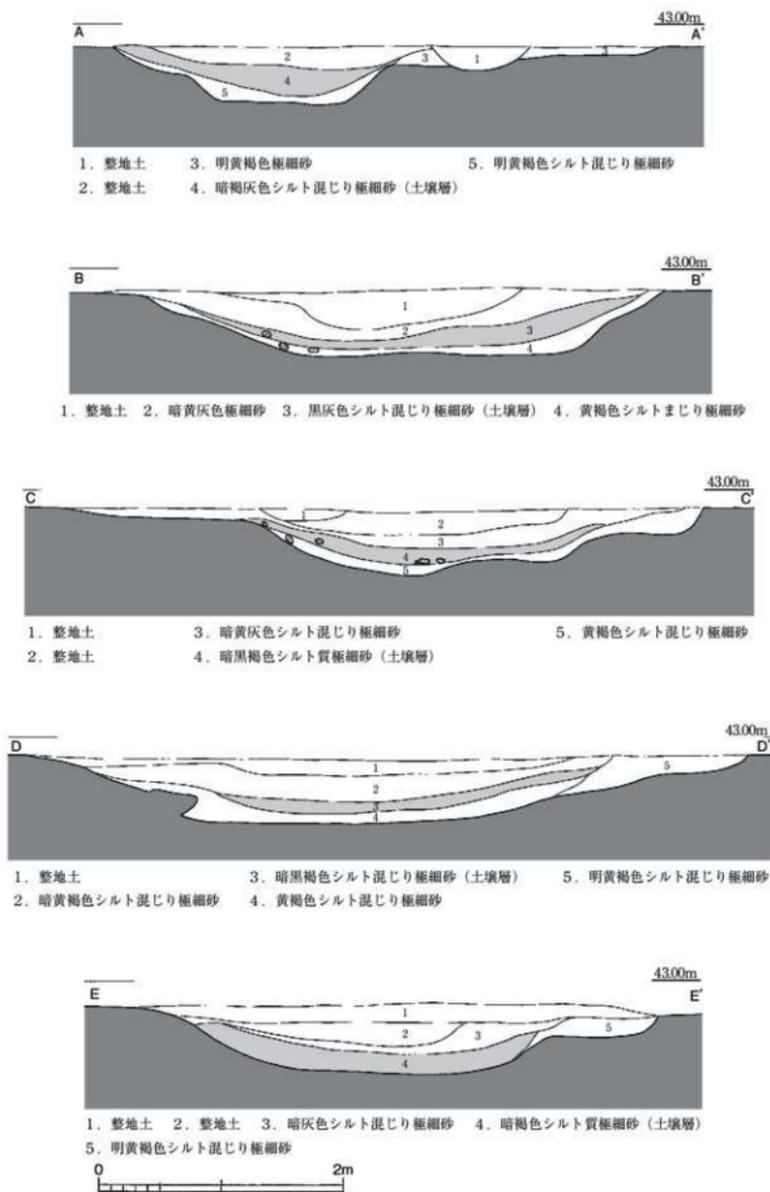
2. 周溝

検出状況・規模 周溝は、コの字形に検出されている(西周溝・南周溝・東周溝:第32図)。その規模は、周溝中心部で、墳丘東側・西側が12m、南側が20mを測る。検出面における周溝肩部のラインはほぼ直線的で、特に外側のラインは東周溝の造り出し部においても変化は認められない。

横断面 全体的に逆台形をなす(第35図)。ただし、西側から南側にかけて、部分的に二段にわたって掘り込まれている。また、墳丘側の傾斜のほうが緩い傾向にあり、その角度は約20°を測る。周溝外側の傾斜は約30°である。



第34図 周溝断面位置図



第35図 周溝断面

横断面の規模は、検出面において、西周溝（E-E'間）で4.20m、南周溝（C-C'間）で3.80m、東周溝で3.30mを測る。また、造り出し部分（A-A'間）では2.30mを測る。

底部はほぼ平坦で、西周溝（E-E'間）で2.00m、南周溝（C-C'間）で1.60m、東周溝で1.80mを測る。また、造り出し部分（A-A'間）では1.00mを測る。

検出面からの深さは50cmで、西周溝から東周溝にかけて一定している。また、その標高も42.30mとほぼ同じである。



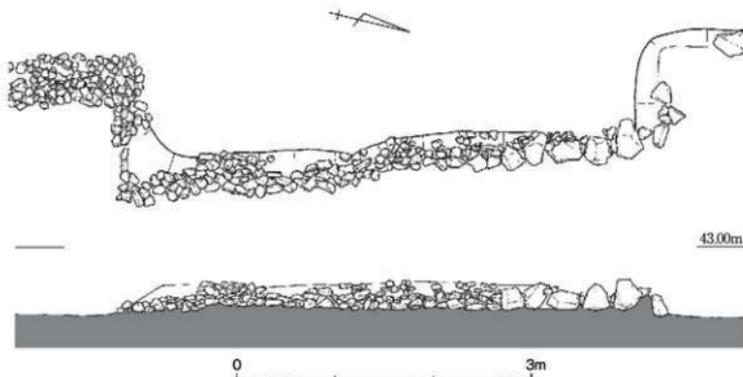
第36図 周溝断面の調査

周溝内埋土

西周溝から東周溝にかけて基本的に同じである。大きく、当地を水田化する際に埋めた層（上層）とそれ以前に堆積した層（下層）とに分けることができる。上層に関しては、当地の水田化の記録から大正時代と考えられる。下層は、基本的に墳丘側から流れ込んだ層である。最下層とその上の層は基本的に同時に流れ込んだ層で、その上の層は流入後土壌化している（第35図 土壌層）。ただし、西周溝（E-E'間）においては、周溝底部まで土壌化している。この土壌化した層を中心に、埴輪や葺石の転石が多く含まれていた。

また、土壌層の上の層についても、D-D'間における土層観察の結果、墳丘に盛りれていた土の流れ込みと考えられる層が認められる。この堆積時期については、土壌層が堆積した時期とはやや時間的隔たりがあるものと考えられる。埴輪片は土壌層ほどではないが出土している。

なお、西周溝から南周溝にかけて（D-D'間・E-E'間）の土層観察の結果、当地区においては一端周溝が埋没後、再掘削されているものと考えられる。その時期については明確にできないが、東周溝土層との関連から、古墳築造時近くまで遡るものと考えられる。



第37図 造り出し

3. 墳丘

はじめに 東沢1号墳の墳丘については、検出面より上部は削平されていた。このため、埋葬施設は明らか、墳丘の盛土そのものも全く残っていなかった。したがって、古墳そのものは、周溝の形態により判断できる限りである。

このなかで、唯一、造り出しが墳丘の特徴を伺うことのできるものである。また、この造り出しを含め、周溝内墳丘側斜面には葦石が葺かれていた。

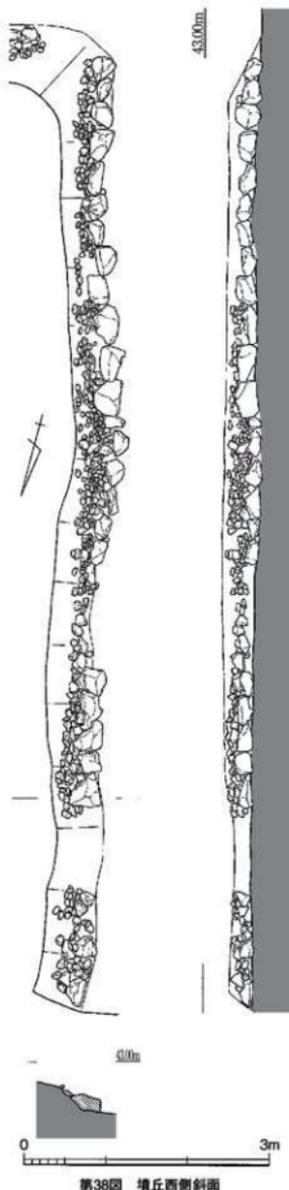
造り出し 東周溝内で検出している（第37図）。基底部および墳丘上面のラインが東側に突出している。その平面形は、長方形をなす。基底部における規模は、南北方向で5.50m、東西方向で90cmである。また、検出面（上面）における規模は、南北方向で5m、その直交方向で90cm～1mである。基底部から上面までの高さは、30cmである。基底部のレベルは周囲の基底部と同じであると共に、一定している。

上面については、墳丘同様、すでに削平を受けているものと判断され、埴輪等の遺物は全く出土していない。しかし、周溝内、造り出しの東側から北側にかけて、埴輪・須恵器などが集中して出土している（第43図：一括遺物）。この一括遺物の出土状況等については、項を改めて報告する（31ページ）。

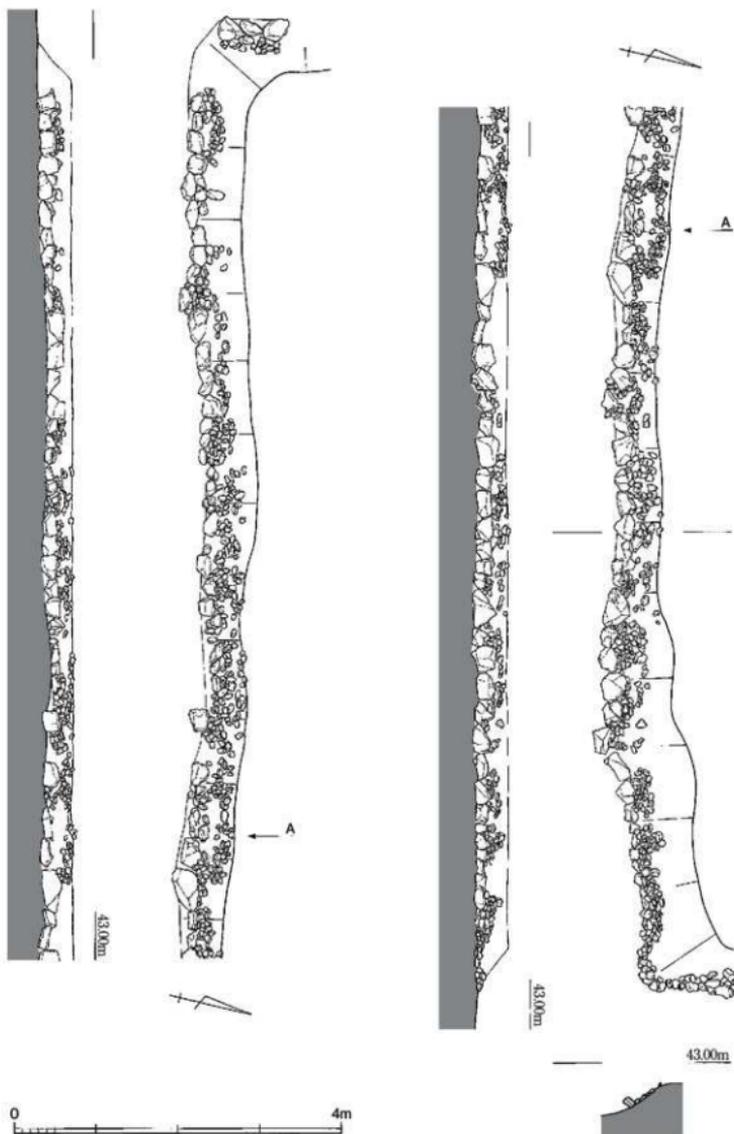
なお、造り出し斜面には、他の墳丘側斜面と同様、葦石が葺かれていた。詳細は、墳丘の葦石と合わせて報告する。

葦石 周溝が残存する範囲においては、一部を除いて残存していた。墳丘側に限られ、周溝外側斜面には葺かれていなかった。

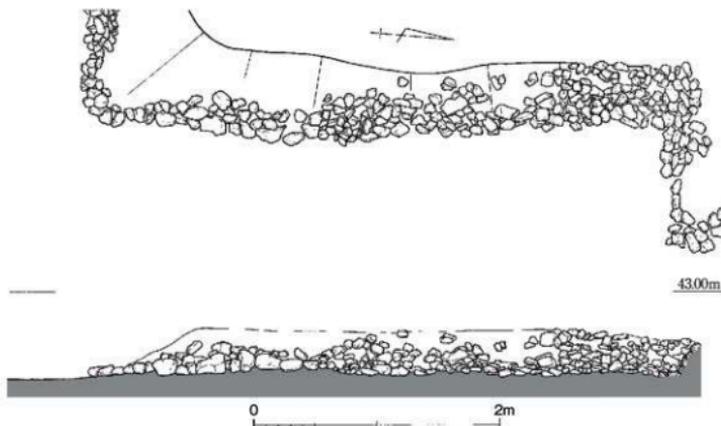
墳丘斜面 墳丘西側（第38図）から南側斜面（第39図）にかけては、ほぼ同様の葺かれ方が認められた。まず、斜面裾部には30～45cm大の凝灰岩からなる角礫が置かれていた。1段のみで、積み上げられた箇所は認められなかった。これらの角礫の背後に、多くは角礫の上に直接積み上げら



第38図 墳丘西側斜面



第39図 墳丘南側斜面



第40図 墳丘東側斜面

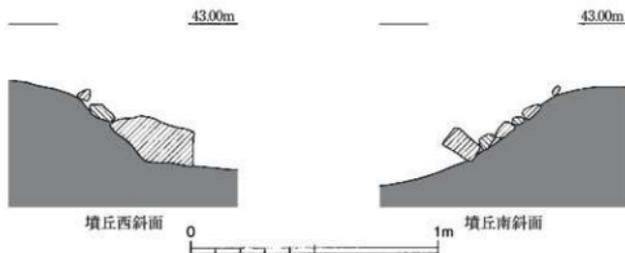
れるのではなく、径10～20cmの円礫が葺かれていた（第41図）。このため、角礫は、他の古墳にみられるような基底石としての機能を果たしているものではない。

また、この角礫は、部分的に認められない箇所も見認められた。墳丘西側中央部、墳丘南側東端部から墳丘東側の造り出しにかけて、において顕著である。特に、後者においては、角礫が置かれていた状況を確認することはできなかった。周溝内からも、その転石は認められなかった。

円礫は、チャートからなり（第4章第1節）、角礫とは明らかに石材が使い分けられている。円礫の葺かれ方は、石相互の重なりがわずかで、貼り石に近い特徴が認められる（第41図）。また、円礫のみからなる墳丘北東隅、造り出し北東隅においても、その葺かれ方に大きな変化は認められなかった。造り出し南側の基部においても同様である。

造り出し

造り出しの南側2/3は、東側墳丘斜面同様、小礫のみが葺かれている（第37図）。ところが、北側1/3は、墳丘西側から南側にかけて見られた角礫のみが残存していた。角礫一石で残存する造り出し上面に達するため、造り出し当初の高さによっては、上背部に小礫が葺かれていた可能性も考えられる。



第41図 葦石断面

4. 出土遺物

(1) 概要

下層出土遺物 東沢1号墳に伴う遺物としては、須恵器・瓦質土器・土師器・韓式土器・ミニチュア土器・埴輪類が出土している。いずれも周溝内から出土したものである。周溝内においては、下層と上層から出土しているが、下層については、東沢1号墳の墳丘上に置かれていたものが落ち込んだものと考えられる。一方、上層から出土した遺物については、周溝内に下層が堆積後、入り込んだ遺物と考えられる。このため、下層出土遺物が当墳に確実に伴うものと考えられる。このため、調査にあたっては、下層出土遺物を中心に、主要な出土遺物について平面的な位置およびそのレベルを記録していった。この平面的な位置をまとめたのが第43図である。

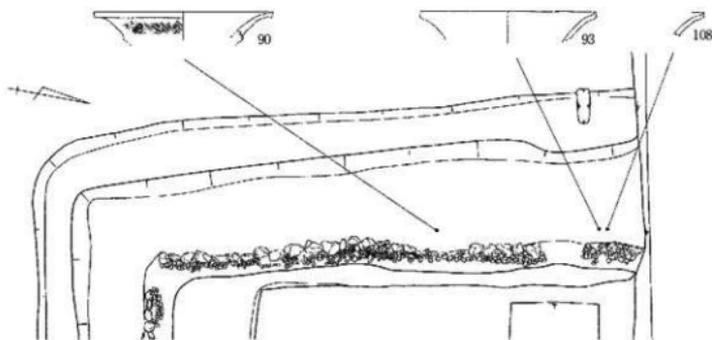
遺物出土位置 これによると、造り出し周囲から最もまともって出土している（東側一括・北側一括）。また、南周溝と西周溝からも出土しているが、前者からの方が多く出土している。さらに、これらの遺物の出土位置で共通する特徴として、いずれも墳丘側に偏る傾向が認められる。以上から、周溝内から出土した遺物に関しては、いずれも周溝外側ではなく墳丘上に置かれていたものと考えられる。以下、主な出土位置について、詳しく見ていくことにする。

(2) 出土位置

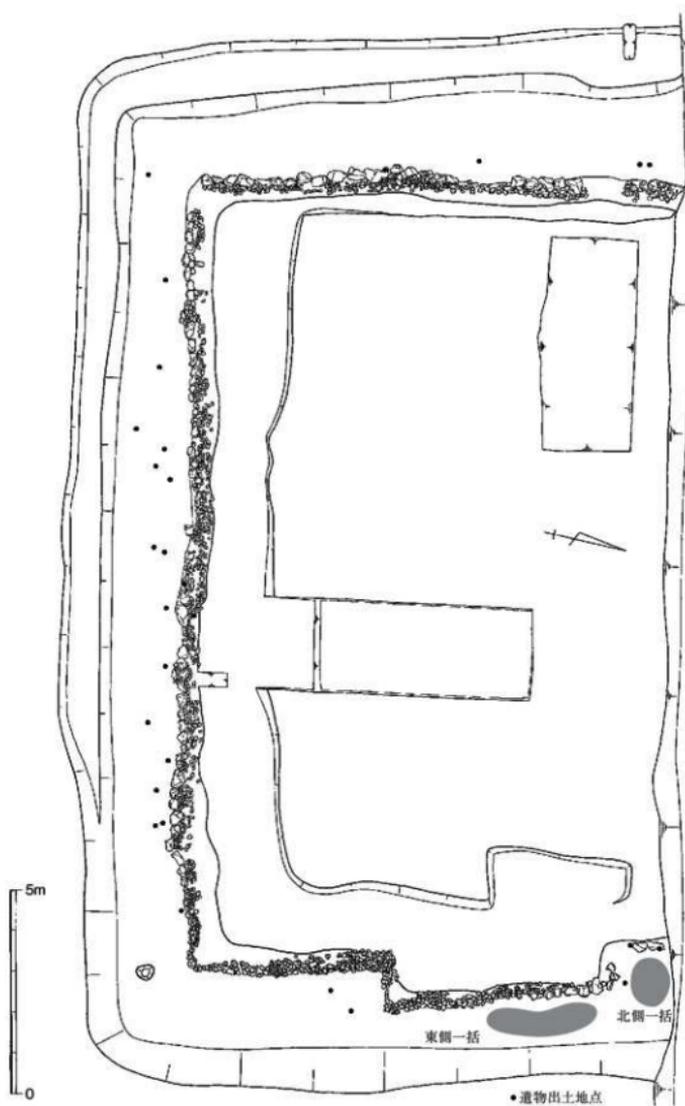
西周溝 円筒埴輪・壺形埴輪が出土している（第42図）。南周溝・東周溝と比較して遺物の出土量は少ない傾向にある。また、須恵器は出土していない。

これらのなかで出土位置を記録できたのは壺形埴輪（90・93・108）に限られ、いずれも西周溝の北半部から出土している。その出土位置は、いずれも墳丘基部よりやや周溝中央よりである。特に、93と108は、出土地点が近接し、形態的にも同様の特徴を備えていることから、同一個体の可能性も考えられる。

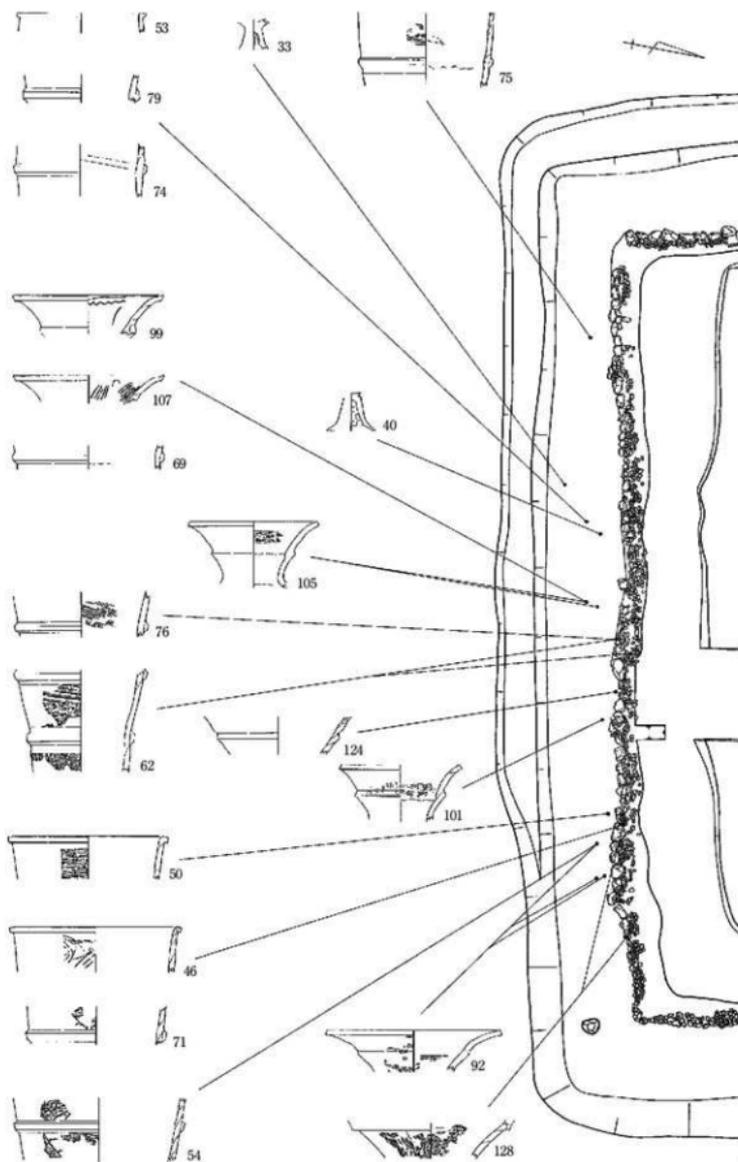
南周溝 円筒埴輪・壺形埴輪・土師器・韓式土器が出土している（第44図）。埴輪類が主体で、土師器・韓式土器はわずかである。また、須恵器は出土していない。出土地点を記録できな



第42図 西周溝内遺物出土位置



第43図 東沢1号墳周溝下層 遺物出土位置



第44図 南周溝内遺物出土位置

かったものを含めると、周溝全域で出土が認められ、一箇所に集中しての出土は認められない。一部葺石直上から出土している例もあるが、多くは周溝内から出土している。

埴輪については、円筒埴輪・壺形埴輪ともに、周溝全体から比較的均等に出土している。1箇所に集中する傾向は認められない。

土師器については、周溝中央部から出土している。韓式土器については、東半部から出土している。

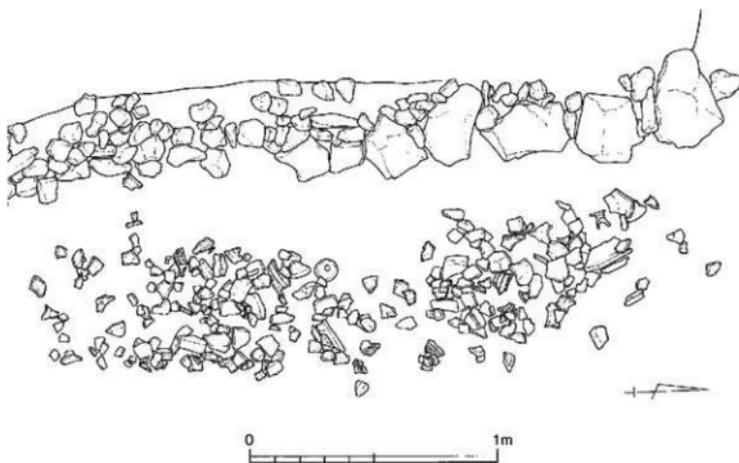
東周溝 造り出しの東側（東側一括）と北側（北側一括）でまとまって出土している（第43図）。また、東側と北側両者と接合関係にある遺物の出土も認められる（第50図）。

東側一括 東側では、造り出し北半部の東側周溝底で、2.5m×50cmの範囲で出土している（東側一括遺物：第45図）。埴輪・須恵器・土師器が集中し、特に須恵器の出土が特筆される。器種としては、器台（18）・壺（12～15）・甌（16・17）・高杯（1～7）が出土している（第46図～第50図）。

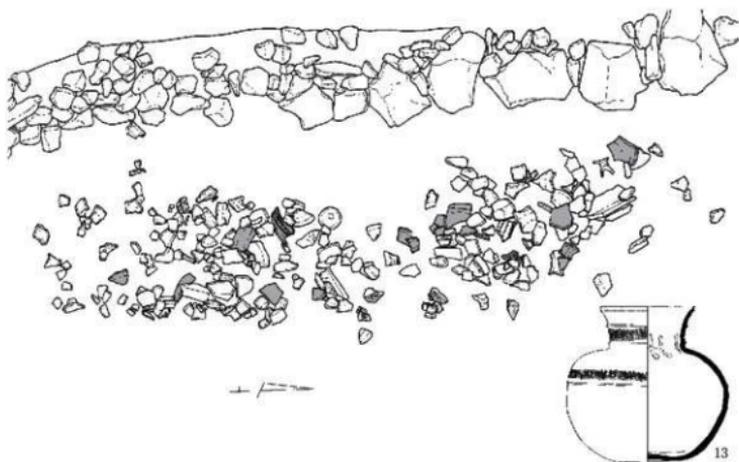
掘出状況 これらの遺物の出土したレベルは一定しているが、周溝底からは出土していない。残存する造り出し斜面葺石の最上位から東側にやや傾斜した流土層（第35図 E-E' 5層）上面から出土している。そして東端部の遺物のレベルは周溝底にほぼ近い状態である。このような出土状況から判断して、これらの遺物は、造り出し上に置かれていたものと考えられ、埴輪の崩壊とともに落ち込んだものと考えられる。

須恵器 このなかで須恵器の出土状況を見ると、壺（13）は、東側一括土器群全体から出土している（第46図）。特に集中する箇所は認められない。他の壺（14・15）については、比較的南半部の限られた範囲に集中して出土している（第47図）。

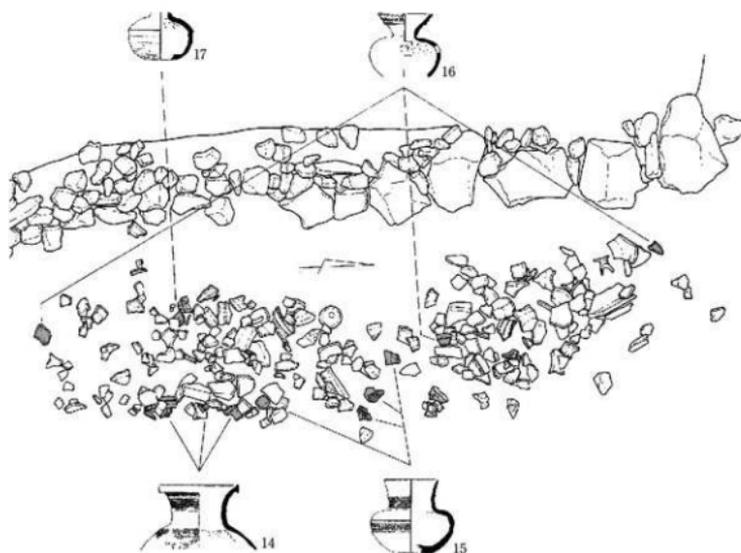
一方12は比較的広範囲から出土している。東側一括の北半部と北側一括から出土している（第50図）。



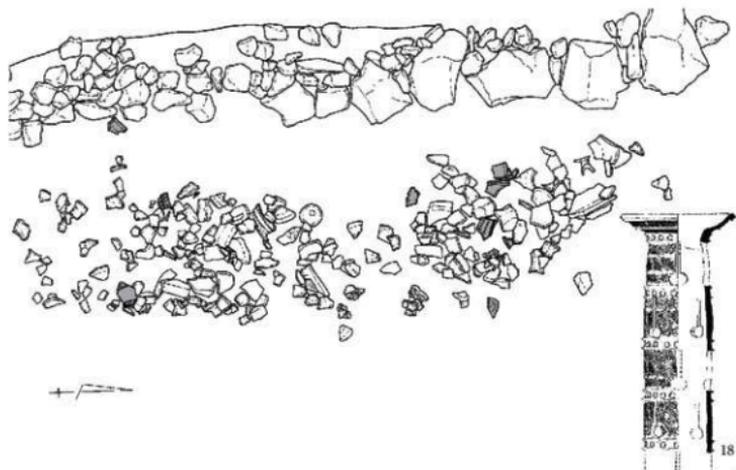
第45図 東側一括 遺物出土状況



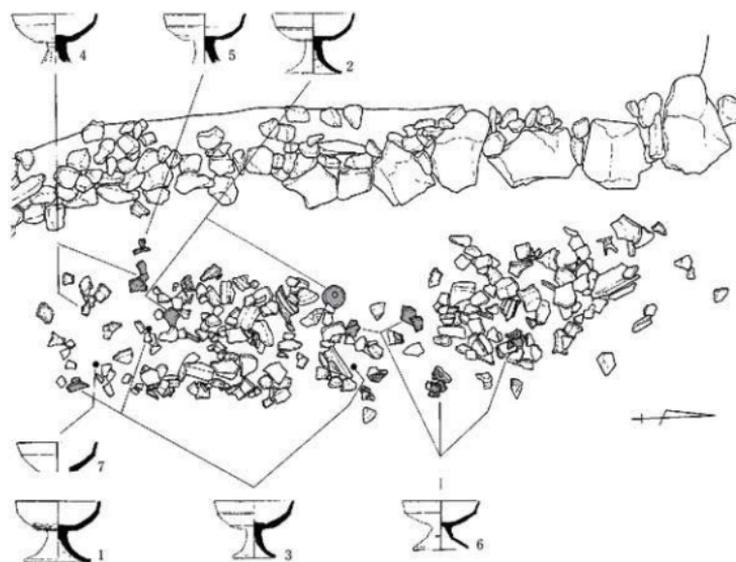
第46図 須恵器壺 (13) 出土位置



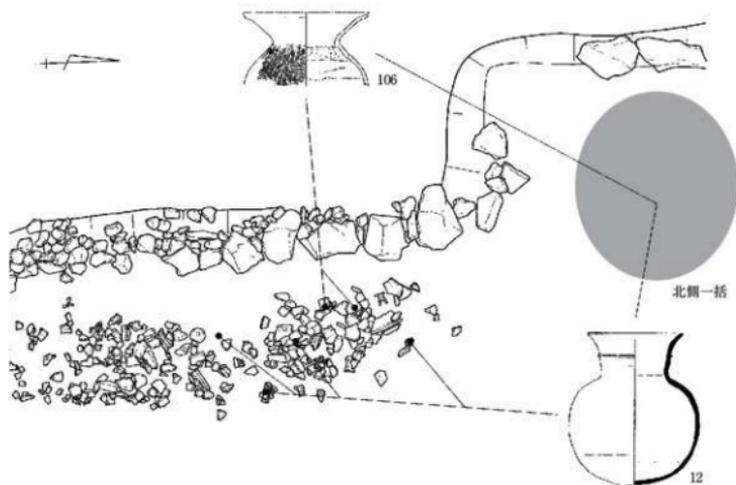
第47図 須恵器壺・甕 (14~17) 出土位置



第48図 須恵器器台出土位置



第49図 須恵器高杯出土位置



第50図 須恵器壺出土位置 (2)

跡 (16・17) については、16が全城に散乱した状態で出土している (第47図)。一方、17については南半部に1個所に限られる。

器台 (18) も、13同様比較的広範囲にわたって出土している (第48図・第51図)。全体的には、北半部からの出土が目立つ傾向にある。出土範囲が13とはほぼ同じことから、13と18がセットで置かれていた可能性も考えられる。高杯については、全体として南側に偏って出土している (第49図)。6を除いては、北側からの出土は認められない。また、3を除いては、比較的一箇所に集中して出土する傾向が認められる。3については、南半部のなかで比較的広範囲から出土している。



第51図 器台出土状況

埴輪

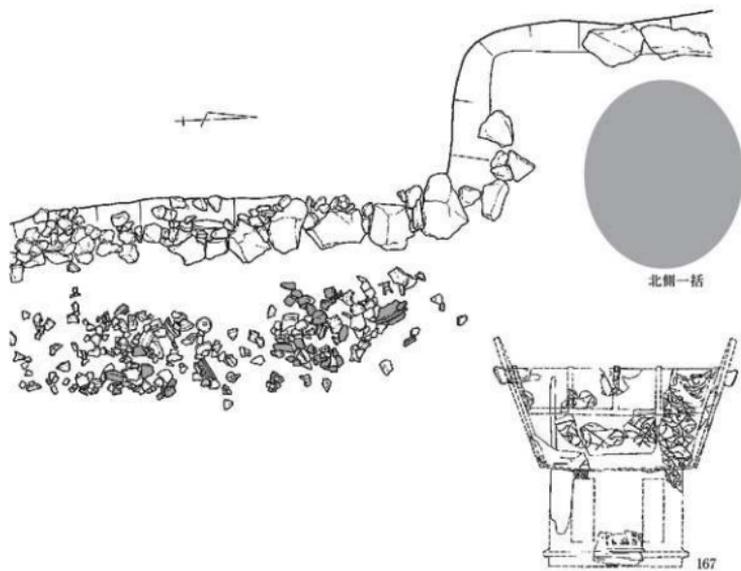
家形埴輪 1 (167)・家形埴輪 2 (172)・壺形埴輪 (106) が出土している。

家形埴輪 1 (167) は東側一括と北側一括から出土している (第52図・第53図)。その出土地点の大半は、東側一括からの出土である。東側一括においては、ほぼ全城から出土しているが、全体的な傾向としてはより北側に集中する傾向が認められる。

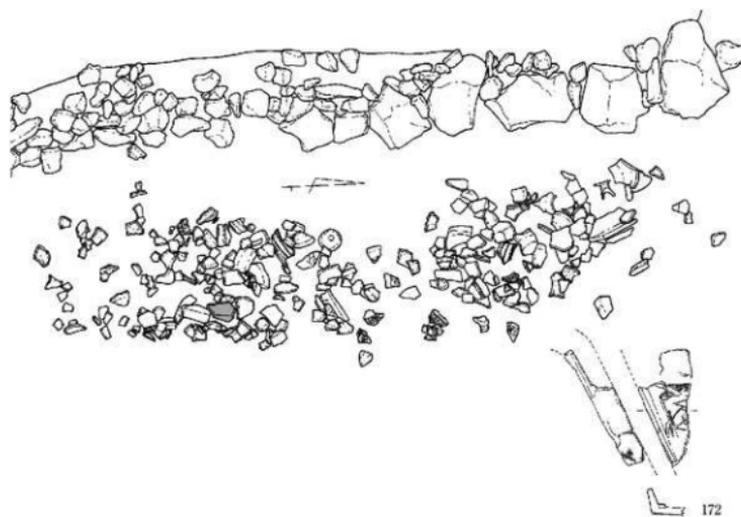
家形埴輪 2 (172) については、東側一



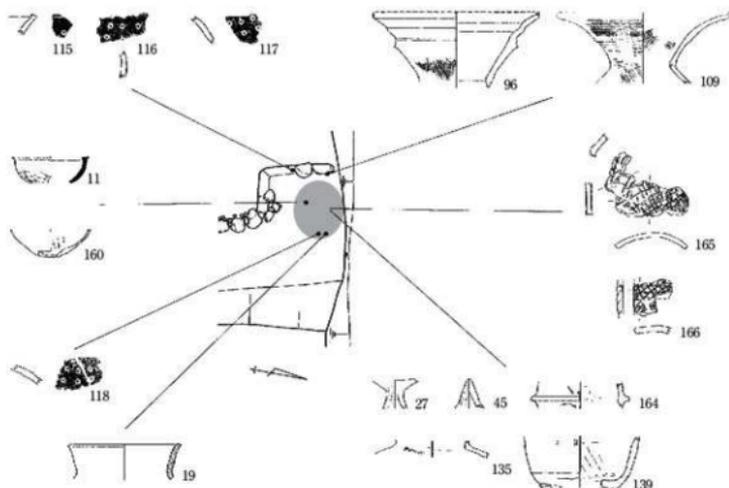
第52図 家形埴輪1出土状況



第53図 家形埴輪1出土位置



第54図 家形埴輪2出土位置



第55図 北側一括出土遺物出土位置

括内から出土している（第54図）。屋根の一部のみのため、出土地点も1箇所に限られる。

壺形埴輪（106）については、北半部と北側一括の一部から出土している。これは、須恵器の壺（12）の出土範囲とはほぼ一致するものである（第50図）。

北側一括 100m×120mの範囲で出土している（北側一括遺物：第55図）。基本的な出土状況は東側一括と同じであるが、造り出し北側基底部から北東方向に傾斜が認められる。また、一部は造り出し北側葺石上面まで及んでいる（巻首図版7）。したがって、造り出しの北西部に置かれていたものが中心に出土しているものと考えられる。

出土遺物 須恵器・土師器・瓦質土器・埴輪類・小型土製品が出土している（第55図）。東側一括と比較して、バリエーションに富む傾向にある。東側一括で目だった須恵器の量がわずかであるのに対して、東側では認められなかった小型土製品や壺形埴輪等の出土が目される。

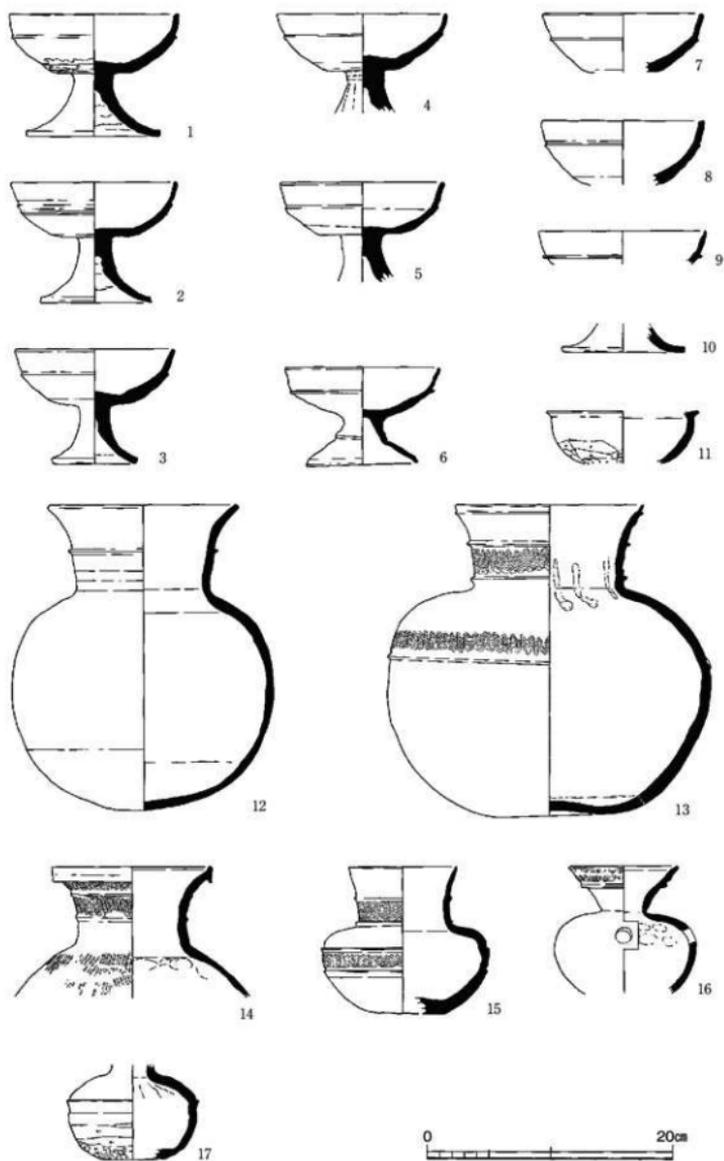
出土状況 須恵器は11（第56図）の鉢のみが出土している。瓦質土器についても19（第57図）の1個体が出土している。埴輪は、壺形埴輪（第66図～第68図・第70図：96・109・118・135・139）と水鳥形埴輪（第71図：164・165）が出土しているが、量的に多くはない。小型土製品としては、27の高杯と45の不明品が出土している。

このほか、12の須恵器壺と106の壺形埴輪は、東側一括と北側一括の両者と接合関係にある（第50図）。したがって、東側一括遺物と北側一括遺物は同じ造り出し上に置かれていた遺物群と理解することができる。

整地層出土遺物 この他、東沢1号埴北側の整地層中から出土した遺物のなかで、古墳時代に位置付けられる遺物の多くは、当墳に伴う遺物である可能性が高いものと考えられる。そこで、これに該当する遺物については、ここで報告する。

(3) 周溝下層出土遺物

| | |
|------|---|
| 出土遺物 | 須恵器・瓦質土器・土師器・韓式土器・ミニチュア土器・埴輪類が出土している。 |
| 須恵器 | 高杯・鉢・壺・甕・器台が出土している（第56図）。 |
| 高杯 | <p>1～10の10個体出土している。杯部が残存する個体については、いずれも同タイプに分類できるものである。内湾気味に立ち上がる体部に対し、口縁部がほぼ直線的に斜上方に立ち上がる。ただし、7については体部も直線的である。</p> <p>体部から口縁部にかけて、内面においてはスムーズに移行するが、外面においてはその境には明確な段が形成されている。この段を境に、体部に対して口縁部の器壁が薄くなり、端部は丸く収められている。また9については、段が突帯状をなしている。この他、2については、段の下側に2条の沈線が引かれている。</p> <p>また、杯部は基本的に回転ナデ調整により仕上げられているが、体部内面はナデ調整により仕上げられている。さらに、1・3・4の体部外面は、ヘラナデに近いヘラ削りにより仕上げられている。7は、回転を利用しないヘラナデ調整により仕上げられている。</p> <p>脚部は、「ハ」字形に開くものが基本であるが、6のように中位で屈曲する個体も認められる。他と異なり、脚部の器壁も薄く仕上げられている。この他、脚部が「ハ」字形に開くものについても、大きく開くもの（1）と、開きが狭いもの（3）が認められる。1～3の裾部は、回転ナデ調整により仕上げられているが、脚部上半はナデ調整により仕上げられている。一方、6は脚部全体が回転ナデ調整により仕上げられている。</p> |
| 鉢 | 11の1個体が出土している。口縁部と底部を欠き、体部を中心に残存する。底部付近外面は静止ヘラ削り、その内面はナデ調整により仕上げられている。体部上半内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。 |
| 壺 | <p>12～15・17の5個体が出土している。</p> <p>12は、完形に復元できた個体である。球形の体部に斜上方に直立気味に立ち上がる頸部に対して、口縁部は外反する。口頸部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、口頸部境外面は断面三角形の突帯をなす。口縁端部は、丸味を帯びた端面が形成されている。</p> <p>体部外面は、肩部が回転ナデ調整により、中位から上位が横ナデ、下半から底部がナデ調整により仕上げられている。内面は、頸部付近が回転ナデ調整、上半が横ナデ、下半が横方向のヘラナデ、底部が指ナデにより、仕上げられている。</p> <p>13は、ほぼ完存する個体である。球形の体部に対し、頸部は直立し、口縁部は外反する。口縁端部は、内端部をつまむような回転ナデにより薄く仕上げられ、外面が突帯状をなす。また、頸部と口縁部の境および頸部下端外面には、断面三角形の突帯がそれぞれ1条認められる。この2条の突帯間には、10本からなる櫛描波状文が描かれている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。また、内面には灰被りが認められ、軸垂れが認められる。</p> <p>体部は基本的に球形をなすが、底部は平底傾向にあり、中央部がやや窪んでいる。体部中位外面には断面三角形の突帯が認められ、この上側には9本からなる櫛描波状文が描かれている。櫛描波状文施文にあたっては、ヘラ削りの後ナデ調整が施されている。他は、横方向のナデ調整により仕上げられている。内面も、横方向のナデ調整により仕上げられ</p> |



第56図 周溝下層出土須恵器

ている。底部は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。また、外面には、突帯上部に軸の溜まりが、体部から底部にかけて軸垂れが認められる。

14は、口縁部から体部上半にかけて残存する。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は上下方に拡張され、垂直な端面が形成されている。口頸部外面には断面三角形の突帯が2条認められ、この間に12本～14本からなる櫛播波状文が描かれている。また、上側の突帯の口縁部側にも同様の櫛播波状文が描かれている。口縁部内外面は回転ナデ調整により、頸部内面はナデ調整により仕上げられている。また、頸部下端外面にはヘラナデにより仕上げられている。

体部外面は平行叩きにより整形され、内面には当具痕がわずかに認められる。基本的にはナデ調整により消されている。外面全面に灰被りがわずかに認められる。

15は、底部をのぞいて完形に復元できた個体である。偏球形の体部に頸部が直立し、口縁部がわずかに外反する。口頸部内外面は回転ナデ調整により仕上げられ、口縁端部は薄く仕上げられている。口縁部と頸部の境および頸部下端外面には断面三角形の突帯が認められ、その間に9本からなる櫛播波状文が描かれている。

体部は、中位外面に2条の断面三角形の突帯が認められ、その間に7本からなる櫛播波状文が描かれている。また、下側の突帯の底部側には浅い沈線状の凹線が認められる。体部内面と上半外面は回転ナデ調整、外面下半はナデ調整により、仕上げられている。また、底部内外面はナデ調整により仕上げられている。底部内面には灰被りが認められる。

17は、口縁部と底部を欠く。体部外面肩部は強い回転ナデにより突帯状をなす。底部はわずかに残存し、平底の傾向が認められる。体部下半底部付近外面は静止ヘラ削り、その上側は回転を利用しないヘラナデにより、仕上げられている。体部中位より上側外面は、回転ナデ調整により仕上げられている。体部上半から頸部にかけての内面は回転ナデ調整により、以下は指オサエにより、仕上げられている。体部上半部外面には灰被りが認められる。

埴 16の1個体出土している。

16は、底部をのぞいてほぼ完存する。頸部から口縁部にかけて斜上方に直線的にのび、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。口縁端部は、回転ナデ調整により端面をもつ。口縁部外面には櫛播波状文が加えられている。また、その下側の口頸部境外面には、断面三角形の突帯が認められる。体部は、内面が横ナデ調整により仕上げられているが、外面については灰被りのため観察できない。体部中位には径1.30cmの円形の孔が開けられている。

器台 18の1個体が出土している。受部と筒部が残存する。口径17.65cm、残存長39.05cmを測る。器高に関しては、接合することができなかったが、突帯間の長さが異なる破片が出土していることから、少なくともさらに1段分はあったものと考えられる。

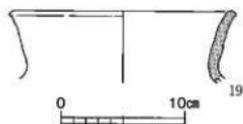
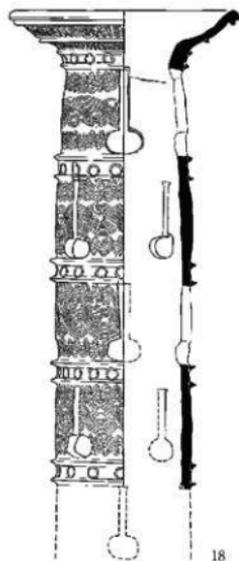
受部は、全体的に内湾傾向にあり、口縁部は大きく肥厚し、外面には断面蒲鉾形の突帯が2条付けられている。さらに、受部外面にも断面三角形の突帯が付けられ、この突帯の上側に10本からなる櫛播波状文が、下側に9本からなる櫛播波状文が描かれている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、内面には灰被りが認められる。

筒部は、二条の断面三角形の突帯により、文様帯が区切られており、この文様帯が4段認められる。二条の突帯は、頂部間で1.5cmあり、その間に径1cmの竹管文が等間隔に押印されている。また、先述したように、接合関係を明らかにすることはできなかったが、この文様帯はさらにもう一段分出土している。

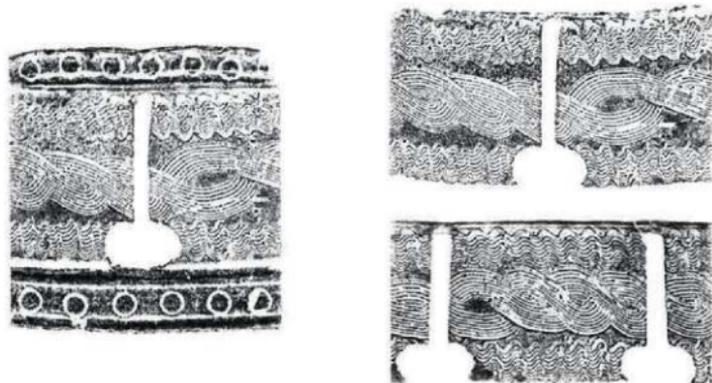
4段の文様帯とも、その文様構成は同じである。上から、櫛描波状文の後組紐文・櫛描波状文が描かれ、その後文様帯を縦方向に貫く鍵形の火焔透かしが等間隔で4箇所に分けられている（第58図）。各文様帯の高さは、ほぼ6～7cmである。

ただし、文様帯によって、下側の櫛描波状文の単位が異なる。その単位は、最上段が9本、上から2段目が10本、同3段目が9本、同4段目が10本である。組紐文は、11本の櫛描文2帯からなる。また、鍵形の火焔透かしが分けられる位置についても、段ごとに千鳥に配されている。鍵形の火焔透かしの規模は、全長5.9～6.9cmを測り、下部の規模は幅が3cm、高さが2cmである。その規模は、各段とも同じである。

なお、筒部内面は横ナデ調整により仕上げられている。また、内面受部との境には、粘土紐の継目が認められる。

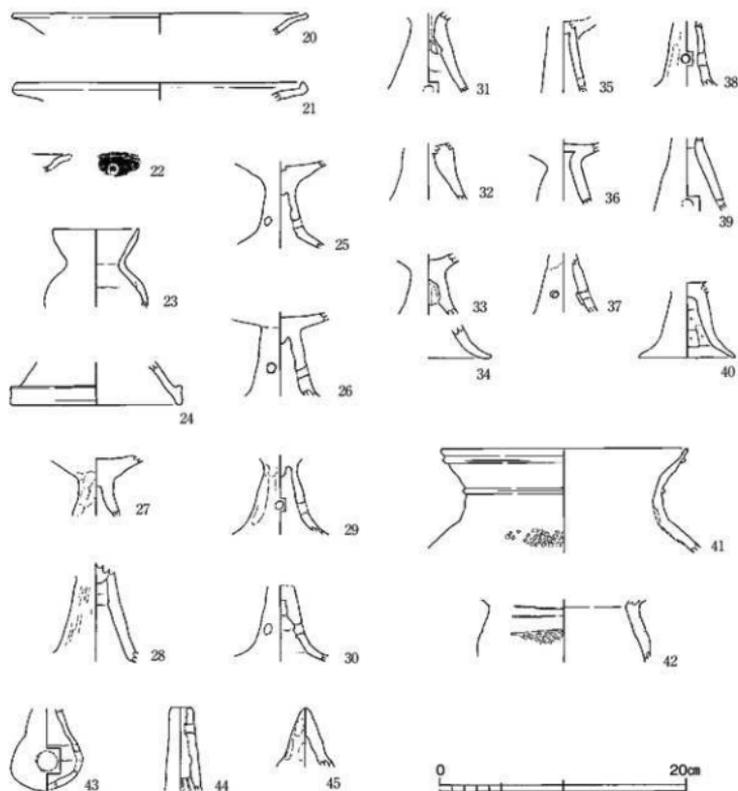


第57図 周溝下層出土須恵器・瓦質土器



第58図 器台拓影 (a:突帯間 b:組紐文 c:組紐文)

- 瓦質土器** 壺の口縁部片(19)が出土している(第57図)。頸部から口縁部にかけて斜上方に直線的のび、端部がわずかに水平方向につまみだされている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。
- 土師器** 甕・皿・壺・脚部・高杯が出土している(第59図)。
- 甕** 20と21の2個体出土している。2個体とも口縁部を中心に残存する小片で、布留式甕の系譜上にある甕の口縁部と判断したものである。20は、内外面とも剥離が顕著で、調整は観察できない。21は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。
- 皿** 22の1個体が出土している。口縁部を中心に残存する小片である。中世の皿の形態に類似していることから、皿として報告するものである。正確には、器種の特定は困難である。内面は横ナデ調整、外面はナデ調整により仕上げられ、外面には径9mmの竹管文が押されている。
- 壺** 23の1個体が出土している。口径6.85cm、最大径8.40cmと小型の土器である。小型丸底壺に分類されるもので、体部中位から口縁部にかけて残存する。口縁部内外面は横ナデ調整により、体部内面は指ナデにより仕上げられている。
- 脚部** 24の1個体が出土している。類例がなく、器種の特定は困難である。須恵器の脚部に類似するもので、脚裾部が残存する。脚端部は上方に拡張され、全体的に磨減が顕著であるが、脚端部はナデ調整により仕上げられている。
- 高杯** 高杯は25～40の16個体が出土している。いずれも、脚部を中心に残存し、完存もしくは完形に復元できる個体は認められない。また、当該期の土師器の高杯と比較して明らかに小型である。また、多くは内外面とも磨減が著しく、調整を観察することは困難である。
- 25は、脚部に径6mmの円孔が3箇所に穿たれている。26も径8mmの円孔が3箇所に穿たれている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。27も内外面ともナデ調整により仕上げられている。28は、透かしは認められず、外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。29は、3方に径7mmの円孔が開けられ、外面はヘラナデ、内面はユビナデにより仕上げられている。30も、3方に径7.5mmの円孔が開けられている。31も円孔の一部が残存する。内面はヘラ削りにより仕上げられている。33と34は、直接接合関係を確認することはできなかったが、色調・胎土等の特徴から、同一個体の可能性が高いものである。35は、他の高杯と比較して、脚部の開きがわずかで直線的である。37は、径6mmの円孔が3箇所に開けられている。40は、脚部がほぼ完形に復元できたもので、裾部が外方に屈曲している。内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。外面は磨減のため観察できない。
- 韓式系土器** 甕が2個体(41・42)出土している(第59図)。2個体とも軟質系であるが、かなりの高温で焼成されている。
- 41は、口縁部から体部にかけて残存する。口頸部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、口縁部と頸部外面に断面三角形の突起が貼り付けられている。体部外面は格子状の叩き整形により仕上げられている。内面は剥離が顕著で、調整等は観察できない。なお、41と同一個体と考えられる体部の小片が多数出土しているが、接合関係を認めることができなかった。



第59図 周溝下層出土土器・土製品・韓式土器

42は、肩部を中心に残存する。頭部外面には横方向の沈線が3条認められる。体部外面には格子叩きが認められる。内面はナデ調整により仕上げられている。

土製品 43～45の3個体出土している（第59図）。

43は、ひさごと考えられる土器である。涙滴状の体部中央部に径16cmの円孔が1箇所が開けられている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。44は、筒状をなす製品で、内外面ともナデ調整により仕上げられている。一端が細くなる傾向にあり、その先端付近に径5.5mmと7mmの円孔が開けられている。漏斗の先端の可能性も考えられる。45は、笠形をなすものであるが、下端を欠く。内外面ともナデ調整により仕上げられている。何を象ったものか不明であるが、内面のナデ調整が外面より粗雑であることから、尖頭部を上側と判断したものである。

埴輪 円筒埴輪・壺形埴輪・形象埴輪が出土している。
円筒埴輪 46～86の41点を図化した(第62図・第63図・第66図)。完形に復元できたものではなく、多くは小片での出土である。

口縁部 46は、口縁部を中心に残存する。口縁端部は粘土を貼り付け、横ナデ調整により断面長方形の突帯状をなす。外面は横方向のハケ調整後、線刻が施されている(第60図)。その内容は不明である。内面はナデ調整により仕上げられている。

47も口縁部を中心に残存する。口縁端部は46ほど明確な突帯状をなさない。端部は肥厚し、断面長方形に仕上げられている。外面は横ハケ、内面はナデ調整により仕上げられている。

48も口縁部を中心に残存する小片である。端部は外方に折り返され、逆L字形をなす。横ナデ調整により、明確な端面が形成されている。外面はナデ調整、内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。

49も48同様口縁端部は逆L字形をなし、横ナデ調整により仕上げられている。ただし、明確な端面は認められない。内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。

50は、口縁端部が48と同様の特徴をなす。外面は、B種ヨコハケにより仕上げられている(写真図版18)。内面はナデ調整により仕上げられている。

51と53は、口縁部が50と同じ特徴を示し、横ナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。外面は磨減が著しく、調整の観察は困難である。

52も口縁部は逆L字形をなすが、端部はナデ調整により薄く仕上げられている。外面は、横方向のハケ調整により仕上げられているが、不連続部が認められる。内面はユビオサエの後、ナデ調整により仕上げられている。

筒部 54は、突帯1条を中心に、筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなし、端部の稜がシャープである。突帯の高さは6mmである。外面はヨコハケ調整により仕上げられ、その後線刻されている(写真図版18)。突帯の上側・下側に認められるが、その内容は不明である。内面はナデ調整により仕上げられている。

55は、突帯1条と筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなし、その高さは6mmである。強い横ナデ調整により仕上げられ、端部はシャープである。外面はヨコハケにより仕上げられ、突帯の上側にはヘラにより直弧文状に線刻されている。内面はナデ調整により仕上げられている。

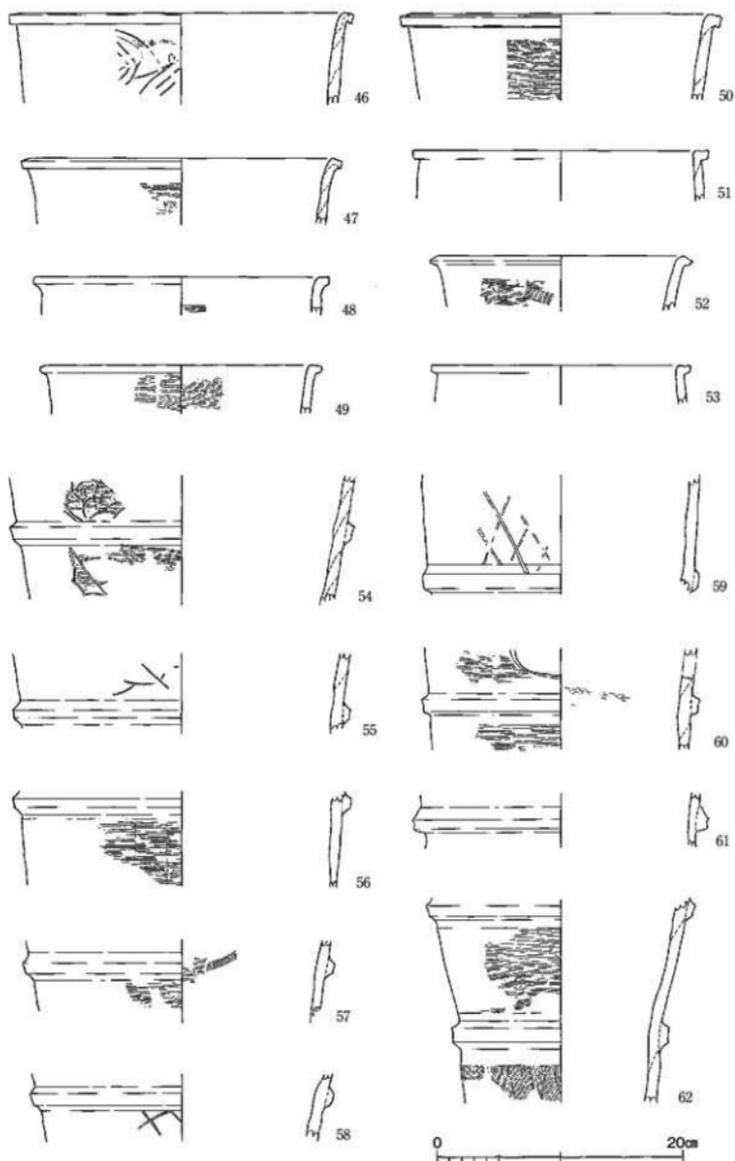
56も、突帯1条と筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなし、その高さは6.5mmである。ナデ調整により貼り付けられ、端部は比較的明瞭な稜が認められる。筒部外面はヨコハケ調整により仕上げられ、静止痕が2箇所認められる(第61図)。内面はナデと指



第60図 46拓影



第61図 56拓影



第62図 周溝下層出土埴輪 (1)

オサエにより仕上げられている。

筒部 57も、突帯1条と筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなし、その高さは6.5mmである。突帯は横ナデ調整により貼り付けられ、端部は稜をなすが、56ほどシャープではない。筒部外面はヨコハケ、内面はナデ調整により仕上げられている。また、内面においては部分的に横方向のハケ調整が加えられている。

58も、突帯1条と筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなし、その高さは5.5mmである。ナデ調整により貼り付けられているが、端部は他の個体と比較してシャープさを欠き、丸味を帯びている。筒部外面は剥離が顕著で調整を観察することはできないが、突帯下に斜格子状のヘラ掻きが認められる。また、突帯の上側に沈線が認められる。突帯貼り付け時の割付の可能性が考えられる。

59も、突帯1条と筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなすが、58同様、端部のシャープさを欠く。高さは4.5mmと、他の突帯より低い傾向が認められる。横ナデ調整により貼り付けられている。筒部外面は磨減が著しく調整は観察できないが、ヘラによる斜格子状の線刻が描かれている。ヘラ掻きは突帯上まで及んでいることから、突帯貼り付け後に線刻されていることが理解できる。内面はナデ調整により仕上げられている。

60も、突帯1条と筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなし、強い横ナデ調整により貼り付けられている。このため、端部の稜はかなりシャープに仕上げられている。突帯の高さは7mmである。筒部の突帯の上側には、円形もしくは楕円形の透かしの一部が認められる。筒部外面は横方向のハケ調整により仕上げられている。内面はナデ調整を基調とするが、部分的に横方向のハケが認められる。

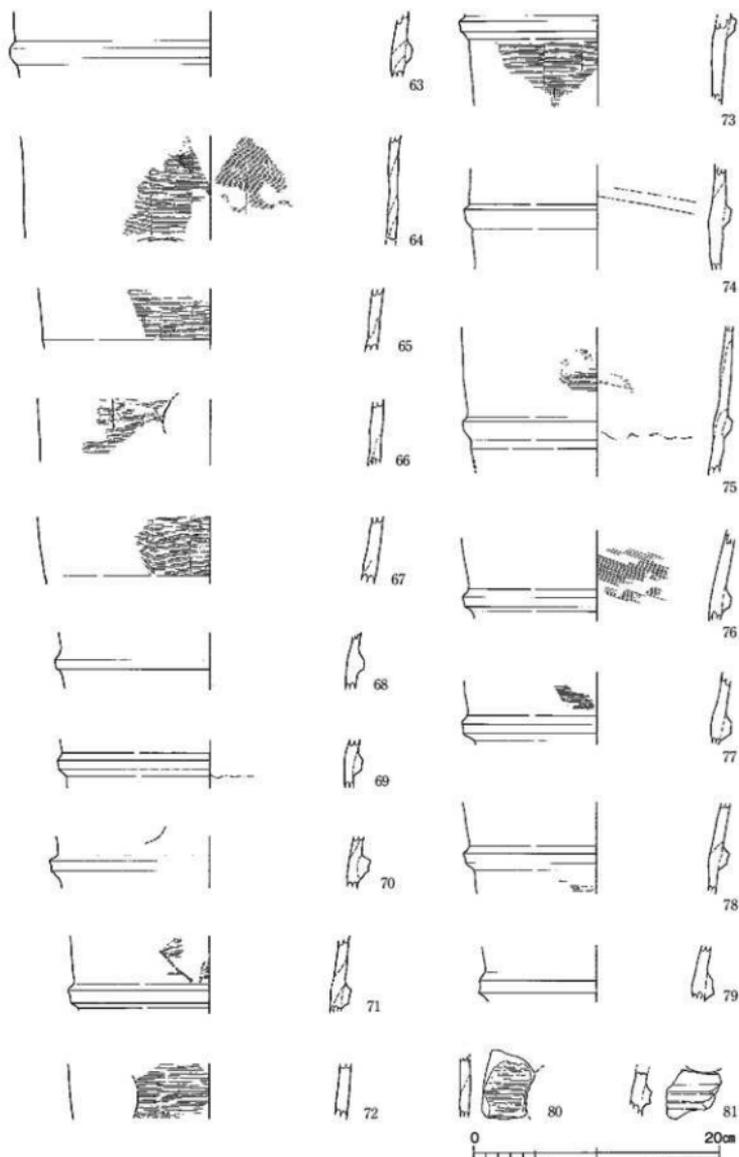
突帯 61は1条の突帯を中心に残存する小片である。突帯は横ナデ調整により貼り付けられ、端部はシャープに仕上げられている。突帯は断面台形をなし、その高さは8mmである。筒部外面はわずかに残存し、突帯上部にヨコハケの一部が認められる。内面は磨減のため観察できない。

62は、2条の突帯を中心に残存する。突帯は、二条とも断面台形をなし、その高さは上側が5.5mm、下側が7mmである。両突帯とも強い横ナデにより貼り付けられており、この結果端部はシャープな稜をなしている。突帯間の規模は、裾部間で8.45cmを測る。筒部外面は、2条の突帯間はヨコハケにより仕上げられているが、静止痕は観察できない。下段突帯の下側はタテハケにより仕上げられている。内面は、ナデおよび指オサエにより仕上げられている。

63は、突帯1条と筒部の一部が残存する。突帯は断面台形をなすが、58同様、端部のシャープさを欠く。高さは4.5mmと、他の突帯より低い特徴が認められる。筒部外面は磨減のため調整は観察できない。内面はナデ調整により仕上げられている。

筒部 64は筒部のみ残存し、突帯は残存しない。外面はヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる。内面もやや斜方向のハケ調整により仕上げられている。下端部に透かしの一部がわずかに残存する。

筒部 65も筒部のみ残存する。外面はヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる。下端部は横ナデにより消されており、突帯の上側と考えられる。内面はナデにより仕上げられ



第63図 周溝下層出土埴輪 (2)

ている。

66も筒部のみ残存する。透かしの一部がわずかに残存する。外面はヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる。下部部は横ナデにより消されており、突帯の上側と考えられる。内面はヘラ削りに近いナデ調整により仕上げられている。

67も筒部のみ残存する。外面はヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる。下部部は横ナデにより消されており、突帯の上側と考えられる。内面はナデ調整により仕上げられている。

突帯

68は、1条の突帯を中心に残存する小片である。突帯は断面台形をなし、その高さは4.5mmである。ナデにより貼り付けられ、端部は比較的シャープに仕上げられている。内面はナデと指オサエにより仕上げられている。

69は、1条の突帯を中心に残存する小片である。突帯は横ナデにより貼り付けられ、端部はシャープに仕上げられている。断面台形をなし、その高さは5.5mmである。内面はナデ調整により仕上げられている。

70も69同様、1条の突帯を中心に残存する小片である。突帯は横ナデにより貼り付けられ、端部はシャープに仕上げられている。断面台形をなし、その高さは7.5mmである。突帯の上側には円形透かしの一部がわずかに残存する。

71は、1条の突帯を中心に残存する。突帯は断面台形をなし、強い横ナデ調整により貼り付けられている。このため、端部はシャープに仕上げられている。突帯の高さは6mmである。筒部は、外面がヨコハケにより仕上げられている。その後、直線を主体としたヘラ描きが加えられている。内面はナデ調整により仕上げられている。

筒部

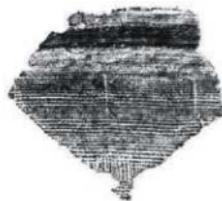
72は、筒部の一部が残存する。円形の透かしの一部が認められる。外面はヨコハケ調整により仕上げられているが、静止痕は認められない。また、下部の一部には縦方向のハケ目が認められる。内面はナデ調整により仕上げられている。

73は、1条の突帯とその下部の筒部が残存する。突帯は断面台形をなし、横ナデにより貼り付けられている。この結果、端部の稜はシャープで、突帯の高さは5.5mmである。筒部外面はヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる(第64図)。また、下部部には縦方向のハケ目も認められる(第64図)。内面はナデ調整により仕上げられている。

74も、1条の突帯を中心とした筒部が残存する。突帯は、強い横ナデにより貼り付けられている。

この結果、断面台形をなし、端部はシャープに仕上げられている。突帯の高さは5mmである。筒部外面は磨減が著しいが、突帯の上側にヨコハケの痕跡が認められる。内面は、ナデ調整と指オサエにより仕上げられている。また内面には、工具の当りが斜方向に認められる。

75も、1条の突帯を中心に残存する。74同様、突帯は強い横ナデにより貼り付けられている。この結果、断面台形をなし、端部はシャープに仕上げられている。突帯の高さは5



第64図 73拓影

mmである。筒部外面は、突帯の上側はヨコハケにより仕上げられている。ただし、突帯の下側は磨滅のため観察できない。筒部内面は、ナデ調整を基調とするが、一部斜方向のハケ目が認められる。また、外面の突帯に対応する内面には顕著な指オサエ痕が認められる。突帯貼り付けに伴うものと考えられる。

76も、1条の突帯を中心に残存する。突帯はナデ調整により貼り付けられ、端部はシャープに仕上げられている。突帯断面は台形をなし、高さは6mmである。筒部外面はナデ調整により仕上げられている。内面は斜方向のハケ調整とナデ調整により仕上げられている。

77も、1条の突帯と筒部の一部が残存する。突帯は横ナデ調整により貼り付けられ、端部はシャープに仕上げられている。断面台形をなし、その高さは6.5mmである。筒部外面はヨコハケにより仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。

78も、1条の突帯と筒部の一部が残存する。突帯は横ナデにより貼り付けられ、断面台形をなす。端部は77ほどではないが、比較的シャープに仕上げられている。突帯の高さは6mmである。筒部外面は全体的に磨滅が著しいが、突帯の下側でヨコハケをわずかに観察することができる。内面はナデ調整により仕上げられている。79も、基本的には78と同様の特徴が認められる。筒部径が小さい傾向にある。

80は筒部の小片である。外面はヨコハケ、内面はナデ調整により仕上げられている。透かしの一部が認められる。

突帯

81は、突帯を中心に残存する小片である。突帯は横ナデにより貼り付けられ、端部がシャープに仕上げられている。断面台形をなし、その高さは5.5mmである。突帯の上側には透かしの一部が認められる。内面は、ナデ調整により仕上げられている。

82は、筒部の小片である。外面はヨコハケにより仕上げられている。ヨコハケ後、斜格子状のヘラ描きが線刻されている（第65図）。内面はナデ調整により仕上げられている。

83も筒部の小片である。外面はヨコハケ後、ヘラ描きが加えられている（写真図版22）。ただし、小片のためその内容は明らかにできない。内面はナデ調整により仕上げられている。

基底部

84は、基底部から下段突帯まで残存する。基底部はナデ調整により端面が形成されている。突帯は強い横ナデにより貼り付けられ、端部はシャープに仕上げられている。断面は台形をなし、その高さは7mmである。基底部外面は、縦方向のハケ調整により仕上げられている。

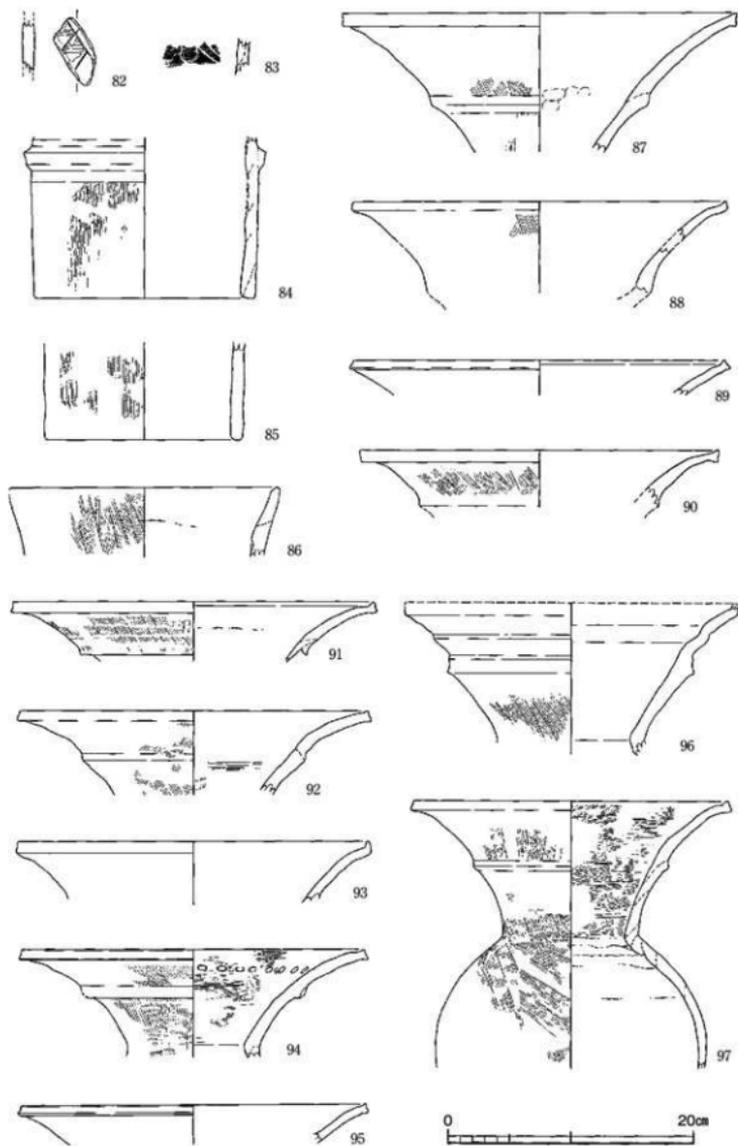
第65図 82拓影



内面は、磨滅と剥離のため観察できない。基底部から下段突帯までの高さは10.40cmである。基底部径は17.80cmである。

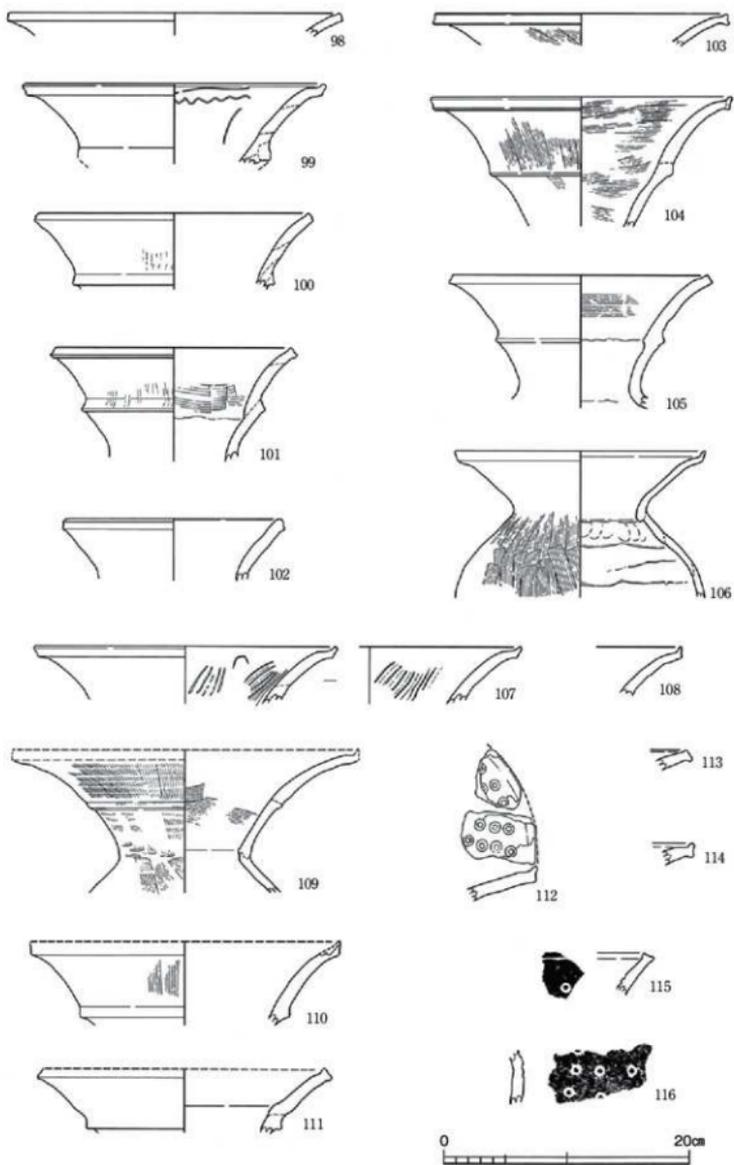
85も基底部を中心に残存する。端部はナデ調整により仕上げられ端面が形成されているが、やや丸味を帯びている。外面は縦方向のハケ調整により、内面はナデ調整と指オサエにより仕上げられている。

86は、円筒埴輪の口縁部と考えている個体である。ただし、口縁部が斜方向に開き、他の円筒埴輪には認められない特徴であることから、円筒埴輪以外の可能性も考えられる。外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整により仕上げられている。



第66図 周溝下層出埴輪 (3)

- 壺形埴輪** 87～162の76点を図化した（第67図・第68図・第70図・第71図）。完形に復元できたものはなく、多くは小片での出土である。
- 口頸部** 87は、口頸部を中心に残存する。外面に段が認められ、頸部と口縁部の境となっている。この段は、粘土の貼り付けの変化により形成されている。口頸部とも縦方向のハケ調整後、ヨコナデによりこの段の整形がなされている。口縁部はヨコナデ調整により仕上げられ、端部は垂直な端面が形成されている。内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。
- 口縁部** 88は、口縁部を中心に残存する。口縁端部は横ナデ調整により上方につまみ上げられている。外面は縦方向のハケ調整後、ヨコナデ調整が加えられている。内面は、ヨコナデにより仕上げられている。
- 89も口縁部を中心に残存する。断面コ字形に仕上げられている。磨減が著しく、調整は観察できない。
- 90も口縁部を中心に残存する。口縁部は複合口縁をなし、その上半部が残存する。口縁端部はヨコナデ調整により上方につまみあげられ、直立する端面が形成されている。外面は縦方向を主体としたハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。また、複合部は段が形成され、その一部が残存するが、外面はヨコナデ調整により仕上げられている。
- 91も口縁部上半部を中心に残存する。複合部外面は断面三角形の突帯状をなし、ヨコナデ調整により仕上げられている。口縁端部は、90同様横ナデ調整により上方につまみあげられ、内傾する端面が形成されている。外面は、突帯の仕上げ以前に縦方向のハケ調整により仕上げられている。内面は磨減と剥離が顕著で、調整は観察できない。
- 92は、複合口縁の下段から上段にかけて残存する。上段と下段の境外面は段をなすが、対応する内面には段は認められない。口縁端部は断面コ字形をなすが、顕著なつまみあげは認められない。上段内面がナデ調整により仕上げられている以外は、ハケ調整により仕上げられている。内面は横方向が主体であるが、外面は縦もしくは斜方向が主体である。
- 93も口縁部を中心に残存する。口縁端部はヨコナデ調整により大きく上方につまみ上げられている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。
- 口頸部** 94は頸部から口縁部にかけて残存する。壺形埴輪のなかで最も良好に復元できた個体の一つである。口縁端部はコ字形をなし、横ナデ調整により明瞭な端面が形成されている。内外面ともハケ調整により仕上げられている。内面は横方向、外面は縦方向が主体である。外面のハケ調整は頸部まで及ぶものである。そして外面のハケ調整後、口縁部上段と下段の境に断面三角形の突帯が強いヨコナデ調整により形成されている。また、口縁部内面には径8mmの竹管文が等間隔に押されている。頸部内面は指オサエにより仕上げられている。
- 95は、口縁部のみ残存し、89と形態的に類似する。端部が横ナデ調整により仕上げられ、明確な端面を有する。内外面は磨減が著しく、調整は観察できない。
- 96は、口縁部から頸部にかけて残存するが、口縁端部をわずかに欠く。口縁端部はその残存状況から判断して、上方につまみ上げられていたものと考えられる。口縁部は複合口縁をなし、上段と下段の境外面は強いヨコナデ調整により、断面三角形の突帯状をなしている。また、口縁部上段もわずかに屈曲傾向が認められる。外面は、頸部付近が縦方向のハケ調整により仕上げられている以外は、ヨコナデ調整により仕上げられている。内面は、



第67図 周溝下層出土埴輪 (4)

口縁部上段がヨコナデ、下段が斜方向のナデ調整により仕上げられている。頸部内面は、磨減が著しく、調整は観察できない。

体部 97は、口縁部から体部上半まで残存する。壺形埴輪のなかで最も良好に復元できた個体である。口縁端部はヨコナデ調整によりわずかに上方につまみ上げられている。内傾する端面が形成されている。口縁部は複合口縁をなし、上段と下段の境外面は、ナデ調整により断面三角形の突帯状をなしている。体部は半球形をなし、頸部には突帯は認められない。体部内面がヘラナデにより仕上げられている以外は、ハケ調整により仕上げられている。頸部付近のナデは粗く、粘土紐痕が顕著である。ハケ調整は、口縁部内面は横方向を、外面は縦方向を、体部は斜方向を主体としている。

口縁部 98は口縁部を中心に残存する小片である。内外面ともヨコナデ調整により仕上げられ、明確な端面が形成されている。断面はコ字形をなす。

99は口縁部を中心に残存する。口縁部は複合口縁をなし、その上半部が残存する。口縁端部はヨコナデ調整により上方につまみ上げられ、外傾する端面が形成されている。複合部外面は粘土の貼り付けにより断面三角形の突帯状をなしている。ただし、対応する内面には変化点は認められない。口縁部内外面の調整は磨減のため観察できないが、内面にはヘラ描きによる文様が認められる（写真図版24）。上から、口縁部に水平な沈線、波状をなす沈線、縦方向の沈線が引かれている。なお、当個体については、その胎土・色調等の特徴から、107と同一個体の可能性が考えられる。

100は、99同様複合口縁部の上半部を中心に残存する。口縁部内面はヨコナデにより、外面は縦方向のハケ調整後横ナデ調整により仕上げられている。口縁部は内端部がわずかに肥厚し、内傾する端面が形成されている。複合部外面は、強いヨコナデ調整により断面三角形の突帯状をなす。

101は、口縁部が残存する。粘土の貼り付け位置に変化をもたせ、強いヨコナデ調整により断面三角形の突帯状をなし、この結果複合口縁状をなす。口縁端部はヨコナデ調整によりコ字形をなす。上半部内面はヨコハケの後ヨコナデ調整により、外面は縦ハケの後横ナデ調整により仕上げられている。下半部は、内面がナデ調整、外面がヨコナデ調整により仕上げられている。

102も口縁部を中心に残存するが、口縁部が複合口縁状をなすかどうかは不明である。口縁部は外反傾向にあり、端部はナデにより仕上げられている。外面はナデ調整により仕上げられているが、内面は剥離のため調整は観察できない。

103は口縁部を中心に残存する。口縁端部は上下に拡張されている。外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。内面は磨減のため観察できない。

口頸部 104は口縁部から頸部付近にかけて残存する。口縁部外面中位はナデ調整により断面三角形の突帯状をいなし、複合口縁をなしている。口縁端部はヨコナデにより上方へつまみあげられている。内面は、上半・下半とも横方向のハケ調整により仕上げられている。外面は、上半が縦方向のハケ調整により仕上げられている。下半部についても、磨減が著しいが、縦方向のハケ調整の痕跡が認められる。

口頸部 105は、口縁部から頸部にかけて残存する。口縁部は複合口縁をなし、その境外面は横

ナデにより断面三角形の突帯をなす。対応する内面もヨコナデの強さの違いから段が形成されている。口縁端部はヨコナデ調整によりコ字形をなし、内傾する端面が形成されている。口縁部内面上半は横方向のハケ調整後ヨコナデ調整、下半は頸部にかけてヨコナデ調整により仕上げられている。外面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ調整により仕上げられている。

106は、口縁部から体部上半にかけて残存する。口縁部は複合口縁ではなく、斜方向にやや内湾気味にのび、端部が上方に大きくつまみあげられている。体部に対して、口縁部の器壁が薄く仕上げられている。また、他の壺形埴輪の口縁部と比較しても、薄く仕上げられている。口縁部外面はヨコナデ調整により仕上げられているが、内面は磨滅のため観察できない。体部外面は縦方向のハケ調整により仕上げられ、内面はナデ調整により仕上げられている。ナデ調整はいいねいではなく、粘土紐痕が顕著に残存するとともに、頸部付近には指頭圧痕が顕著に認められる。

口縁部

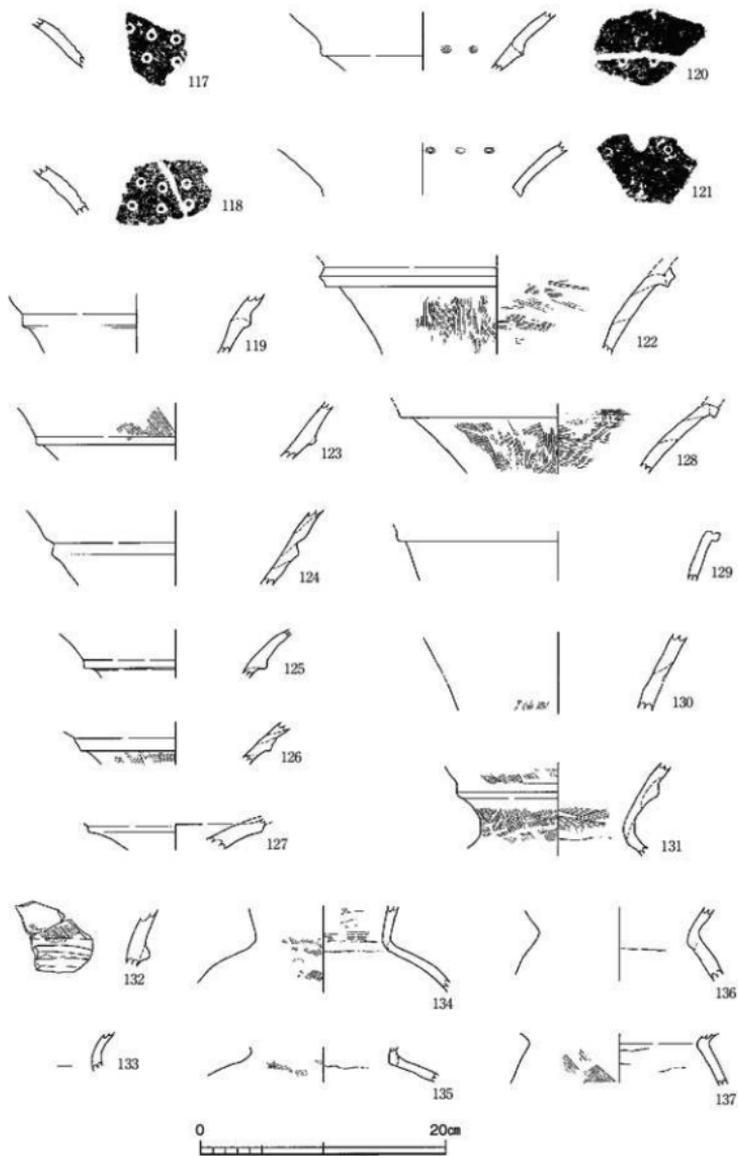
107は、99と同タイプと考えられる口縁部が残存する。口縁端部はヨコナデ調整により斜上方につまみ上げられ、明瞭な端面が形成されている。外面は磨滅のため、調整は観察できない。内面はナデ調整により仕上げられている。また、内面には、へらにより縦方向の沈線が17条引かれている（写真図版26：a）。5条と12条が単位となっており、その間に逆U字形の沈線が引かれている。なお、この個体は、胎土・色調等の特徴から、99と同個体の可能性が考えられる。

108は口縁部の小片である。このため、口径を復元することはできなかった。口縁部の形態は107と基本的に同じで、口縁端部には直立する端面が形成されている。内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。

109は、口縁部から肩部にかけて残存するが、口縁端部をわずかに欠く。端部は、上方につまみあげられているものと考えられる。口縁部は、中央部外面に強いヨコナデ調整による断面三角形の突帯が認められ、複合口縁状をなす。口縁部外面は縦方向のハケ調整後、ヨコナデ調整が加えられている。突帯上にもハケ調整が加えられている。口縁部内面は、横方向のハケ調整後、ナデ調整が加えられている。また、肩部外面についても、口縁部から連続して縦方向を主体としたハケ調整により仕上げられている。内面は、磨滅が著しく、調整は観察できない。

110も口縁部を中心に残存する。口縁部内端部を欠くが、端部はヨコナデによりつまみあげられていたものと考えられる。口縁部下端部外面は、指オサエとナデ調整により断面三角形の突帯状をなし、複合口縁状をなしていたものと考えられる。口縁部内面は、横方向のハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。外面は磨滅が著しいが、部分的に縦方向のハケ調整が認められる。

111も口縁部を中心に残存する。他の壺形埴輪と比較して、器壁が厚く仕上げられている点特徴的である。口縁部は、ヨコナデ調整により外面に断面三角形の突帯状をなす。口縁端部をわずかに欠くが、上方にわずかにつまみ上げられている。外面はナデ調整、内面はへらナデにより仕上げられている。



第68図 周溝下層出土埴輪 (5)

口縁部

112は口縁部の小片である。このため、口径を復元することはできなかった。口縁端部はヨコナデ調整により上方につまみあげられ、直立する外端面を有する。内面はナデ調整により仕上げられた後、竹管文が押されている(第69図)。竹管文は、径8mmを測り、同心円状に4列残存する。外面もナデ調整により仕上げられている。



第69図 112拓影

113と114は口縁部の小片である。113は、端部がヨコナデ調整により斜下方につまみ出され、内傾する端面が形成されている。内面は、磨減が著しく、調整は観察できない。114は端部が上方につまみあげられ、直立する端面が形成されている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

115も口縁部の小片である。このため、口径を復元することはできなかった。口縁端部はナデ調整により両端側へ拡張され、内傾する端面が形成されている。内外面ともナデ調整により仕上げられ、内面には径8mmの竹管文が押されている。竹管文は、1個残存する。

116~118は、体部の小片である。いずれも小片のため全体の形状を復元することは困難であるが、壺形埴輪の一部として報告する。内外面はともにナデ調整により仕上げられている。外面には径9mm(116・117)もしくは1cm(118)の竹管文が押されている。116は7個残存するが、小片のためその規則性は不明である。117は5個残存し、上下2段に押されている。118は7個残存し、上下2段に押されている。

119は口縁部の複合部を中心に残存する。複合部外面はヨコナデ調整により断面三角形の突帯状をなす。外面はナデ調整、内面はヘラナデにより仕上げられている。

120も複合部を中心に残存する。複合部は断面三角形の突帯状をなす。外面は剥離が著しく調整を観察できないが、内面はヨコナデ調整により仕上げられている。また、突帯に対応する内面には、径7.5mmの竹管文が押されている。残存するのは2個であるが、等間隔に押されていたものと考えられる。

121は、口縁部の一部が残存する。胎土・色調等の特徴から120と同一個体の可能性が考えられる。このため、口縁部下半を中心に残存するものと考えられる。外面は磨減のため調整は観察できないが、内面はヨコナデ調整により仕上げられている。この後、径7.5mmの竹管文が等間隔に押されている。残存するのは3個である。

122は複合口縁の下半部である。上部は複合部の剥離面となっており(写真図版28)、外面は断面三角形の突帯状をなす。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。残存状況が良好ではないため明確には判断できないが、突帯は粘土紐が貼り付けられている可能性が考えられる。

123は、口縁部複合部を中心に残存する。外面は、ナデ調整により断面蒲葺形の突帯状をなし、上半部と下半部の境をなしている。外面上半は縦方向のハケ調整、下半はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。内面もナデ調整により仕上げられている。

124も口縁部複合部を中心に残存する。複合部外面は断面三角形の突帯状をなすが、粘

土の貼り付けによるものではなく、複合部は粘土紐の継ぎ合わせにおいて時間的間隔をあけることにより、突帯状に整形されている。内面は横方向のハケ調整後ナデ調整により仕上げられているが、外面は磨減のため観察できない。

口縁部

125も、124と同様の小片である。124同様、外面は断面三角形の突帯状をなすが、粘土の貼り付けによるものではなく、粘土の継ぎ足し方の変化によるものである。指オサエとナデ調整により仕上げられている。他の外面もユビナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。

126も、124・125と同じ部分が残存する。外面は断面三角形の突帯状をなし、強いヨコナデ調整により仕上げられている。また、突帯の下側外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。

127は口縁部下半部を中心に残存する。外面上半部との境付近まで残存し、断面三角形の突帯状をなす。外面はナデ調整、内面はナデにより仕上げられている。

128は、122同様、口縁部下半部を中心に残存する。上部部には上半部との境をなす突帯の一部が認められる。その上端面は粘土の接合面となっており、ハケにより凹凸が付けられている様子を観察することができる（写真図版28）。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。

129も128と同様の小片である。上部部に、複合口縁をなす突帯の一部が残存する。ユビナデにより整形されている。突帯は粘土の貼り付けによるものではなく、粘土紐の接合の際に造られたものである。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

130は口縁部の一部が残存する。その大きさ等から判断して、頸部付近が残存するものと考えられる。上端・下端とも接合面が残存する。外面は縦方向のハケ調整後ナデ調整、内面はヨコナデ調整により仕上げられている。

口頸部

131は頸部から口縁部にかけて残存する。頸部と口縁部の直接の接合関係は認められないが、同一個体と判断して、図上で1個体に復元したものである。口縁部外面には、粘土紐貼り付けによる断面三角形の突帯が認められる。ヨコナデ調整により仕上げられている。外面は、口縁部から頸部にかけて縦方向のハケ調整により仕上げられている。口縁部内面はナデ調整、頸部付近内面は横方向を主体としたハケ調整、頸部内面はナデ調整、肩部内面はヘラナデにより、それぞれ仕上げられている。

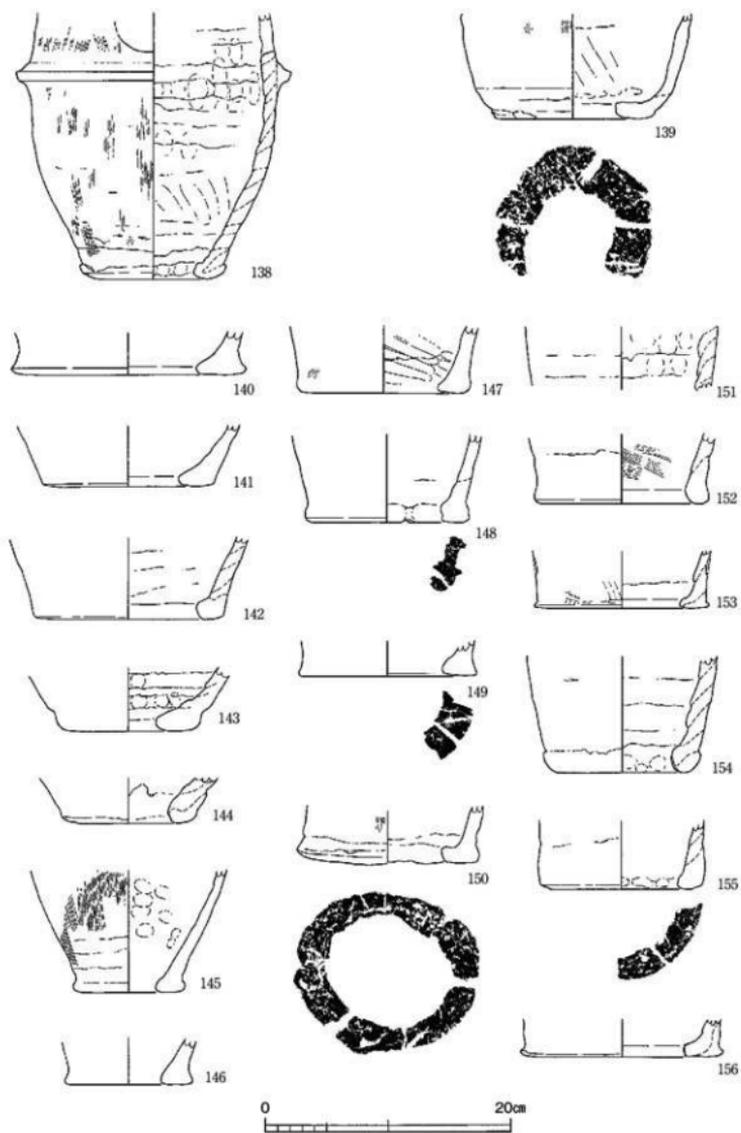
132は、口縁部下端付近の小片であった。このため、径を復元することはできなかった。外面には粘土紐貼り付けによる突帯が形成され、ヨコナデ調整により仕上げられている。外面は斜方向のハケ調整により、内面はナデ調整により仕上げられている。外面のハケ調整は突帯貼り付け前に行われている。

頸部

133は頸部付近の小片である。このため、径を復元することはできなかった。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

134は、口縁部下端から肩部にかけて残存する。口縁部下端は直線的で、外面はナデ調整、内面は横方向のハケ調整により、仕上げられている。体部外面は、縦および斜方向のハケ調整により、内面はヨコナデ調整により仕上げられている。また、頸部内面はナデ調整により仕上げられている。

- 135は、頸部から肩部にかけて残存する。肩部が中心をなし、外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。頸部はヨコナデ調整により仕上げられている。内面については、磨滅のため調整は観察できない。
- 頸部** 136は、口縁部下半から肩部にかけて残存する。135と比べ、肩部の張りがわずかである。外面はナデ調整により仕上げられている。内面の調整は、磨滅のため観察できない。
- 137は頸部から肩部にかけて残存する。肩部の張りは136とほぼ同じである。頸部内外面と肩部内面はナデ調整により仕上げられている。肩部外面は斜方向のハケ調整により仕上げられている。
- 基底部** 138は、基底部から体部にかけて残存するもので、最も良好に残存する個体である。体部中位外面には断面台形をなす突帯が貼り付けられている。粘土紐貼り付けによるもので、上半部がヨコナデ調整、下半部が指オサエにより仕上げられている。突帯頂部を基準とした径は22.30cmである。また、突帯の上側には円形透かしの一部が残存する。復元される径は6.3cmである。また、底部から突帯下端部までの高さは15cmである。外面は全面に縦方向のハケ調整により仕上げられている。底部付近ほど粗い仕上げで、粘土紐の継目が認められる。内面は、ユビナデにより仕上げられているが、粗い仕上げで、粘土紐の継目が顕著に残存する。体部から底部にかけては漏斗状をなし、底部は大きく開けられている。その端部はナデ調整により仕上げられているが、粗い仕上げである。
- 139は基底部から体部にかけて残存する。水平な底部に対して、体部が斜上方にはほぼ直線的に立ち上がる。底部中央は大きく開けられ、ドーナツ状をなす。その端部は指オサエにより仕上げられ、端面が形成されている。また底部内面は指オサエにより仕上げられている。底部下面は粘土塊の付着が認められるように粗い仕上げで、部分的に筋状の窪みが認められる（第70図）。体部外面はナデ調整を基調として仕上げられているが、部分的に縦方向のハケ調整が認められる。また、底部付近はナデが横方向に施されている。体部内面はナデ調整により仕上げられ、底部との境付近はユビナデにより仕上げられている。
- 140は基底部を中心に残存する。基底部は内外に拡張され、ほぼ水平な端面が形成されている。内外面ともナデ調整により仕上げられ、基底部下端面は未調整である。
- 141は、基底部から体部下半にかけて残存する。基底部下面は平坦面をなし、体部が斜外方に立ち上がる。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。
- 142も、141同様、基底部から体部にかけて残存する。基底部は玉縁状をなし、下端がわずかに平坦面をなす。基底部下端から内面にかけてはナデ調整により仕上げられているが、外面は磨滅のため観察できない。内面のナデはやや粗く、粘土紐痕が観察できる。
- 143も、基底部から体部にかけて残存する。基底部は内側に大きく拡張され、下端はナデ調整により平坦面をなす。体部は斜外方にやや内湾気味に立ち上がり、外面はナデ調整により仕上げられている。内面は指オサエにより仕上げられているが、仕上げは粗く、粘土紐痕が顕著に観察される（写真図版29）。また、上端部内面には、縦方向のハケ目がわずかに観察される。
- 基底部** 144は基底部を中心に残存する。基底部下端は玉縁状を呈するが、下端は面をなさない。内外面とも、指オサエとナデ調整により仕上げられ、内面には粘土紐痕が認められる。



第70図 周溝下層出土埴輪 (6)

145は、基底部から体部下半にかけて残存する。基底部は内外両方向に拡張され、下端はほぼ平坦な面をなす。基底部外面は指オサエ、下端面から内面にかけてはナデ調整により仕上げられている。体部はやや内湾気味に立ち上がり、内面は指オサエと指ナデ、外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。

146は、基底部を中心に残存する。基底部外面は指オサエにより外方に拡張され、下端は水平な端面をなす。下端面と体部外面がナデ調整、内面が指オサエにより仕上げられている。

147は、基底部から体部にかけて残存する。基底部は内側に拡張され、下端は平坦面をなす。体部はほぼ直立気味に立ち上がり、外面と下端面はナデ調整により仕上げられている。また、外面の一部には、縦方向のハケ目が観察される。内面は、斜方向のエビナデにより仕上げられている。

148も、基底部から体部にかけて残存する。基底部は体部に対して肥厚し、断面方形をなす。下端は平坦面をなすが、基底面に直交するように溝状の窪みが認められる。基底部内面は指オサエにより仕上げられているが、下端面は未調整である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、内面はナデ調整により仕上げられている。外面は磨滅のため、調整を観察することはできない。

149は基底部が残存する。内外両方向に拡張され、下端部は平坦面が形成されている。下端面には、148と同様の溝状の窪みが認められる。内面はナデ調整、外面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

150は、基底部から体部にかけて残存する。基底部は内側に大きく引き延ばされ、基底部から体部にかけて断面L字形をなす。下端は平坦面をなし、溝状の圧痕が認められる。基底部外面から下端面にかけてはナデ調整、内面は指オサエにより仕上げられている。体部外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。体部内面は、磨滅のため調整は観察できない。

体部

151は、体部のみ残存する。内面調整の粗雑さが他の壺形埴輪と類似することから、壺形埴輪の一部と判断したものである。内面は、指オサエにより仕上げられているが、粘土細痕が顕著に認められる。外面は、磨滅のため調整は観察できない。

152は、基底部を中心に残存する。基底部は指オサエにより玉縁状をなし、平坦な下端面は認められない。基底部に対して体部はほぼ直立傾向にあり、内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。外面はナデ調整により仕上げられている。

153も基底部から体部にかけて残存する。基底部は内側に大きく引き延ばされ、下端は平坦面をなす。下端面と体部内面は磨滅のため調整は観察できない。体部外面は、縦方向のハケに近い板ナデ調整により仕上げられている。

154は、基底部から体部にかけて残存する。基底部は玉縁状をなすが、その形状は一定していない。このため、明確な端面も形成されていない。内面は指オサエ、外面はナデ調整により仕上げられている。体部外面は、縦方向のハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられているが、粘土細痕が顕著に認められる。

155は、基底部から体部にかけて残存する。基底部は内側にわずかに拡張されているが、

下端は明確な面をなさない。ただし、溝状の窪みが認められる。体部は基底部に対して直立気味で、内面はナデ調整により仕上げられている。外面は磨減のため、調整を観察することはできない。

基底部

156は、基底部を中心に残存する。基底部は内側に大きく引きのぼされ、断面L字形をなす。下端はナデ調整により仕上げられ、平坦面をなす。体部は内外面もナデ調整により仕上げられている。

157も基底部を中心に残存する。基底部は外方に拡張され、断面三角形の突帯状をなす。下端は平坦面をなす。外面はナデ調整、内面は横方向の指ナデにより仕上げられている。

158は基底部から体部の一部が残存する。基底部は内側に拡張され、下端は平坦面をなす。体部は基底部に対して大きく開き、立ち上がる。外面はナデ調整により仕上げられているが、内面は磨減のため調整は観察できない。

159は、基底部から体部にかけて残存する。他の壺形埴輪の基底部とは異なり、その形態は、壺形土器の下半部と類似する。また、端部が薄く仕上げられている点も異なる。外面は、間隔の粗いハケにより仕上げられている。内面は指オサエにより仕上げられているが、粘土組織が顕著に認められる。また、全体的に器壁が薄く仕上げられている点が、他の壺形埴輪と特徴を異にする。

160も、形態的特徴は159と類似する。さらに基底部径が2.3cmと小さく、穿孔された壺形土器に近い特徴を有している。さらに、159よりもさらに薄く仕上げられている。このため、壺形埴輪というより壺形土器の可能性も考えられる。体部内面は指ナデ、外面は指オサエにより仕上げられている。内面の指ナデは、基底部付近が斜方向、その上側が縦方向に施されている。

161は、最大径15cmと小型の遺物である。土器の可能性も考えられるが、下部内面の屈曲から壺形埴輪と判断したものである。体部上半を中心に残存し、外面はナデ調整により仕上げられている。その後、ヘラによる2条の直線文が号]かれ、その間に1条のヘラによる鋸歯文が描かれている。また、下側の直線紋の下側には径9mmの竹管文が押されている。残存するのは2個である。内面は指オサエにより仕上げられている。また、頸部内面はナデ調整により仕上げられている。

162は、壺形埴輪の頸部を中心に残存する個体である。他の壺形埴輪と異なり、頸部外面に断面三角形の突帯がヨコナデ調整により貼り付けられている。口縁部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。頸部内外面は磨減が著しく、調整を観察することはできない。

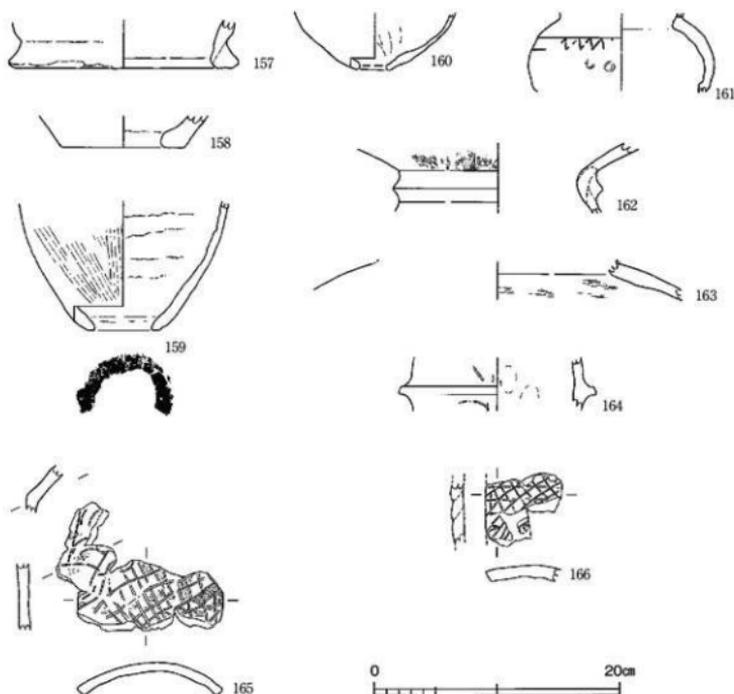
壺形埴輪

163の1点を図化した(第71図)。笠部の一部が残存するのみである。外面は磨減が著しく、調整・装飾は観察できない。内面は、横方向のハケ調整により仕上げられている。

その他

164~166の3点を図化した(第71図)。これらは、胎土・色調等の特徴から同一個体の可能性が考えられる。

164は、円筒状をなし、その外面に断面方形の突帯が付けられている。その高さは1.1cmと突出し、ヨコナデ調整により仕上げられている。突帯を除く外面はナデ調整により仕上げられ、突帯の上下両側に線刻が認められる。内面は指オサエにより仕上げられている。



第71図 周溝下層出土土輪(7)

165は、13.6cm×10.5cmほどの小片である。他に接合できなかったが、同一個体と考えられる小片が多数出土している(写真図版32)。水鳥形埴輪の可能性が考えられる。165の図化部分は、球面の一部をなしているが、外面の一部には稜が認められる。断面の多くは接合可能な面であるが、一部に端面が認められる。内面はナデ調整により仕上げられている。外面はハケ調整後、ヘラ描きが施されている。ヘラ描きは複雑な文様をなすが(写真図版32)、一部は格子目を基調としている。また、ヘラ描きには、断面がV字形のものと、浅い沈線状の2者が認められる。

166も、胎土・色調等の特徴から、165と同一個体の可能性が高いものである。6.25cm×5.95cmの小片で、一端は面をなしている。内外面ともナデ調整により仕上げられているが、内面のナデは粗く、粘土紐の痕が顕著に残存する。この点については、165とは特徴を異にする。外面には、165同様ヘラ描きが認められる。斜格子を基調としている。

家形埴輪 家形埴輪1(167)と家形埴輪2(172)の2棟分出土している(第74図～第76図)。なお、細部の名称については第73図による。

家形埴輪1 家形埴輪1は妻造平屋建建物である。屋根の1/4、両側妻の上半部、壁体部・裾部の一部

が残存する。棟は23.4cm残存し、全体で43.5cmと復元される。屋根部との接合部付近における壁体部の規模は、桁行で26.8cm、梁行で19.5cmである。また壁体部の高さは、屋根部との接合部から15.7cm残存し、全体で18cmと復元される。また基部の高さは1.1～1.3cmで、基部から棟部までの高さは40.5cmと復元できる。器壁の厚さは1cmである。

屋根

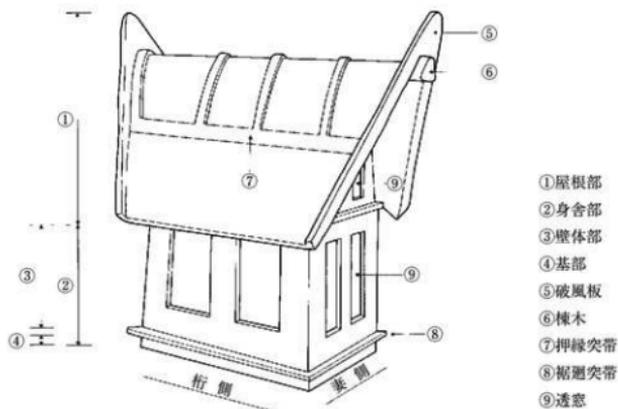
屋根部は、両面とも部分的に残存する。片面（屋根1）は、下半の8割と上半部の妻側1/4が残存する。他面（屋根2）は、上半部の1/4弱が残存する。屋根は、その内面に平



第72図 屋根と壁体の接合

坦面を造り出し、この平坦部と壁体上面を接合させている（第72図）。両面ともハケ調整を基調に仕上げられ、その後押縁突帯が横方向と縦方向に貼り付けられ、最後に加飾されている。

なお、押縁突帯については、両面とも横方向については良好に残存していた。縦方向の押縁突帯の復元にあたっては、屋根2の一部に縦方向の痕跡を確認することができた。この痕跡の位置から、縦方向に2本貼り付けられている状態に復元することができた。さらに、棟部にまたがる押縁突帯を伴う破片が、上記の2本の縦方向の押縁突帯の延長上に復元することが困難であることから、屋根中央部にあったものと復元するに至った。この復元は、押縁突帯により区画された直弧文の文様との整合性からも首肯できるものである。さらに、破風との境にも押縁突帯が貼り付けられている。押縁突帯の規模は、幅が1.2cm、高さが4mmで、断面方形をなす。



第73図 家形埴輪各部名称

屋根1は、押縁突帯により区画された面に直弧文が線刻されている。直弧文は、格子状の直線の交差部を中心に文様が構成されている。

屋根2は、上半部が妻側を中心に、下半部が中央部を中心に残存する。屋根1同様、押縁突帯により区画された中には直弧文が線刻されている。ところが、上半部妻側の一区画内には、網代が表現されている。網代表現は、残存する限りにおいては、この区画内のみ認められるものである。

屋根部には堅魚木等の飾りは認められない。一方、妻側両端には棟木が認められる。屋根・破風板とは別造りで、破風板下部に詰め込み貼り付けられている（第75図：b・c）。

bは、横断面が蒲葺形をなし、下端は平坦面をなし、全面がナデ調整により仕上げられている。多くは棟の下端に接するが、一部突出している。突出した箇所と棟下端部との境は、わずかに段が形成されている。先端は隅田台形をなし、平坦面をなしている。この平坦面は、梁側壁体に対して平行ではなく、破風とほぼ同様の傾斜が認められる。全長10.6cm、先端部の幅3.9cm、高さ3.4cmを測り、破風から2.3cm突出している。

cは、完存はしないが、棟部分とセットで出土している。棟片は、棟木の上側に接して載るもので、その上面に破風との接合痕が顕著に認められる。幅6.1cmで、ハケ調整により仕上げられた後、破風が貼り付けられている。棟木は、棟の下端にあたる箇所と破風より突出する箇所の境は1cmの段差が認められる。これは、棟の厚みに相当するものである。横断面は蒲葺形をなし、その先端は平坦面をなし、その面は破風と同様に傾斜している。全面がナデ調整により仕上げられている。残存長9.3cm、突出部の高さ3.1cm、棟片との重複部分の高さ3.1cmを測る。

壁体

壁体は、両側の梁（梁1・梁2）とコーナー部を中心に残存する。両側の梁は、ともにハケ調整を基調に仕上げられている。

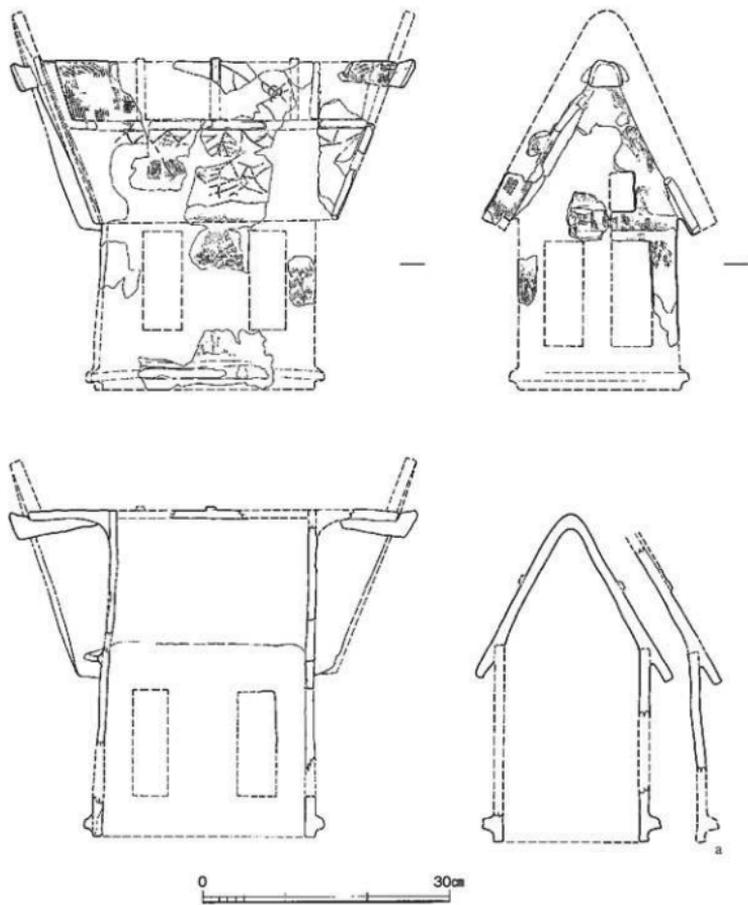
梁1の梁側上半部の一部には長方形透窓の一部が認められる。規模は縦5cmで、横は3.2cmと推定される。復元できたのは1箇所であるが、2箇所にあった可能性も考えられる。

梁1下半部については一部の残存であるが、長方形の透窓が表現されている。その規模は、13cm×5cmで、梁2の状況から2箇所あったものと復元される。基部までは残存しない。上半部と下半部の境には突帯が貼り付けられていたようであるが、その剥離痕のみ残存する。その剥離痕から、ハケ調整後に貼り付けられている。

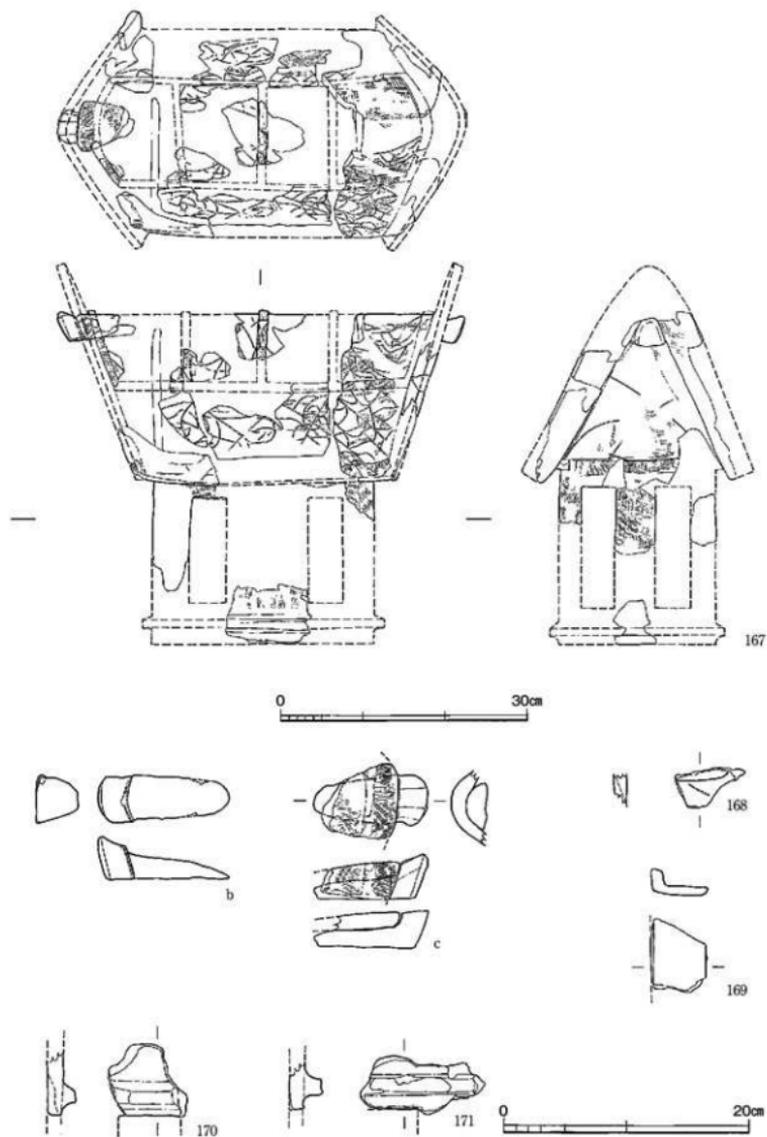
梁2も上半部を中心に残存する。ただし、長方形の透窓は認められず、逆に直弧文らしき線刻が認められる。線刻は、ハケ調整後、さらには突帯貼り付け後に行われている。ハケ調整は下半部へ連続して施されたもので、下半部において顕著に残存する。その後上半部と下半部の境に突帯が貼り付けられている。突帯そのものは残存しないが、破風との接合部付近にわずかに残存する。断面方形をなし、その高さは1.2cmである。

下半部には、長方形の透窓が2つ表現されている。その幅は、4.3cmと4.4cmで、その中間は4.8cmである。この結果、透窓を除く部分が柱表現となっている。

桁側については、屋根1側はコーナー部分を中心に残存するのみである。コーナー付近に長方形透窓の一部が認められる。その規模を明確にすることはできないが、高さは7.1cm残存する。この透窓よりコーナー側が隅柱の表現となっている。



第74図 家形墳輪 1 (1)



第75図 家形埴輪 1 (2)

屋根2側の桁行についても、一部残存するのみである。両コーナーの一部と壁体・基部に限られる。両コーナーは隅柱の表現となっており、ハケ調整により仕上げられている。壁体についても同様である。

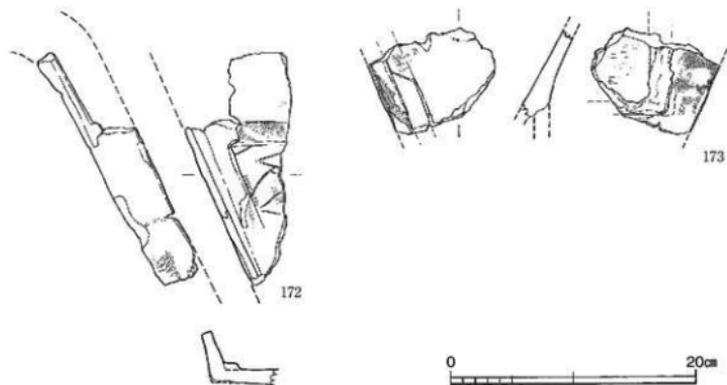
基部 横方向の裾廻り突帯とその下部が残存している。裾廻り突帯は、押縁突帯より大型で、断面方形をなす。その規模は、幅24cm、高さ15cmである。基部は、ナデ調整を基本に仕上げられ、ハケ調整は認められない。また底部は、未調整である。

壁体の柱表現については、梁側同様、各コーナー付近の透窓により表現されている。その幅は妻側で27cm、桁側で46cmである。

他 168については、表面に直弧文が線刻されており、屋根もしくは壁体の一部と考えられる。また、169については、隅柱の一部である。170は、壁体の一部と考えられる。横行する突帯が貼付けられていることから、妻側の一部と考えられる。下端は透窓の上端となっている。突帯の規模は、基部における幅23cm、高さ11cmを測る。171も同様の破片と考えられ、下端に透窓の一部が残存する。突帯の規模は、基部における幅17cm、高さ155cmを測る。

家2 屋根の一部と破風の一部分が残存する（第76図）。屋根の押縁突帯の幅が家形埴輪1と異なることから、別の家形埴輪と判断したものである。屋根は、破風板との境に押縁突帯が貼り付けられている。また、横方向の押縁突帯の一部とその剥離痕が認められ、これらの押縁突帯による区画内には直弧文が線刻されている。屋根は、ハケ調整を基調とし、その後押縁突帯が貼り付けられ、直弧文が線刻されている。破風板もハケ調整を基調とし、内外面ともナデ調整により仕上げられている。残存する最大幅は41cmである。

173についても家形埴輪2の一部である可能性が高い破片である（第76図）。胎土・色調等の特徴も類似する。屋根の一部、隅柱との接合部と考えられ、内面にはその剥離痕が認められる。内面は、ハケ調整により仕上げられている。外面には破風板の剥離痕と、破風板との境をなす押縁突帯が残存する。押縁突帯の規模は、幅が16cm、厚みが5mmである。



第76図 家形埴輪2

(4) 周溝上層出土遺物

概要 周溝下層が埋没後に堆積した遺物である。人為的に埋められた層であることから、周囲の古墳・遺構に起因する遺物群と考えられる。周溝の埋没時期を示す資料、あるいは周囲の遺構の時期を検討する資料、となるものと考えられる。古墳時代から奈良時代にかけての須恵器が出土している。器種としては、高杯蓋・杯蓋・杯身・杯B・壺の各器種が出土している（第77図）。

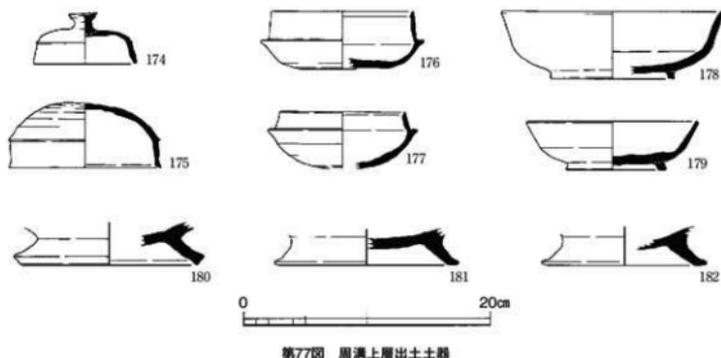
高杯蓋 174の1個体が出土している。完形に復元できた個体で、天井部には突出したつまみが付く。体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、ヘラ削り痕は認められない。端部は薄く仕上げられている。内面には若干の灰被りが認められる。

杯蓋 175の1個体が出土している。完形に復元できた個体で、天井部は丸味をおび、その2/3はヘラ削りが及んでいる。端部の特徴から、TK23型式に位置付けられる。

杯身 176と177の2個体が出土している。176は、底部の2/3がヘラ削りにより仕上げられ、口縁端面は内傾する。TK47型式に位置付けられる。177は、176より広範囲にヘラ削りが及び、口縁端面の内傾度も低い。TK23型式に位置付けられる。

杯 178と179の2個体出土している。178は、内湾する体部に対して口縁部が外反し、稜腕に近い形態である。179は、高台が体部より内側に貼り付けられている。

壺 3個体（180～182）出土しているが、いずれも底部片である。3個体ともほぼ同タイプと考えられ、底部に対して高台が大きく斜方向に開くものである。ただし、180の高台端部は断面方形をなし、その端部のみ接地する。一方、181と182は、端部が外方に大きく引き延ばされ、下端が面をなし接地する。



第77図 周溝上層出土土器

(5) 整地層出土遺物

東沢1号墳北側の整地層内から出土した遺物である。弥生時代以降の遺物が出土しているが、ここでは、東沢1号墳にともなったであろうと考えられる遺物について報告する。具体的には、円筒埴輪と壘形埴輪が出土している。

円筒埴輪 183～190の8個体出土している（第78図）。

183は、口縁部を中心に残存する。口縁端部は逆L字形をなし、断面方形をなす。内面

は斜方向のハケ調整により仕上げられている。外面は、磨滅のため調整は観察できない。

184も口縁部を中心に残存する。口縁端部は粘土を堆積することにより逆し字形をなす。断面は方形をなす。内面は、斜方向のハケ調整により仕上げられている。外面は剥離が顕著で、調整は観察できない。

185は、筒部突帯を中心に残存する。突帯は断面台形をなし、その高さは3.5mmとやや低い傾向にある。外面の多くは剥離が顕著であるが、突帯付近はヨコナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。

186も、突帯を中心に残存する。突帯はヨコナデ調整により貼り付けられ断面台形をなすが、端部の稜はシャープさを欠く。また、高さが4mmと他より低い傾向にある。内外面ともヨコハケにより仕上げられている。

187も突帯を中心に残存する。突帯はヨコナデ調整により貼り付けられ、断面台形をなす。端部の稜はシャープに仕上げられている。突帯の下側には円形透かしの一部が残存する。外面はヨコハケにより仕上げられているが、静止痕は観察できない。内面は磨滅が顕著であるが、一部ヨコハケが認められる。

188も突帯を中心に残存する。突帯はヨコナデにより貼り付けられ、断面台形をなす。端部はシャープに仕上げられている。外面は磨滅が著しく調整は観察できないが、内面はナデ調整により仕上げられている。

189は基底部を中心に残存する。端部は、強い指オサエにより丸く仕上げられている。外面はエビナデとナデ調整、内面は弱い指オサエにより仕上げられている。

190も基底部を中心に残存する。形態的に口縁部の可能性も考えられるが、下端面に溝状の窪みが認められたことから、基底部と判断している。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。

壺形埴輪

191～197の7個体出土している（第78図）。

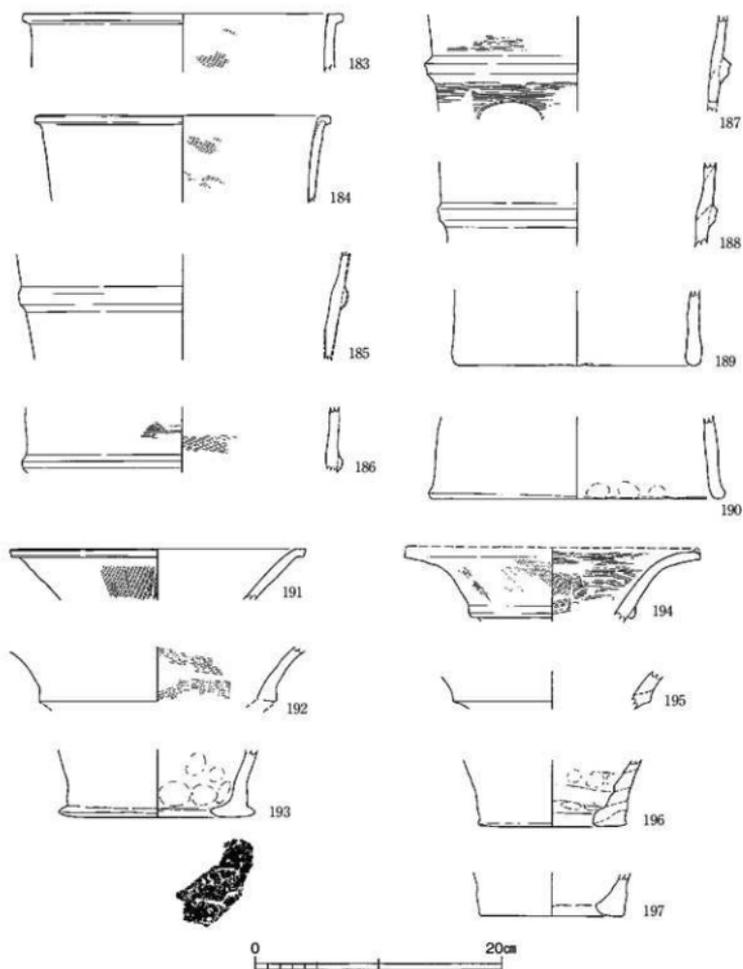
191は口縁部を中心に残存する。斜方向に直線的のびる口縁部に対して、端部は水平方向に折り曲げられている。端部はヨコナデにより仕上げられ、外傾する端面が形成されている。口縁部外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。内面は、磨滅のため調整は観察できない。

192は、口縁部上半を中心に残存する。口縁部は複合口縁をなし、その境は突帯状をなす。外面は、突帯付近がヨコナデ、他はハケ調整により仕上げられている。内面は横方向を主体としたハケ調整後、ナデ調整により仕上げられている。

193は、基底部を中心に残存する。基底部は内外に大きく拡張され、下端面が形成され、接地面となっている。また、接地面には溝状の窪みが認められる。体部外面はナデ調整、内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

194は、口縁部を中心に残存する。複合口縁をなすと考えられ、その境外面には突帯がヨコナデ調整により貼り付けられている。口縁端部は、上方につまみあげられていたと考えられるが、わずかに欠く。外面は斜方向のハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。内面は横方向のハケにより仕上げられている。

195は口縁部の複合部が残存する。外面は屈曲するが、突帯状をなさない。内外面とも



第78図 整地層出土埴輪

磨滅のため調整は観察できない。

196は基底部から体部にかけて残存する。基底部は内側に拡張され、下端は平坦面をなす。内面は指オサエとナデ調整により仕上げられているが、粗く、粘土紐の継目が顕著である。体部外面は剥離が著しく、調整は観察できない。

197は基底部を中心に残存する。基底部を内側に拡張させ、下端は平坦な接地面をなす。内外面とも指オサエにより仕上げられている。基底部は歪みが著しく、楕円傾向にある。

第2表 東沢1号墳出土土器一覽

| No | 種別 | 器種 | 口径 (cm) | 頸径 (cm) | 底径 (cm) | 器高 (cm) | 備考 | 押印 | 図版 |
|-----|-------|-----|---------|---------|---------|---------|-------------|----|----|
| 1 | 須恵器 | 高杯 | 13.60 | | 10.80 | 10.05 | 胎土分析 | 56 | 11 |
| 2 | 須恵器 | 高杯 | 13.00 | | 9.50 | 9.85 | 胎土分析 | 56 | 11 |
| 3 | 須恵器 | 高杯 | 12.60 | | 6.60 | 9.40 | 胎土分析 | 56 | 11 |
| 4 | 須恵器 | 高杯 | 13.60 | | | 8.10 | 胎土分析 | 56 | 11 |
| 5 | 須恵器 | 高杯 | 13.05 | | | 8.15 | | 56 | |
| 6 | 須恵器 | 高杯 | 12.45 | | 9.15 | 8.10 | 胎土分析 | 56 | 11 |
| 7 | 須恵器 | 高杯 | 12.70 | | | 4.90 | | 56 | |
| 8 | 須恵器 | 高杯 | 13.00 | | | 5.20 | | 56 | 11 |
| 9 | 須恵器 | 高杯 | 13.40 | | | 2.75 | | 56 | |
| 10 | 須恵器 | 高杯 | | | 9.60 | 2.35 | | 56 | |
| 11 | 須恵器 | 鉢 | | | | 4.30 | 胎土分析 | 56 | 12 |
| 12 | 須恵器 | 壺 | 15.10 | 10.80 | | 25.00 | 胎土分析 | 56 | 12 |
| 13 | 須恵器 | 壺 | 15.10 | 12.10 | | 25.60 | 胎土分析 | 56 | 12 |
| 14 | 須恵器 | 壺 | 12.80 | 9.40 | | 10.70 | 胎土分析 | 56 | 12 |
| 15 | 須恵器 | 壺 | 8.65 | 7.80 | 6.00 | 12.10 | 胎土分析 | 56 | 12 |
| 16 | 須恵器 | 罐 | 8.65 | 3.65 | | 10.40 | 孔径1.3cm | 56 | 14 |
| 17 | 須恵器 | 壺 | | 4.10 | 5.05 | 7.70 | 胎土分析 | 56 | 14 |
| 18 | 須恵器 | 器台 | 17.65 | 9.30 | | 39.05 | 胎土分析 | 57 | 13 |
| 19 | 瓦質土器 | 壺 | 17.95 | 15.50 | | 5.90 | 胎土分析 | 57 | 14 |
| 20 | 土師器 | 甕 | 23.60 | | | 1.70 | | 59 | |
| 21 | 土師器 | 甕 | 23.20 | | | 1.50 | 胎土分析 | 59 | |
| 22 | 土師器 | 皿 | | | | 1.40 | | 59 | |
| 23 | 土師器 | 壺 | 6.85 | 4.70 | | 6.40 | 胎土分析 | 59 | 15 |
| 24 | 土師器 | 脚 | | | 14.00 | 3.50 | | 59 | |
| 25 | 土師器 | 高坏 | | | | 7.10 | | 59 | 15 |
| 26 | 土師器 | 高坏 | | | | 6.80 | | 59 | 15 |
| 27 | 土師器 | 高坏 | | | | 4.70 | | 59 | |
| 28 | 土師器 | 高坏 | | | | 8.10 | | 59 | 15 |
| 29 | 土師器 | 高坏 | | | | 6.55 | | 59 | 15 |
| 30 | 土師器 | 高坏 | | | | 6.10 | | 59 | 15 |
| 31 | 土師器 | 高坏 | | | | 6.40 | 胎土分析 | 59 | |
| 32 | 土師器 | 高坏 | | | | 4.65 | | 59 | |
| 33 | 土師器 | 高坏 | | | | 5.00 | 胎土分析 | 59 | 16 |
| 34 | 土師器 | 高坏 | | | | 2.75 | | 59 | |
| 35 | 土師器 | 高坏 | | | | 5.85 | | 59 | 16 |
| 36 | 土師器 | 高坏 | | | | 4.75 | | 59 | 16 |
| 37 | 土師器 | 高坏 | | | | 4.80 | | 59 | 16 |
| 38 | 土師器 | 高坏 | | | | 5.30 | | 59 | |
| 39 | 土師器 | 高坏 | | | | 5.90 | 胎土分析 | 59 | |
| 40 | 土師器 | 高坏 | | | 7.80 | 6.20 | | 59 | 16 |
| 41 | 韓式系土器 | 甕 | 19.80 | 15.80 | | 8.50 | 胎土分析 | 59 | 17 |
| 42 | 韓式系土器 | 甕 | | 12.20 | | 5.10 | | 59 | 16 |
| 43 | 土製品 | | | | | 6.70 | 穿孔径1.6cm | 59 | 17 |
| 44 | 土製品 | | | | | 6.80 | 穿孔径7×0.55cm | 59 | 17 |
| 45 | 土製品 | | | | | 4.85 | | 59 | 18 |
| 174 | 須恵器 | 高杯蓋 | 8.20 | | | 4.15 | 胎土分析 | 77 | |
| 175 | 須恵器 | 杯蓋 | 12.25 | | | 5.30 | 胎土分析 | 77 | |
| 176 | 須恵器 | 杯身 | 11.40 | | 6.90 | 4.65 | 胎土分析 | 77 | |
| 177 | 須恵器 | 杯身 | 10.10 | | | 4.60 | | 77 | |
| 178 | 須恵器 | 杯B | 17.70 | | 10.00 | 5.60 | | 77 | |
| 179 | 須恵器 | 杯B | 13.70 | | 7.95 | 4.00 | | 77 | |
| 180 | 須恵器 | 壺 | | | 14.30 | 3.55 | | 77 | |
| 181 | 須恵器 | 壺 | | | 14.10 | 3.00 | | 77 | |
| 182 | 須恵器 | 壺 | | | 13.80 | 3.20 | | 77 | |
| 214 | 須恵器 | 甕 | | | | | | | 40 |

第3表 出土埴輪一覧(1)

| № | 器種 | 遺構名 | 口径 (cm) | 頸径 (cm) | 筒径 (cm) | 底径 (cm) | 器高 (cm) | 黒斑 | 備考 | 挿図 | 図版 |
|-----|----|-------|------------|------------|------------|------------|------------|----|--------------|----|----|
| 46 | 円筒 | 東沢1号墳 | 26.60 | | | | 7.50 | なし | 線刻あり | 62 | 18 |
| 47 | 円筒 | 東沢1号墳 | 24.55 | | | | 5.50 | なし | | 62 | 18 |
| 48 | 円筒 | 東沢1号墳 | 23.60 | | | | 3.10 | なし | | 62 | |
| 49 | 円筒 | 東沢1号墳 | 21.50 | | | | 4.00 | なし | | 62 | |
| 50 | 円筒 | 東沢1号墳 | 24.20 | | | | 7.00 | なし | | 62 | 18 |
| 51 | 円筒 | 東沢1号墳 | 23.70 | | | | 4.10 | なし | | 62 | |
| 52 | 円筒 | 東沢1号墳 | 20.00 | | | | 4.60 | なし | | 62 | 18 |
| 53 | 円筒 | 東沢1号墳 | 20.80 | | | | 3.20 | なし | | 62 | |
| 54 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 23.00 | | 10.60 | なし | 線刻あり | 62 | 18 |
| 55 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 27.45 | | 6.60 | なし | 線刻あり | 62 | 19 |
| 56 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 26.40 | | 7.80 | なし | | 62 | 19 |
| 57 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 24.80 | | 6.80 | なし | | 62 | 19 |
| 58 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 24.50 | | 5.50 | なし | 線刻あり | 62 | 19 |
| 59 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 22.40 | | 9.70 | なし | 胎土分析 葎刺あり | 62 | 19 |
| 60 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 22.05 | | 8.30 | なし | | 62 | 19 |
| 61 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 22.70 | | 4.45 | なし | | 62 | 19 |
| 62 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 20.90 | | 16.70 | なし | | 62 | 20 |
| 63 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 32.00 | | 5.40 | なし | 胎土分析 | 63 | |
| 64 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 30.80 | | 8.50 | なし | | 63 | 20 |
| 65 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 28.00 | | 5.00 | なし | | 63 | 20 |
| 66 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 28.00 | | 5.40 | なし | | 63 | 20 |
| 67 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 28.00 | | 5.55 | なし | | 63 | 20 |
| 68 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 24.60 | | 4.80 | なし | | 63 | |
| 69 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 24.30 | | 4.00 | なし | | 63 | |
| 70 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 25.00 | | 4.30 | なし | 162の体部? | 63 | 21 |
| 71 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 22.60 | | 6.30 | なし | 線刻あり | 63 | 21 |
| 72 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 23.00 | | 4.60 | なし | | 63 | 21 |
| 73 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 21.50 | | 7.45 | なし | | 63 | 21 |
| 74 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 19.80 | | 8.60 | なし | | 63 | |
| 75 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 22.00 | | 12.20 | なし | | 63 | 21 |
| 76 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 22.10 | | 7.35 | なし | | 63 | |
| 77 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 21.60 | | 5.90 | なし | | 63 | 21 |
| 78 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 21.70 | | 7.50 | なし | | 63 | |
| 79 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | 18.50 | | 4.60 | なし | | 63 | 22 |
| 80 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | | | 5.00 | なし | | 63 | 22 |
| 81 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | | | 3.65 | なし | | 63 | 22 |
| 82 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | | | 5.50 | なし | 線刻あり | 66 | 22 |
| 83 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | | | 3.10 | なし | 線刻あり | 66 | 22 |
| 84 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | | 17.80 | 13.20 | なし | | 66 | 22 |
| 85 | 円筒 | 東沢1号墳 | | | | 15.50 | 8.00 | なし | 胎土分析 | 66 | |
| 86 | 円筒 | 東沢1号墳 | 21.50 | | | | 5.70 | なし | | 66 | |
| 87 | 壺 | 東沢1号墳 | 31.80 | | | | 11.40 | なし | | 66 | 23 |
| 88 | 壺 | 東沢1号墳 | 30.10 | | | | 7.50 | なし | 胎土分析 | 66 | 23 |
| 89 | 壺 | 東沢1号墳 | 29.90 | | | | 2.80 | なし | 胎土分析 | 66 | 23 |
| 90 | 壺 | 東沢1号墳 | 28.90 | | | | 4.65 | なし | | 66 | 23 |
| 91 | 壺 | 東沢1号墳 | 29.10 | | | | 4.90 | なし | 胎土分析 | 66 | 23 |
| 92 | 壺 | 東沢1号墳 | 28.00 | | | | 6.90 | なし | 胎土分析 | 66 | 24 |
| 93 | 壺 | 東沢1号墳 | 28.25 | | | | 5.10 | なし | | 66 | |
| 94 | 壺 | 東沢1号墳 | 27.55 | 10.80 | | | 8.85 | なし | 胎土分析 | 66 | 25 |
| 95 | 壺 | 東沢1号墳 | 27.75 | | | | 3.25 | なし | | 66 | |
| 96 | 壺 | 東沢1号墳 | 26.60 | 12.00 | | | 12.30 | なし | | 66 | 23 |
| 97 | 壺 | 東沢1号墳 | 25.30 | 11.00 | | | 22.00 | なし | | 66 | 23 |
| 98 | 壺 | 東沢1号墳 | 26.65 | | | | 1.85 | | | 67 | |
| 99 | 壺 | 東沢1号墳 | 24.20 | | | | 6.50 | なし | 107と同-? 線刻あり | 67 | 24 |
| 100 | 壺 | 東沢1号墳 | 21.80 | | | | 6.20 | なし | 胎土分析 | 67 | |
| 101 | 壺 | 東沢1号墳 | 19.10 | | | | 9.30 | なし | | 67 | 24 |
| 102 | 壺 | 東沢1号墳 | 17.40 | | | | 5.50 | なし | | 67 | |
| 103 | 壺 | 東沢1号墳 | 23.50 | | | | 2.60 | | | 67 | |
| 104 | 壺 | 東沢1号墳 | 24.10 | | | | 10.60 | なし | | 67 | 24 |
| 105 | 壺 | 東沢1号墳 | 22.50 | 9.90 | | | 10.90 | なし | | 67 | 26 |

第4表 出土壺輪一覧(2)

| № | 器種 | 遺構名 | 口径 (cm) | 頸径 (cm) | 筒径 (cm) | 底径 (cm) | 器高 (cm) | 黒斑 | 備考 | 挿図 | 図版 |
|-----|----|-------|------------|------------|------------|------------|------------|----|--------|----|----|
| 106 | 壺 | 東沢1号墳 | 20.05 | 10.70 | | | 12.00 | なし | 胎土分析 | 67 | 26 |
| 107 | 壺 | 東沢1号墳 | 24.25 | | | | 4.70 | なし | 線刻あり | 67 | 26 |
| 108 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.00 | なし | | 67 | |
| 109 | 壺 | 東沢1号墳 | | 10.55 | | | 11.35 | なし | 胎土分析 | 67 | 26 |
| 110 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 5.90 | | | 67 | 26 |
| 111 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 5.20 | なし | | 67 | 26 |
| 112 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 2.80 | なし | | 67 | 26 |
| 113 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 1.65 | なし | | 67 | |
| 114 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 1.85 | なし | | 67 | |
| 115 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 3.45 | なし | | 67 | |
| 116 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.30 | なし | | 67 | 27 |
| 117 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.60 | なし | 胎土分析 | 68 | 27 |
| 118 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.00 | なし | | 68 | 27 |
| 119 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 5.70 | なし | | 68 | 27 |
| 120 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.75 | なし | | 68 | 27 |
| 121 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.45 | なし | | 68 | 27 |
| 122 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 7.10 | なし | | 68 | 28 |
| 123 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.65 | なし | | 68 | 27 |
| 124 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 6.15 | なし | | 68 | 28 |
| 125 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 3.90 | なし | | 68 | |
| 126 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 3.40 | なし | | 68 | 28 |
| 127 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 2.50 | なし | | 68 | |
| 128 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 5.70 | なし | | 68 | 28 |
| 129 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.00 | なし | | 68 | |
| 130 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 6.20 | なし | | 68 | |
| 131 | 壺 | 東沢1号墳 | | 12.50 | | | 7.60 | なし | | 68 | |
| 132 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 4.60 | なし | | 68 | |
| 133 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | | 3.20 | なし | | 68 | |
| 134 | 壺 | 東沢1号墳 | | 11.00 | | | 7.05 | なし | 胎土分析 | 68 | 28 |
| 135 | 壺 | 東沢1号墳 | | 11.75 | | | 2.80 | なし | | 68 | 28 |
| 136 | 壺 | 東沢1号墳 | | 13.00 | | | 6.05 | なし | | 68 | |
| 137 | 壺 | 東沢1号墳 | | 14.60 | | | 4.00 | なし | 胎土分析 | 68 | |
| 138 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 11.80 | 21.65 | | | 70 | 29 |
| 139 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 12.70 | 8.50 | なし | | 70 | 29 |
| 140 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 19.00 | 3.50 | なし | | 70 | |
| 141 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 13.90 | 5.00 | なし | | 70 | |
| 142 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 15.35 | 6.75 | | | 70 | |
| 143 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 10.60 | 5.20 | なし | | 70 | 29 |
| 144 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 10.75 | 3.70 | なし | | 70 | |
| 145 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 8.70 | 9.95 | なし | | 70 | 30 |
| 146 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 10.30 | 3.80 | | | 70 | 29 |
| 147 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 14.00 | 5.50 | なし | | 70 | 30 |
| 148 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 13.25 | 7.20 | なし | | 70 | 30 |
| 149 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 14.25 | 2.90 | なし | | 70 | 30 |
| 150 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 14.60 | 4.40 | なし | | 70 | 31 |
| 151 | 壺 | 東沢1号墳 | | | 15.60 | | 5.20 | なし | | 70 | 30 |
| 152 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 14.00 | 5.70 | なし | | 70 | 31 |
| 153 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 14.20 | 4.70 | なし | | 70 | |
| 154 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 10.35 | 9.50 | なし | | 70 | 31 |
| 155 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 13.00 | 5.60 | なし | | 70 | |
| 156 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 16.40 | 3.10 | なし | | 70 | |
| 157 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 17.20 | 3.95 | なし | | 71 | |
| 158 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 9.70 | 2.60 | なし | | 71 | |
| 159 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 5.50 | 10.50 | なし | | 71 | 31 |
| 160 | 壺 | 東沢1号墳 | | | | 2.60 | 4.70 | なし | 底部穿孔 | 71 | 32 |
| 161 | 壺 | 東沢1号墳 | | 10.00 | | | 6.40 | なし | | 71 | 32 |
| 162 | 壺 | 東沢1号墳 | | 16.00 | | | 5.80 | なし | 胎土分析 | 71 | |
| 163 | 蓋 | 東沢1号墳 | | 19.40 | | | 3.20 | なし | | 71 | |
| 164 | 壺 | 東沢1号墳 | | | 13.50 | | 4.40 | なし | ヘラ記号あり | 71 | 32 |
| 165 | 鳥? | 東沢1号墳 | | | | | | | 胎土分析 | 71 | 32 |

第5表 出土壙輪一覧(3)

| № | 器種 | 遺構名 | 口径 (cm) | 頸径 (cm) | 筒径 (cm) | 底径 (cm) | 器高 (cm) | 黒斑 | 備考 | 挿図 | 図版 |
|-----|----|-------|------------|------------|------------|------------|------------|------|------|-------|-------|
| 166 | 鳥? | 東沢1号墳 | | | | | 40.50 | | | 71 | 32 |
| 167 | 家 | 東沢1号墳 | | | | | 3.30 | | 胎土分析 | 74・75 | 34~38 |
| 168 | 家 | 東沢1号墳 | | | | | 5.90 | | | 75 | |
| 169 | 家 | 東沢1号墳 | | | | | 5.80 | | | 75 | |
| 170 | 家 | 東沢1号墳 | | | | | 4.80 | | | 75 | |
| 171 | 家 | 東沢1号墳 | | | | | 14.90 | | | 76 | 34 |
| 172 | 家 | 東沢1号墳 | | | | | 8.65 | | | 76 | 34 |
| 173 | 家 | 東沢1号墳 | | | | | 4.80 | なし | | 78 | 33 |
| 183 | 円筒 | 整地層 | 25.40 | | | | 7.10 | | | 78 | 33 |
| 184 | 円筒 | 整地層 | 23.80 | | | | 8.70 | なし | | 78 | |
| 185 | 円筒 | 整地層 | | | 27.00 | | 5.40 | なし | | 78 | |
| 186 | 円筒 | 整地層 | | | 25.40 | | 7.90 | なし | | 78 | 33 |
| 187 | 円筒 | 整地層 | | | 24.20 | | 6.90 | なし | 胎土分析 | 78 | |
| 188 | 円筒 | 整地層 | | | 22.40 | | 19.80 | 6.15 | | 78 | |
| 189 | 円筒 | 整地層 | | | | 24.00 | 6.70 | | | 78 | |
| 190 | 円筒 | 整地層 | | | | | 4.20 | | | 78 | 33 |
| 191 | 壺 | 整地層 | 23.90 | | | | 4.45 | | | 78 | |
| 192 | 壺 | 整地層 | | | | 15.90 | 5.50 | | | 78 | 33 |
| 193 | 壺 | 整地層 | | | | | 5.90 | | | 78 | 33 |
| 194 | 壺 | 整地層 | | | | | 3.10 | なし | | 78 | |
| 195 | 壺 | 整地層 | | | | | 12.10 | 5.40 | | 78 | |
| 196 | 壺 | 整地層 | | | | 10.70 | 3.50 | | | 78 | 33 |
| 197 | 壺 | 整地層 | | | | | | | | 78 | |

第4節 他の遺構と遺物

1. 概要

検出状況 竪穴住居跡・溝状遺構・土坑を検出している（第27図）。

2. 竪穴住居跡（写真図版8）

検出状況 1棟（SH01）検出している。東沢1号墳の北東側、SD01の北側に位置する（第27図）。他の遺構との切り合い関係は認められず完存する。ただし、全体的に削平が著しく、周壁溝を中心に検出されたにとどまる。また、西隅においては、周壁溝も削平され、検出されなかった。



第79図 SH01の調査

形状・規模

平面形は、北東-南西方向に主軸をとる方形をなす（第81図）。さらに南隅を中心に方形の拡張部を有する。住居跡の規模は、北西-南東方向で5.57m、その直交方向で5.42mを測る。また、検出面との比高は30cmを測り、その標高は41.90mである。

付属施設

主柱穴・高床部・拡張部・周壁溝・排水溝を検出した。

主柱穴

4穴（P1～P4）検出した。4穴はほぼ方形をなす位置にあり、P1～P2とP3～P4は平行関係にある。各柱穴間の距離は、P1～P2間で2.40m、P2～P3間で2.55m、P3～P4間で2.50m、P1～P4間で2.60mを測る。

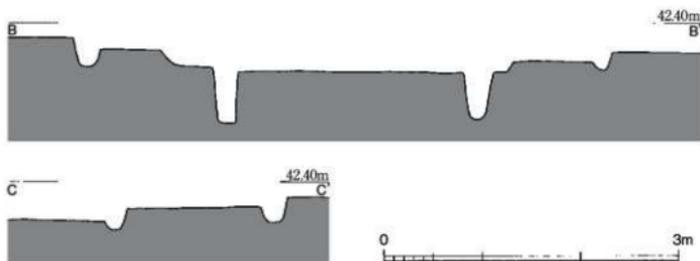
主柱穴の平面形は円形をなし、床面における規模は、P1～P3が25cm、P4が30cmを測る。また、床面からの深さは、P1が55cm、P2が43cm、P3が58cm、P4が50cmである。いずれも柱痕を確認することはできなかった。

高床部

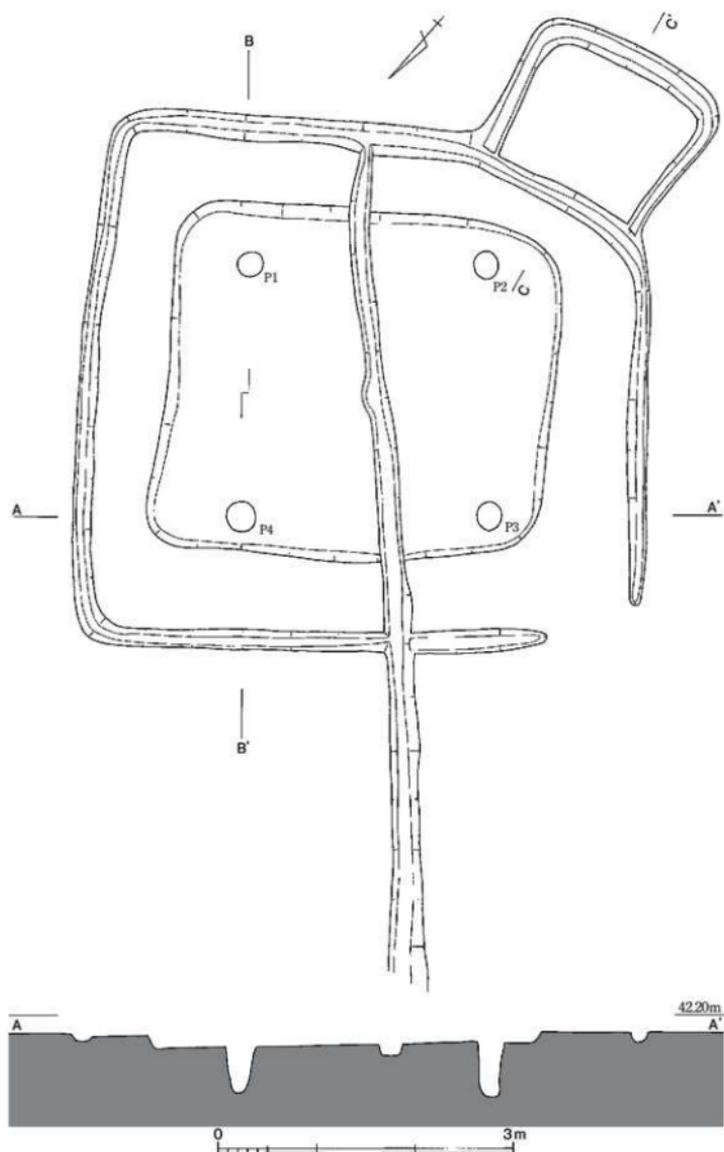
住居跡中央部が、住居跡と相似形に一段落ち込み、その周囲が高床部を形成している。住居跡検出面との比高は10cm、住居跡中央部との比高は13cmを測る（第80図）。高床部の規模は、四周とも同規模で65cm～75cmを測る。

拡張部

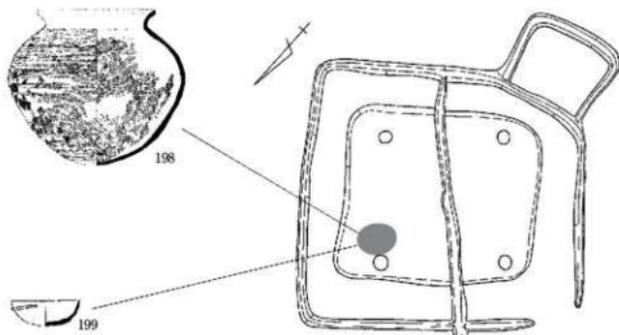
住居跡南隅で検出された。平面形は長方形をなし、その規模は、南北方向で1.60m、東



第80図 SH01横断面



第81図 SH01



第82図 SH01上面土器出土位置

西方向で21mを測る。高床部より一段高く造られており、その比高は12cmを測る。

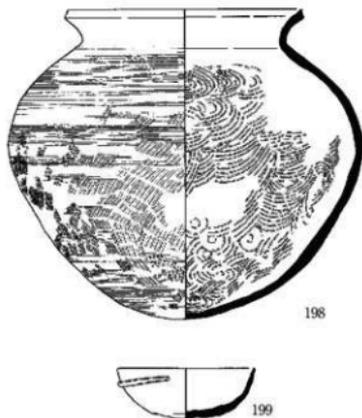
周壁溝 西隅を除いて全周する。高床部における幅は18cmを測る。横断面はU字形をなし、高床部からの深さは9cmである。また、拡張部においても周壁溝が巡らされ、住居跡周囲の周壁溝とはほぼ同規模である。

排水溝 住居跡南東壁から住居跡中央部を貫き、北西方向に直線的にのびる溝である。北西端は調査区外までのびている。検出した長さは8.50mである。検出面における幅は25~30cmを測る。横断面はU字形~逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。底部の標高は、南東端で41.85m、北西端で41.55mを測り、北西側へ傾斜している。

出土土器 当住居跡の上面、P4の南東側で甕(198)と杯(199)が一括で出土している(第82図)。

甕は、ほぼ完存する(第83図)。体部外面は平行叩き後カキメが施され、口縁部内外面が回転ナデ調整により仕上げられている。体部内面には、当具痕が顕著に残存する。杯もほぼ完存する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部が回転ヘラ切りにより切り離されている。また、外面には別個体の窯着片が付着し、内面全面に灰披りが認められる。

時期 上面で須恵器が一括で出土しているが、これらの土器については、住居跡の構造から、本遺構の時期を示すものではないと考えられる。本遺構の時期を直接示す土器は出土していないが、後述するSD01との関係や住居跡の構造から、弥生時代後期末と考えられる。



第83図 SH01上面出土土器

3. 溝状遺構

3条 (SD 01～SD 03) 検出している。

SD 01

検出状況 調査区北東側で検出した(第27図)。SH 01の南側に位置する。東西方向から南北方向に弧状をなし、南北方向に直線的のびる溝である。SH 01の拡張部を取り囲むような位置関係にある。他の遺構との切り合い関係は認められないが、北端部は後世の擾乱を受け途切れ、東端は調査区内で収束している。

形状・規模 7.30 m検出している。検出面における幅は30cm～35cmを測る。横断面は深いU字形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。

埋没状況 暗黄褐色シルト混じり極細砂1層が堆積していた。

出土土器 溝内で、比較的形をとどめた状態で出土している(第84図)。溝上面は削平を受けていることが考えられることから、当初は完形に近い状態で置かれていたものと考えられる。このため、高坏(208)を除いては、他地点との接合関係は認められない。

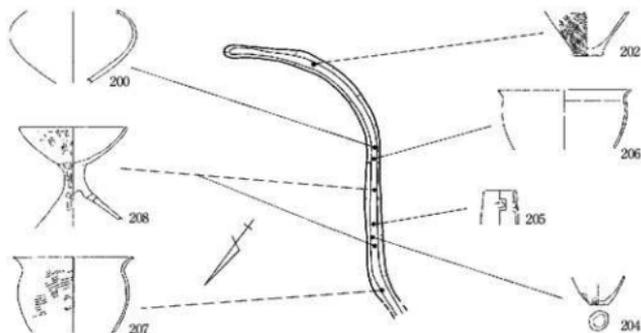
器種としては、壺・甕・鉢・高坏・胡壺他が出土している(第85図)。

壺 200の1個体である。広口壺と考えられるが、体部のみの残存である。内面はナデ調整により仕上げられているが、外面は剥離が顕著である。

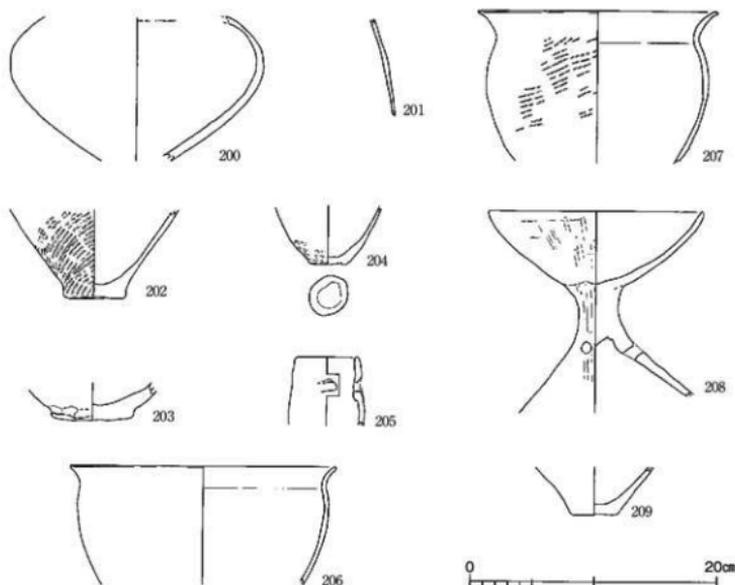
甕 202・203・207の3個体が出土している。いずれも叩き成形を基本に造られたもので、内面はナデ調整により仕上げられている。207の口縁部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。また、202の底部には、木の葉文が認められる。

鉢 206と204の2個体が出土している。206は比較的大型の鉢で、碗形の体部に口縁部が外反している。口縁部外面が横ナデ調整により仕上げられ、他はナデ調整により仕上げられている。

204は底部から体部にかけて残存する。甕の可能性も考えられるが、小型であることから直口鉢の可能性を考え、鉢として報告する。底部は輪台技法による。体部外面は叩き成形後ナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整である。



第84図 SD 01 土器出土位置



第85図 S D 01・S D 02出土土器

- 高坏** 208の1個体が出土している。脚部を除いて残存し、坏部は碗形をなす。坏部から脚部にかけてヘラミガキにより仕上げられ、脚部内面はナデ調整により仕上げられている。坏部内面は剥離している。脚部には円孔が3方に穿たれており、その径は9mmを測る。
- 胡壺** 205の1個体である。口径4.80cmと小型で、イイダコ壺と考えられる。口縁部下には径7mmの孔が焼成前に開けられている。
- 他** 体部の小片(201)が出土している。内外面とも磨滅が著しく、器種等の詳細は不明であるが、胎土の特徴から讃岐地方からの搬入品と考えられる。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

S D 02

- 検出状況** 調査区北東部で検出した(第27図)。S H 01の北西側に位置する。南北方向に弧状をなす溝で、北側は調査区外へのび、南端は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 3.60m検出している。検出面における幅は70cm～1.30mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。
- 出土土器** 壺の底部1個体(209)が出土している(第85図)。底部は平底をなし、内面は指オサエにより仕上げられている。体部内外面は磨滅のため調整は観察できない。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

SD 03

検出状況 調査区北東隅で検出した（第27図）。SH 01の東側に位置する。南北方向に舌状をなす溝で、北側は調査区外へのび、南端は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 4.80m検出している。検出面における幅は最大で230mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況 暗黄褐色シルト混じり極細砂1層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土土器 全く出土していない。

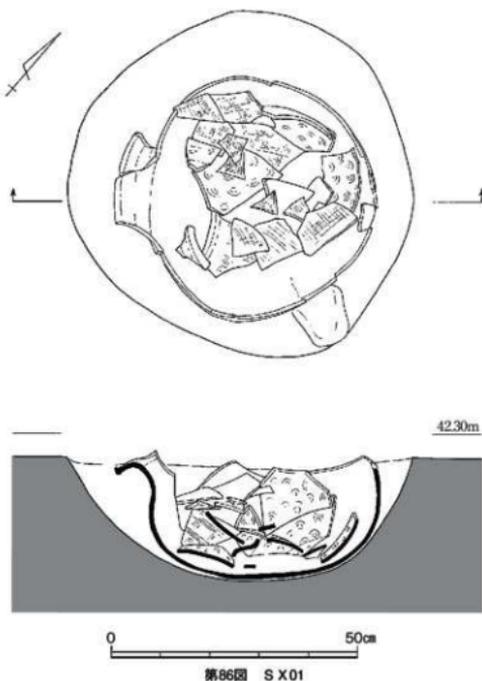
時期 土器が出土していないため、時期は特定できない。

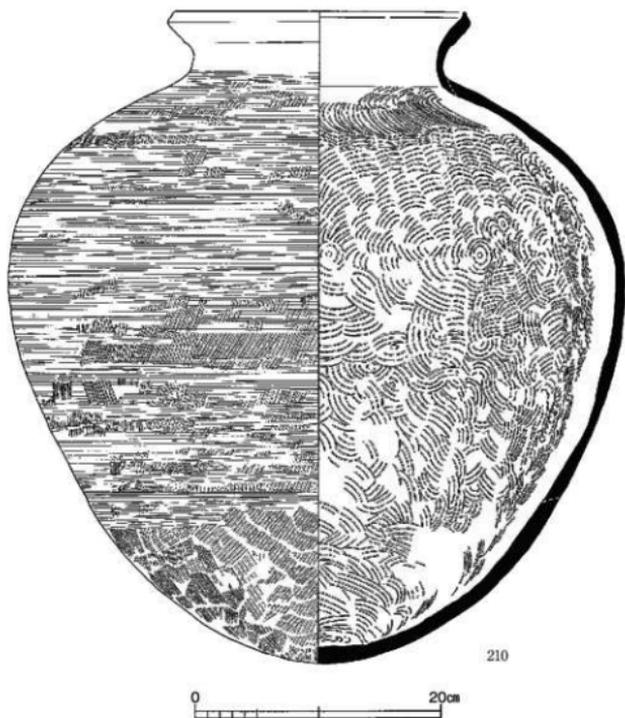
4. 土坑

土器が埋納された土坑が1基（SX 01）検出されている。

SX 01（写真図版9・10）

検出状況 調査区中央部北側で検出した。東沢1号墳の北西側に位置する（第27図）。他の遺構との





第87図 S X 01出土土器

切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模 円形に近い土坑内に須恵器の甕1個体が横位に置かれていた(第86図)。土坑は、南西-北東方向に主軸をとり、その規模は、主軸方向で70cm、その直交方向で71.5cmを測る。横断面は浅いU字形をなし、最深部における検出面からの深さは30cmを測る。

土器出土状況 須恵器の甕が、土坑底にその体部中央が接するように置かれた状態で出土している。また、この甕を固定するために、土坑壁と甕の間に円礫が1個据えられていた。須恵器の下側1/2はほぼ完存し、その他については体部内に落ち込んだ状態で出土している。このため、当初は完形の状態で置かれていたものと考えられる。

出土土器 須恵器の甕1個体(210)が出土している(第87図)。ほぼ完存する個体である。体部外面は平行明きによる整形後、横方向のカキメにより仕上げられている。内面は当具痕が顕著に残っている。口縁部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

時期 古墳時代後期と考えられる。

5. 整地層

はじめに

ここでは、東沢1号墳の北側整地層から出土した土器のなかで、東沢1号墳には伴わないと判断される土器について報告する。対象となるのは、弥生土器と須恵器である。併せて、打製石鏃について、報告する。

弥生土器

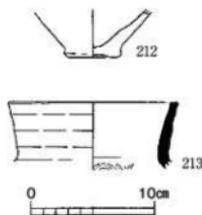
後期の甕が2個体(211・212)出土している(第88図)。211はV様式系の甕で、口縁部から体部にかけて残存する。外面は、体部から口縁部にかけて叩き整形により仕上げられている。212は底部片で、底部は指オサエにより輪台状に造られている。体部内外面はナデ調整により仕上げられている。

須恵器

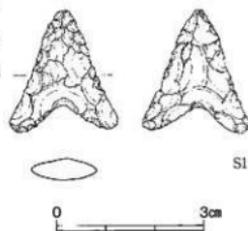
須恵器は、甕の口縁部片が1点(213)出土している(第88図)。口縁部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、頸部内面には当具痕が認められる。横瓶の可能性も考えられる。

石 鏃

S1の1点が出土している(第89図)。サヌカイト製の打製石鏃で、凹基式に分類されるものである。全長25cm、基部幅2.2cm、厚さ4.5mmを測り、重さは1.5gである。



第88図 整地層出土土器



第89図 整地層出土石器

第6表 東沢1号墳以外出土土器一覧

| No | 種別 | 器種 | 遺構名 | 口径 (cm) | 頭径 (cm) | 底径 (cm) | 器高 (cm) | 備考 | 挿図 | 図版 |
|-----|-----|-----|--------|------------|------------|------------|------------|---------|----|----|
| 198 | 須恵器 | 甕 | S H 01 | 18.90 | 16.50 | | 25.40 | | 83 | 39 |
| 199 | 須恵器 | 杯 | S H 01 | 11.00 | | | 4.15 | | 83 | |
| 200 | 弥生 | 壺 | S D 01 | | | | 11.75 | | 85 | |
| 201 | 弥生 | 壺 | S D 01 | | | 5.05 | 7.20 | | 85 | |
| 202 | 弥生 | 甕 | S D 01 | | | | 8.00 | 讃岐産 | 85 | 39 |
| 203 | 弥生 | 甕 | S D 01 | | | 6.00 | 3.10 | | 85 | |
| 204 | 弥生 | 鉢 | S D 01 | | | 3.00 | 4.80 | | 85 | |
| 205 | 弥生 | 飯蛸壺 | S D 01 | 4.80 | | | 5.50 | | 85 | 39 |
| 206 | 弥生 | 甕 | S D 01 | 21.40 | 20.10 | | 9.70 | | 85 | |
| 207 | 弥生 | 甕 | S D 01 | 18.80 | 16.40 | | 12.45 | 体部外面煤付着 | 85 | 39 |
| 208 | 弥生 | 高坏 | S D 01 | 17.10 | | | 14.90 | | 85 | 39 |
| 209 | 弥生 | 甕 | S D 02 | | | 3.70 | 3.90 | | 85 | |
| 210 | 須恵器 | 甕 | S X 01 | 23.40 | 20.60 | | 53.00 | 胎土分析 | 87 | 40 |
| 211 | 弥生 | 甕 | 整地層 | 15.10 | 12.50 | | 10.80 | | 88 | |
| 212 | 弥生 | 甕 | 整地層 | | | 4.60 | 4.00 | | 88 | |
| 213 | 須恵器 | 壺 | 整地層 | 13.60 | 12.45 | | 5.40 | | 88 | |

第4章 分析・鑑定

第1節 東沢1号墳の岩石同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

東沢1号墳は、加古川市八幡町上西条に位置する一辺約20mの方墳である。調査では、後世の開墾により削平されていたが、古墳の一部が確認され、古墳の斜面には葺石が認められた。ここでは、これら葺石について、実体顕微鏡を用いて岩石同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、東沢1号墳の葺石（基底石）・葺石12点、周辺古墳の葺石2点、周辺地域の岩石16点の合計30点である（第7表・第90図）。

各試料は、一部のチャートを除いてハンマーを用いて破断面を作製し、実体顕微鏡を用いて色調、組織、構成鉱物の特徴について観察し、岩石の同定を行った。なお、各岩石は、実体顕微鏡を用いて破断面の拡大写真を撮影した（第92図）。

3. 結果および考察

岩石同定を行った結果、東沢1号墳の葺石（基底石）が凝灰岩、同葺石がチャート、東沢1号墳周辺段丘礫がチャート、竜山で採取された岩石が凝灰岩、魚橋山で採取された岩石が凝灰岩、地蔵山で採取された岩石が凝灰岩、行者塚古墳の葺石が流紋岩、人塚古墳の葺石が凝灰岩、西之山で採取された岩石が凝灰岩、神野城山で採取された岩石が軽石質凝灰岩、日岡山山頂で採取された岩石が凝灰岩、平荘湖弁田山で採取された岩石が凝灰岩であった。

東沢1号墳の葺石（基底石）は硬質と軟質の凝灰岩であるが、凝灰岩比較試料として採取された周辺

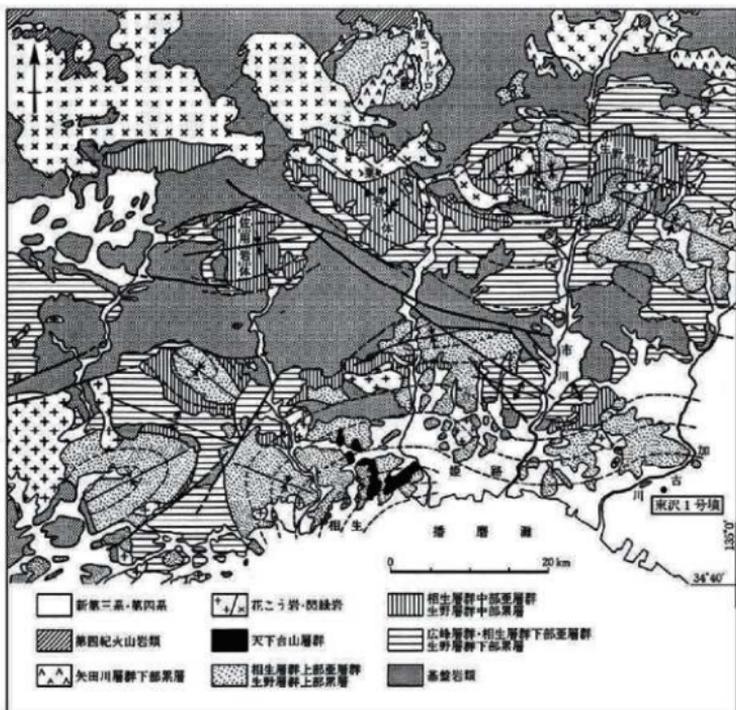


1. 東沢1号墳 2. 神野城山 3. 業者塚古墳 4. 尼塚古墳 5. 西之山
6. 日岡山山頂 7. 平荘湖弁田山 8. 地蔵山 9. 魚橋山 10. 竜山

第90図 試料採集位置

第7表 古墳出土岩石および周辺地域採取岩石の特徴と岩石名

| 試料 No. | 採取位置 | 内容 | 色 調 | 組織の特徴 | 含有粒子 | その他 | 岩石名 |
|--------|-------------|-------------|-------------------------|---------------|------------------------------|-------------|------------|
| 1 | 東沢1号墳 | 葺石(基 底石) | 灰白色(N8/) | 砂質 | 1~3mm:白色岩片、石英、 長石類、緑色二次鉱物 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 2 | | | 暗青灰色 (5B4/1) | 砂質 | 石英、長石類、輝石類、二次 鉱物 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 3 | | | 浅黄色 (2.5Y7/4) | 礫混じり砂 質 | 1~11mm:白・灰色岩片、長 石類、輝石類 | 硬質、板状 | 凝灰岩 |
| 4 | | | 灰白色(5Y8/2) | 砂礫質 | 1~3mm:白色岩片、軽石、 石英、長石類 | やや軟質 | 凝灰岩 |
| 5 | | 葺石 | 灰白色(N7/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 6 | | | 灰白色(5Y8/1) ~灰白色(N4/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 7 | | | 灰色(N4/) ~灰白色(N7/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 8 | | | 灰色(N5/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 9 | | | 浅黄色 (2.5Y7/3) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 10 | | | 灰白色(5Y7/2) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 11 | | | 灰白色 (2.5Y8/1) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 12 | | | 灰色(N4/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 13 | 東沢1号墳 周辺 | 段丘礫 | 灰色(N4/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 14 | | | 灰白色(N8/) | チャート | 石英脈 | 硬質、脆い | チャート |
| 15 | | | 灰色(N4/) | チャート | 石英脈 | 硬質、脆い | チャート |
| 16 | | | 灰白色(N7/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 17 | | | 灰色(N6/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート |
| 18 | 灰色(N5/) | チャート | 石英脈 | 硬質 | チャート | | |
| 19 | 竜山 | 採石場 | 灰白色 (2.5Y8/2) | 砂礫質 | 2~5mm:白・灰色岩片、石英、 長石類 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 20 | | | 淡黄色 (2.5Y8/3) | 砂礫質 | 2~5mm:白・灰色岩片、長 石類 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 21 | 魚橋山 | 採石場 | 淡黄色 (2.5Y8/4) | 砂礫質 | 1~6mm:白・灰色岩片、石英、 長石類 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 22 | | | 灰白色 (2.5Y8/2) | 礫混じり砂質 | 2~5mm:灰色岩片 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 23 | 地藏山 | 採石場 | 淡黄色 (2.5Y8/4) | 砂礫質 | 2~5mm:白色岩片 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 24 | | | 淡黄色(5Y8/3) | 砂礫質 | 4~7mm:白色岩片 | 硬質 | 凝灰岩 |
| 25 | 行者塚古墳 | 葺石 | 黄灰色 (2.5Y6/1) | 砂質、流理 構造 | 1~3mm:石英、長石類 | 硬質 | 流紋岩 |
| 26 | 人塚古墳 | 葺石 | 灰白色 (7.5Y7/1) | シルト質 | 2mm:灰色岩片、細粒結晶少 量含む | 硬質、板状 剥離 | 凝灰岩 |
| 27 | 西之山 | 採石場 | 灰白色(5Y8/2) | 軽石質 | 2~5mm:白色岩片 | 硬質、脆い | 凝灰岩 |
| 28 | 神野城山 | | 灰白色 (7.5Y8/2) | 軽石質 | 1~8mm:白色軽石 | 軟質 | 軽石質凝 灰岩 |
| 29 | 日岡山山頂 | | 灰白色 (7.5Y8/2) | 礫混じり砂 シルト質 | 2~4mm:堆積岩類、軽石 | 軟質 | 凝灰岩 |
| 30 | 平荘瀬升田 山 | | 灰白色 (7.5Y7/2) | 砂礫質 | 2~5mm:灰色泥質岩、長石類 | 硬質 | 凝灰岩 |



第91図 近畿南西部の地質（日本の地質「近畿地方」編集委員会編，1992より引用）

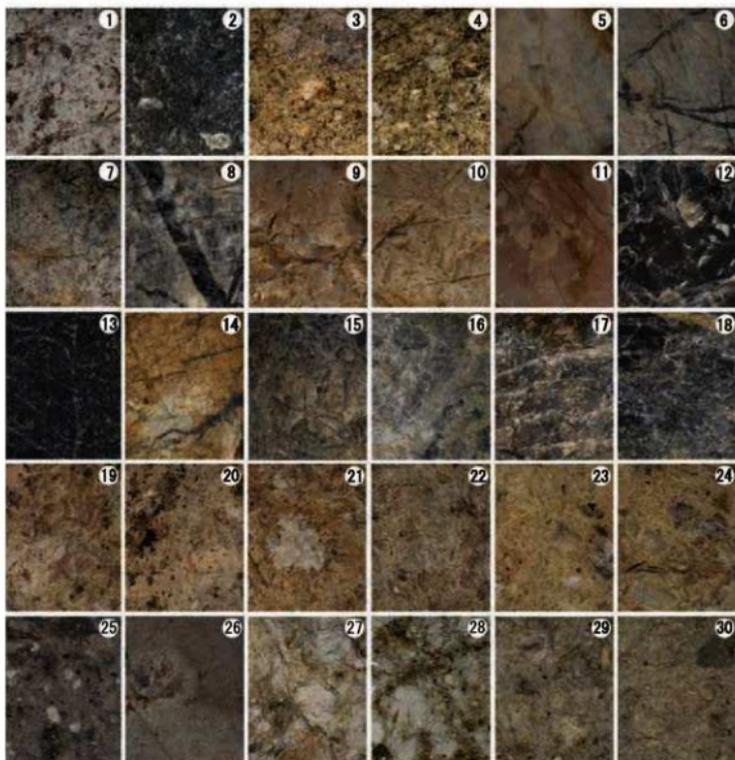
地域の岩石は、硬質の凝灰岩が多く、軟質の凝灰岩と軽石質凝灰岩を含んでいた。これら周辺地域の岩石は、白亜紀～古第三紀の相生層群上部重層群および生野層群上部累層であるが、生野層群上部累層がガラス～結晶質の溶結凝灰岩からなり、相生層群上部重層群が流紋デイサイト質の溶結凝灰岩からなる（第91図 日本の地質「近畿地方」編集委員会編，1992）。このことから、周辺域に分布する凝灰岩を利用したものと考えられる。

東沢1号墳の冢石はいずれもチャートであるが、比較試料として採取された古墳周辺の段丘礫がチャートであったことから、こうした隣接地で採取されて利用されたものと推定される。

なお、比較試料として検討した行者塚古墳の冢石は、流理構造を呈することから流紋岩と考えられる。

4. おわりに

東沢1号墳の冢石（基底石を含む）や周辺古墳および地域で採取された岩石について、実体顕微鏡を用いて岩石の同定を行った。その結果、白色系の凝灰岩やチャートであったことから、東沢1号墳で使用された岩石は周辺地域で採取された岩石であることが示された。



- 1～4. 凝灰岩（東沢1号墳，葺石（基底石）） 5～12. チャート（東沢1号墳，葺石）
 13～18. チャート（東沢1号墳周辺，段丘礫） 19・20. 凝灰岩（竜山，採石場）
 21・22. 凝灰岩（魚橋山，採石場） 23・24. 凝灰岩（地藏山，採石場）
 25. 流紋岩（行者塚古墳，葺石） 26. 凝灰岩（人塚古墳，葺石）
 27. 凝灰岩（西之山，採石場） 28. 軽石質凝灰岩（神野城山，採石場）
 29. 凝灰岩（日岡山山頂，採石場） 30. 凝灰岩（平庄湖弁田山，採石場）

第92図 岩石破断面の実体顕微鏡写真（番号は試料No.に対応、スケール：2mm）

引用文献

日本の地質『近畿地方』編集委員会編（1992）日本の地質6「近畿地方」，297，共立出版。

第2節 東沢1号墳出土土器および埴輪の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、加古川市八幡町に所在する東沢1号墳から出土した土器および埴輪について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。東沢1号墳は、加古川下流域左岸に広がるいなみの台地の北部に位置する。

今回の試料では特に推定産地等の発掘調査所見は示されていないが、既存の地質資料から推定される地域性を検討する。また、今回の試料は、土器と埴輪それぞれに器種が示されていることから、これらの所見と胎土との対応関係も検討する。

1. 試料

試料は、東沢1号墳から出土した古墳時代中期とされる土器の土器片5点と同時期とされる韓式土器片1点および埴輪片18点の合計24点である。試料には、試料番号1～24が付されている。器種の内訳は、土器の高坏が3点、土器の壺が1点、土器の甕が1点、韓式土器は甕である。埴輪は、壺形が12点であり、円筒が4点、家形が1点、不明が1点である。各試料の試料番号と報告No.と器種などを一覧にして第8表に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。

これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩石片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

第8表 試料一覧

| 試料番号 | 報告No | 遺構 | 時期 | 種別 | 器種 |
|------|------|-------|--------|-------|----|
| 1 | 39 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 高坏 |
| 2 | 33 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 高坏 |
| 3 | 31 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 高坏 |
| 4 | 41 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 韓式系土器 | 甕 |
| 5 | 91 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 6 | 23 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 壺 |
| 7 | 134 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 8 | 106 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 9 | 109 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 10 | 117 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 11 | 94 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 12 | 89 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 13 | 165 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 鳥? |
| 14 | 162 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 15 | 59 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 |
| 16 | 100 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 17 | 92 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 18 | 63 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 |
| 19 | 188 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 |
| 20 | 88 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 21 | 137 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 |
| 22 | 85 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 |
| 23 | 21 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 甕 |
| 24 | 167 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 家 |

第9表 薄片観察結果(1)

| 試料番号 | 砂粒区分 | 砂粒の種類構成 | | | | | | | | | | | | | 合計 | | | | | | | | |
|----------------|--|---------|------|-----|-----|-----|-----|------|-------|------|-----|-----------|-----|-------|----|------|---------|----|-----|-----|-------|-------|-------|
| | | 石英 | カリ長石 | 斜長石 | 角閃石 | 緑泥石 | 黒雲母 | ジルコン | 不透明鉱物 | チャート | 凝灰岩 | 凝灰岩・デイサイト | 安山岩 | 多結晶石英 | | 花崗岩類 | ホルンフェルス | 頁岩 | 変質岩 | 珪化岩 | 火山ガラス | 酸化鉄結核 | 植物有機体 |
| 1 土師器 高坏 | 細礫 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 粗粒砂 | 3 | | | | | | | | 3 | 2 | 2 | | | 2 | 1 | | | | | 1 | | 15 |
| | 中粒砂 | | | | | | | | | | | 2 | | | 1 | | | | | | 2 | | 7 |
| | 細粒砂 | 7 | | 2 | 1 | 1 | | | | | 2 | | | | 1 | | | | | | 6 | | 23 |
| | 極細粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 6 | | 8 |
| | 粗粒シルト | 6 | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 12 |
| | 中粒シルト | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 401 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 13 |
| 備考 | 基質は褐色の雲母粘土鉱物で埋められ、褐色部には酸化鉄が濃集する。火山ガラスはパブルウォール型。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 土師器 高坏 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | 3 | | 1 | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | 1 | | 8 | |
| | 中粒砂 | 8 | 1 | 1 | | | | | | 2 | 1 | 2 | 3 | | 1 | 1 | | | 2 | | | 22 | |
| | 細粒砂 | 4 | | 3 | | | | | | 1 | 1 | 1 | | | 3 | | | | 1 | | | 13 | |
| | 極細粒砂 | 6 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 11 |
| | 粗粒シルト | | | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 | |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 298 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 8 |
| 備考 | 基質は褐色の雲母粘土鉱物で埋められ、褐色部には酸化鉄が濃集する。火山ガラスはパブルウォール型。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 土師器 高坏 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 極粗粒砂 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 粗粒砂 | 4 | | | | | | | | 2 | 1 | 1 | | | 4 | | | 1 | 1 | | | 14 | |
| | 中粒砂 | 9 | 1 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | | 3 | | | | | | | | 16 | |
| | 細粒砂 | 17 | | 10 | | | | | | 1 | 1 | | | 3 | | | | | | 1 | | 33 | |
| | 極細粒砂 | 13 | 4 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 18 | |
| | 粗粒シルト | 4 | | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 11 | |
| | 中粒シルト | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 611 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 52 |
| 備考 | 基質は褐色の雲母粘土鉱物で埋められ、褐色部には酸化鉄が濃集する。火山ガラスはパブルウォール型。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4 韓式土器 甕 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 粗粒砂 | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | 4 | |
| | 中粒砂 | 13 | 2 | 5 | | | | | | 3 | 2 | 5 | 2 | | 6 | 2 | | 1 | 1 | 4 | | 46 | |
| | 細粒砂 | 4 | 1 | 2 | | | | | | 1 | 1 | 1 | | | 1 | | | | | 1 | | 11 | |
| | 極細粒砂 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 粗粒シルト | 3 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 6 | |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 464 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 18 |
| 備考 | 基質は淡褐色の粘土鉱物で埋められている。試料表面付近に酸化鉄が濃集し、褐色帯が形成されている。変質岩は、褐色化した風化岩など。珪化岩は、凝灰岩、頁岩などが原岩とみられる。火山ガラスはパブルウォール型。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5 埴輪 甕 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 0 | |
| | 粗粒砂 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 3 | |
| | 中粒砂 | 1 | | | | | | | | | | 2 | | | 2 | | | | | | 1 | 13 | |
| | 細粒砂 | 7 | 1 | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | | | | | | 6 | |
| | 極細粒砂 | 3 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 | |
| | 粗粒シルト | 4 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 中粒シルト | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 256 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 16 |
| 備考 | 基質は主に粘土鉱物と酸化鉄で埋められている。酸化角閃石あり。凝灰岩はやや結晶質。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 土師器 甕 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 粗粒砂 | | | | | | | | | | 2 | | | | 1 | | | | | | | 3 | |
| | 中粒砂 | 5 | | | | | | | | | | 2 | | | 1 | | | | | | | 9 | |
| | 細粒砂 | 17 | 1 | 1 | | 1 | | | | | 1 | 1 | | | 2 | | | | | | | 25 | |
| | 極細粒砂 | 12 | | 6 | | | | | | | 2 | 2 | | | | | | | | | | 22 | |
| | 粗粒シルト | 2 | | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 9 | |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 505 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 8 |
| 備考 | 基質は酸化鉄、粘土鉱物などから主に構成され、石英、長石類のシルトも散在する。火山ガラスはパブルウォール型。凝灰岩は結晶質。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第10表 薄片観察結果(2)

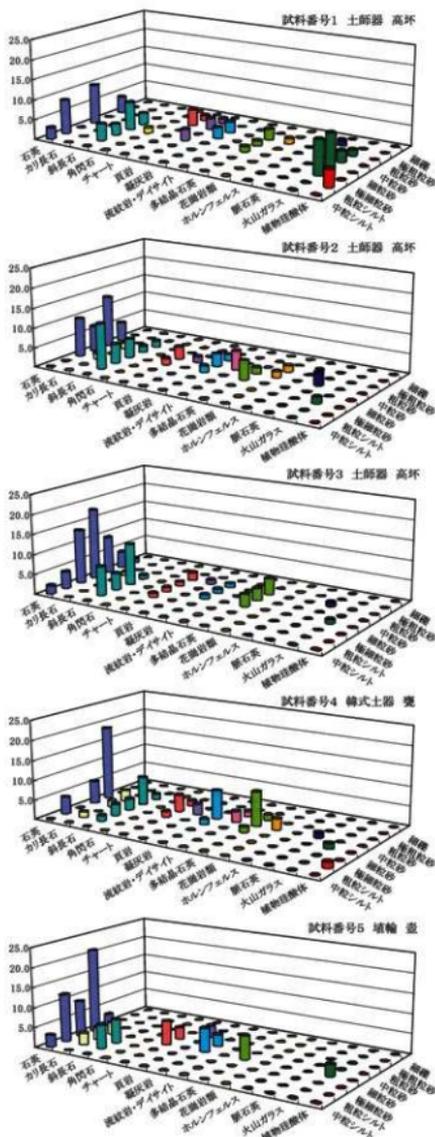
| 試料番号 | 砂粒区分 | 砂粒の種類構成 | | | | | | | | | | | | | その他 | 合計 | | | | | | | | |
|-----------|---|---------|------|-----|-----|-------|-----|-----|------|-------|------|----|-----|-----------|-----|----|-----|-------|-----|---------|-----|-----|-------|-------|
| | | 石英 | カリ長石 | 斜長石 | 角閃石 | 酸化角閃石 | 緑泥石 | 黒雲母 | ジルコン | 不透明鉱物 | チャート | 頁岩 | 凝灰岩 | 流紋岩・デイサイト | | | 安山岩 | 多結晶石英 | 花崗岩 | ホルンフェルス | 変質岩 | 珪化岩 | 火山ガラス | 酸化鉄結核 |
| 7 墳輪窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | 1 | | 1 | | | | | | 3 | | | 2 | | | | | | 4 | | | | | 11 |
| | 中粒砂 | 11 | 1 | 1 | | | | | | | | 2 | 1 | | | | | | 1 | | | | | 22 |
| | 細粒砂 | 15 | | 6 | | | | | | 3 | 1 | | 1 | | 3 | | | | | | | | | 30 |
| | 極細粒砂 | 18 | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 24 |
| | 粗粒シルト | 8 | | 1 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 15 |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 670 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 12 |
| 備考 | 基質は酸化鉄と褐色粘土鉱物で埋められ、淡褐色～褐色を示す。流紋岩・凝灰岩は結晶質だが、凝灰岩の一部には、粘土鉱物化したもの(第三系?)が認められる。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 8 墳輪窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | 0 |
| | 中粒砂 | | | | | | | | | | | 2 | 3 | 1 | | | | | | | | 1 | | 16 |
| | 細粒砂 | 2 | 2 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 12 |
| | 極細粒砂 | 5 | 1 | 2 | | | | | | 1 | | | | | 3 | | | | | | | | | 9 |
| | 粗粒シルト | 3 | | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 中粒シルト | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 325 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 11 |
| 備考 | 基質は雲母質。試料表面付近には酸化鉄が濃集している。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩は結晶質。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 9 墳輪窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | 5 | | | | | | | | 2 | 1 | | | | 2 | | 1 | | | | | | | 11 |
| | 中粒砂 | 3 | | | | | | | | 1 | 2 | 1 | | | 7 | | | | | | 1 | | | 15 |
| | 細粒砂 | 9 | | 10 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 20 |
| | 極細粒砂 | 11 | | 5 | | | | | | | 1 | | | | 2 | | | | | | | | | 19 |
| | 粗粒シルト | 3 | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 416 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 11 |
| 備考 | 基質は雲母質で淡褐色～褐色を示す。試料表面部には酸化鉄が帯状に濃集している。凝灰岩は、やや粘土鉱物化が進んでいる(第三紀?)。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10 墳輪窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 粗粒砂 | 8 | | | | | | | | 3 | 1 | | | | 3 | | | | | 1 | | | | 16 |
| | 中粒砂 | 13 | | 1 | | | | | | | | 1 | 1 | | 2 | | | | | | | | | 18 |
| | 細粒砂 | 30 | 3 | 4 | | | | | | 1 | 2 | | | | 2 | | | | | | | | | 42 |
| | 極細粒砂 | 30 | 2 | 9 | | | | | | | 3 | | 1 | | 2 | | | | | | | | | 48 |
| | 粗粒シルト | 24 | | 11 | | | | | | | 1 | 3 | | 1 | | 2 | | | | | | | | 37 |
| | 中粒シルト | 7 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 8 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 869 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 34 |
| 備考 | 基質は淡褐色の粘土鉱物および石英・長石類のシルトで主に構成されている。凝灰岩は結晶質。酸化角閃石、緑泥石あり。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11 墳輪窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | 2 |
| | 粗粒砂 | | | | | | | | | | 2 | 2 | 1 | | | 1 | | | | | | | | 8 |
| | 中粒砂 | 12 | 1 | 2 | | | 1 | | | | 4 | 1 | 3 | | | | | 1 | | | 1 | | | 27 |
| | 細粒砂 | 26 | | 5 | | | | | | | 3 | 5 | 4 | | | 3 | | | | | | | | 46 |
| | 極細粒砂 | 19 | 1 | 9 | 1 | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | | | | | 32 |
| | 粗粒シルト | 11 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 13 |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 814 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 20 |
| 備考 | 基質は雲母質で淡褐色～褐色を示す。試料表面部には酸化鉄が帯状に濃集している。凝灰岩は、結晶質なもの、粘土鉱物化しているもの(第三紀?)が認められる。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12 墳輪窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 粗粒砂 | 2 | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | 5 | | | | 1 | | | | 9 |
| | 中粒砂 | 11 | | 2 | | | | | | | 1 | | 2 | | | 2 | | | | | | | | 18 |
| | 細粒砂 | 16 | 1 | 9 | 1 | | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 2 | | | 6 | | | | | | | | 40 |
| | 極細粒砂 | 16 | | 5 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 25 |
| | 粗粒シルト | 13 | | 10 | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | 24 |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 0 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 604 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 12 |
| 備考 | 基質は雲母粘土鉱物と酸化鉄から主に構成されている。角閃石は弱酸化している。緑泥石、酸化角閃石あり。凝灰岩は、結晶質なもの、粘土鉱物化しているもの(第三紀?)が認められる。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第11表 薄片観察結果(3)

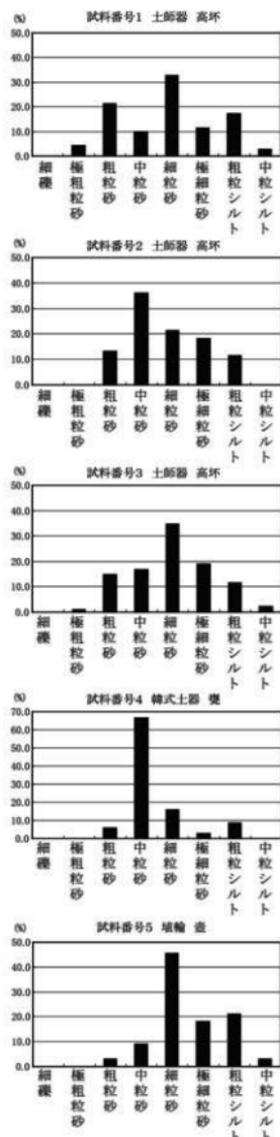
| 試料番号 | 砂粒区分 | 砂粒の種類構成 | | | | | | | | | | | | | 合計 | | | | | | | | | |
|----------------|--|---------|------|-----|-----|-------|-----|-----|------|-------|------|-----|-----------|-----|----|-----|-------|------|---------|-----|-----|-------|-------|-------|
| | | 石英 | カリ長石 | 斜長石 | 角閃石 | 酸化角閃石 | 緑泥石 | 黒雲母 | ジルコン | 不透明鉱物 | チャート | 凝灰岩 | 凝灰岩・デイサイト | 流紋岩 | | 安山岩 | 多結晶石英 | 花崗岩類 | ホルンフェルス | 変質岩 | 珪化岩 | 火山ガラス | 酸化鉄結核 | 植物性結核 |
| 13 堆輪 ? | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | 2 | | | | | | | | | | 4 |
| | 中粒砂 | 2 | 2 | | | | | | | 4 | | | | 1 | | | | | | | | | | 9 |
| | 細粒砂 | 13 | 1 | 5 | | | | | | 4 | | | | 3 | | | | | | | | | | 26 |
| | 極細粒砂 | 7 | | 2 | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | 15 |
| | 粗粒シルト | 20 | 2 | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 29 |
| | 中粒シルト | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 493 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 20 |
| 備考 | 基質は淡褐色の粘土および石英・長石類からなるシルトで埋められる。凝灰岩は結晶質。酸化角閃石あり。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14 堆輪 窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 2 |
| | 粗粒砂 | 6 | | | | | | | | 1 | 1 | | | 3 | | | | 1 | | | | | | 12 |
| | 中粒砂 | 9 | | | | | | | | 5 | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | 17 |
| | 細粒砂 | 10 | 2 | 5 | | | | | | 2 | | | | 1 | 1 | | 1 | | | | 2 | | | 23 |
| | 極細粒砂 | 10 | | 8 | | | | | | 2 | | | | 2 | | | | | | | | | | 22 |
| | 粗粒シルト | 7 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 12 |
| | 中粒シルト | 4 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 535 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 18 |
| 備考 | 基質は淡褐色の粘土および石英・長石類からなるシルトで埋められる。酸化角閃石あり。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15 堆輪 円筒 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| | 粗粒砂 | 4 | | | | | | | | 1 | 5 | | | 1 | | | 1 | | | | | | | 12 |
| | 中粒砂 | 3 | 2 | | | | | | | 1 | 1 | 3 | | 1 | | | 1 | | | | | | | 12 |
| | 細粒砂 | 22 | 2 | 7 | | | | | | 2 | 6 | | 1 | | | | | | | | 1 | | | 41 |
| | 極細粒砂 | 15 | 1 | 6 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | | 24 |
| | 粗粒シルト | 18 | | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 33 |
| | 中粒シルト | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 776 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 6 |
| 備考 | 基質は雲母粘土鉱物質で褐色を示す。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩は、粘土鉱物化が進んでいる(第三紀?)。緑泥石、白雲母あり。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16 堆輪 窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 粗粒砂 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 中粒砂 | 4 | 2 | 2 | | | | | | | 3 | | | 5 | | | | | | | | | | 16 |
| | 細粒砂 | 9 | 1 | 4 | | | | | | | 3 | | | 2 | | | | | | | | | | 19 |
| | 極細粒砂 | 14 | | 5 | | | | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | 22 |
| | 粗粒シルト | 9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 10 |
| | 中粒シルト | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 526 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 35 |
| 備考 | 基質は酸化鉄、淡褐色の粘土および石英・長石類からなるシルトから主に構成される。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17 堆輪 窓 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| | 粗粒砂 | 7 | 1 | | | | | | | 4 | 2 | | | 4 | | | | | | | | | | 18 |
| | 中粒砂 | 18 | 2 | | | | | | | 2 | 1 | 1 | | 3 | | | 1 | | | | | | | 27 |
| | 細粒砂 | 27 | 2 | 7 | 1 | | | | | 2 | 1 | 1 | | 2 | | | | | | | 1 | | | 44 |
| | 極細粒砂 | 29 | 2 | 10 | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 44 |
| | 粗粒シルト | 19 | 1 | 12 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 32 |
| | 中粒シルト | 4 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1118 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 25 |
| 備考 | 基質は雲母質で淡褐色～褐色を示す。試料表面部には酸化鉄が帯状に濃集している。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩は、結晶質なもの、粘土鉱物化しているもの(第三紀?)が認められる。ジルコンあり。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18 堆輪 円筒 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 粗粒砂 | 6 | | | | | | | | 1 | 1 | | 2 | 1 | 1 | | 1 | | | | | | | 13 |
| | 中粒砂 | 4 | | 3 | | | | | | 1 | 1 | | | 4 | | | | | | | | | | 13 |
| | 細粒砂 | 27 | 1 | 7 | | | | | | 2 | 1 | | | 7 | 1 | | 1 | | | | 1 | | | 48 |
| | 極細粒砂 | 22 | 1 | 12 | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | 38 |
| | 粗粒シルト | 11 | | 12 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 23 |
| | 中粒シルト | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1197 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 49 |
| 備考 | 基質は雲母質。火山ガラスはバブルウォール型。緑泥石あり。流紋岩は結晶質。凝灰岩は、粘土鉱物化しているものが多い(新第三紀?)。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第12表 薄片観察結果(4)

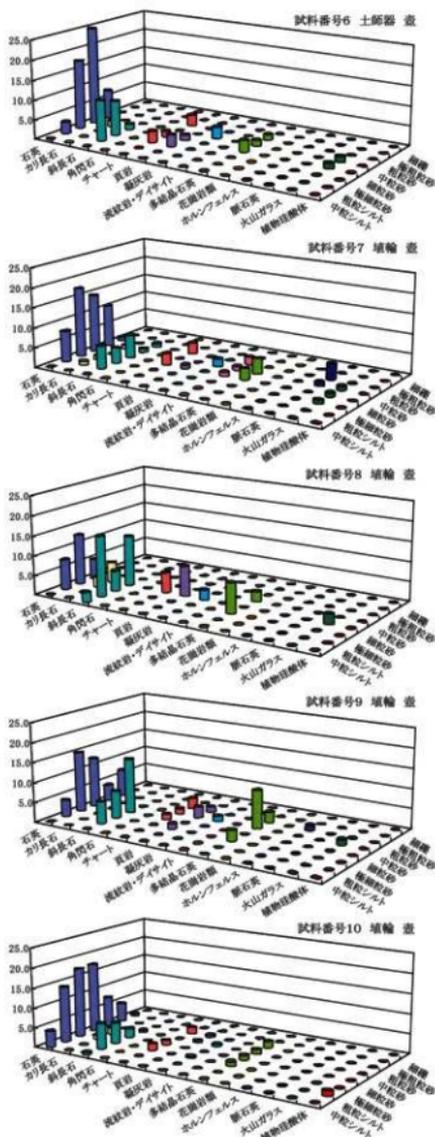
| 試料番号 | 砂粒区分 | 砂粒の種類構成 | | | | | | | | | | | | | その他 | 合計 | | | | | | | | |
|----------------|---|---------|------|-----|-----|-----|----|-------|------|------|----|-----|-----------|-----|-----|----|-------|------|---------|-----|-----|-----|-------|-------|
| | | 石英 | カリ長石 | 斜長石 | 角閃石 | 緑泥石 | 雲母 | 不透明鉱物 | シムコン | チャート | 頁岩 | 凝灰岩 | 流紋岩・デイサイト | 安山岩 | | | 多結晶石英 | 花崗岩類 | ホルンフェルス | 脈石英 | 変質岩 | 注名岩 | 火山ガラス | 酸化鉄結核 |
| 19 埴輪 円筒 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | 4 | | | | | | | 1 | | 2 | | | 2 | | | | | | | 2 | | | 11 |
| | 中粒砂 | 12 | 2 | | 1 | | | | | 4 | 2 | 4 | | | | | | | | | | 1 | | 30 |
| | 細粒砂 | 37 | 3 | 7 | | | | | 1 | 1 | 1 | 4 | | | 3 | | | | | | | | 3 | 57 |
| | 極細粒砂 | 19 | 4 | 4 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 29 |
| | 粗粒シルト | 8 | 8 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 17 |
| | 中粒シルト | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 876 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 22 |
| 備考 | 基質は雲母質で淡褐色～褐色を示す。試料表面では酸化鉄が帯状に濃集する。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩は、粘土鉱物化しているもの(新第三紀?)と、結晶質なものも混在する。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20 埴輪 壺 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 |
| | 粗粒砂 | 3 | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | 13 |
| | 中粒砂 | 4 | 2 | | | | | | 1 | | 2 | | | 4 | | | | | | | 1 | | | 28 |
| | 細粒砂 | 18 | 3 | 6 | | | | | 7 | | | | 3 | | | | | | | | | | | 27 |
| | 極細粒砂 | 19 | 6 | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | 21 |
| | 粗粒シルト | 17 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 21 |
| | 中粒シルト | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 750 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 12 |
| 備考 | 基質は主に酸化鉄と雲母粘土鉱物で埋められている。凝灰岩は、粘土鉱物化しているもの(新第三紀?)と、結晶質なものも混在する。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 21 埴輪 壺 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | 2 |
| | 中粒砂 | 12 | 1 | 1 | | | | | | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | 18 |
| | 細粒砂 | 13 | 1 | 3 | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | 19 |
| | 極細粒砂 | 12 | 1 | | | 1 | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | 17 |
| | 粗粒シルト | 11 | 1 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | 22 |
| | 中粒シルト | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 709 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 30 |
| 備考 | 基質は主に酸化鉄と雲母粘土鉱物で埋められている。酸化鉄は試料表面付近に濃集している。酸化角閃石あり。角閃石は副酸化している。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 22 埴輪 円筒 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 粗粒砂 | 8 | 1 | | | | | | | 1 | | | | 2 | | | | | | | | | | 12 |
| | 中粒砂 | 5 | | 1 | | | | | | 3 | 2 | | | 2 | 1 | | | | | | 1 | | | 15 |
| | 細粒砂 | 18 | 2 | 8 | 1 | | | | | 1 | 1 | 3 | 1 | | 7 | | | | | | | | | 42 |
| | 極細粒砂 | 13 | 3 | 4 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 21 |
| | 粗粒シルト | 9 | 9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 18 |
| | 中粒シルト | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 798 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 38 |
| 備考 | 基質は雲母粘土鉱物質で褐色を示す。凝灰岩は、粘土鉱物化しているもの(新第三紀?)と、結晶質なものも混在する。緑泥石あり。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 23 土師 壺 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 粗粒砂 | 1 | | | | | | | | 2 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | 5 |
| | 中粒砂 | 4 | 3 | | | | | | | 3 | | | | 1 | | | | | | | | | | 11 |
| | 細粒砂 | 17 | 1 | 6 | | | | | | 1 | 1 | 1 | | 1 | | | | | | | | | | 28 |
| | 極細粒砂 | 17 | 9 | | | | | | | 1 | 1 | 1 | | 1 | | | | | | | | 1 | | 31 |
| | 粗粒シルト | 9 | 9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 11 |
| | 中粒シルト | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 708 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 12 |
| 備考 | 基質は主に白色の粘土鉱物、酸化鉄およびシルトサイズの石英・長石類で埋められている。頁岩はチャートに近い岩相を示す。酸化角閃石あり。凝灰岩は結晶質。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 24 埴輪 壺 | 細礫 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 極粗粒砂 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 2 |
| | 粗粒砂 | 9 | | | | | | | | 4 | 2 | 1 | | 5 | | | | | | 2 | | 1 | | 24 |
| | 中粒砂 | 11 | 1 | | | | | | | 2 | 1 | | | 4 | | | | | | | | | | 19 |
| | 細粒砂 | 14 | 4 | | | | | | | 2 | 4 | | | 3 | | | | | 1 | 1 | | | | 29 |
| | 極細粒砂 | 21 | 2 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | | 26 |
| | 粗粒シルト | 10 | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | 11 |
| | 中粒シルト | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 基質 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 777 |
| | 孔隙 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 16 |
| 備考 | 基質は主に白色の粘土鉱物と酸化鉄で埋められている。酸化鉄は試料表面付近に濃集する。緑泥石あり。凝灰岩は、粘土鉱物化しているもの(新第三紀?)と、結晶質なものも混在する。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |



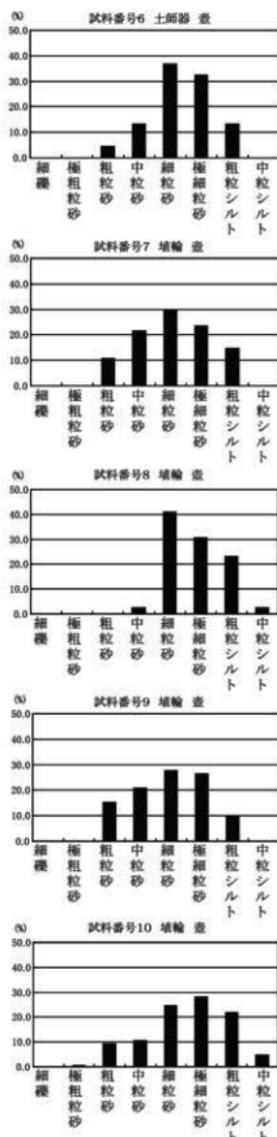
第93図 各粒度層における鉱物・岩石出現頻度 (1)



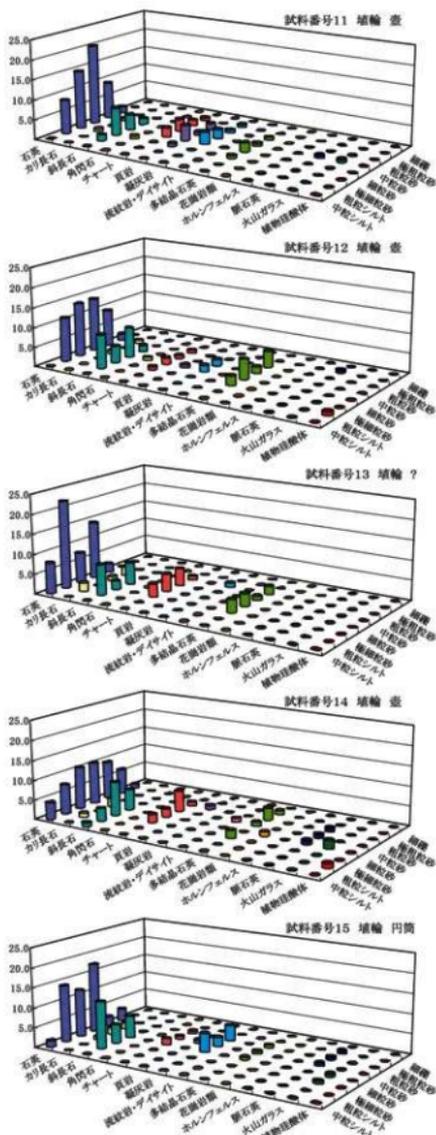
第94図 胎土中の砂の粒径組成 (1)



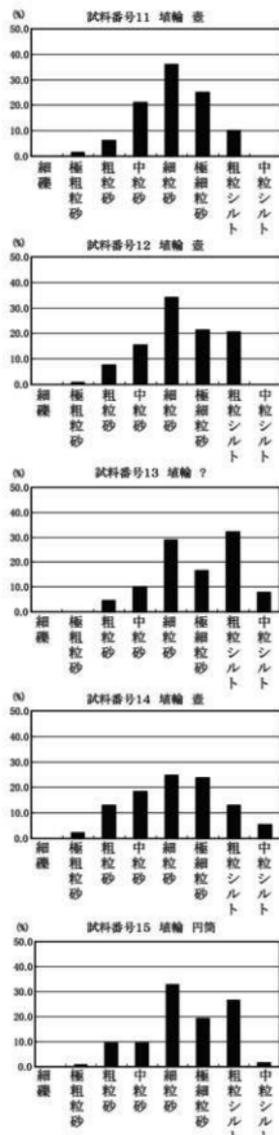
第95図 各粒度層における鉱物・岩石出現頻度 (2)



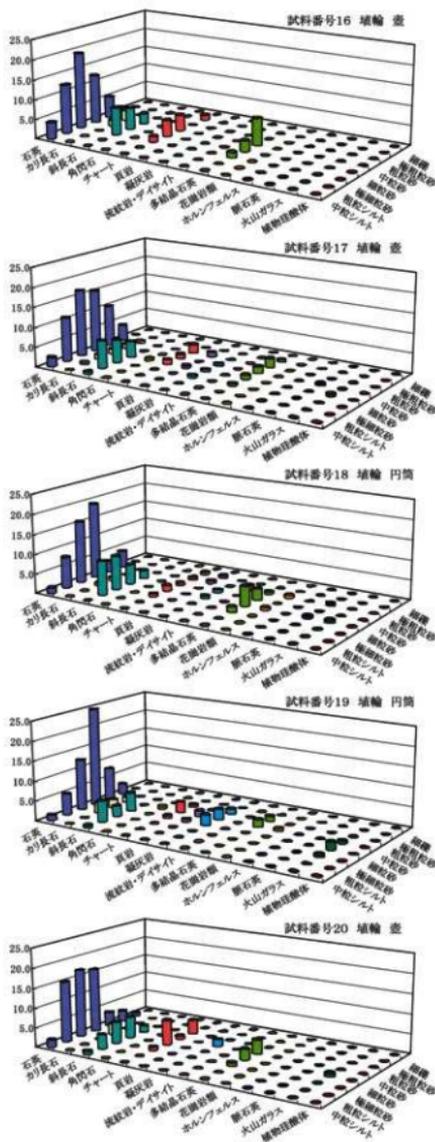
第96図 胎土中の砂の粒径組成 (2)



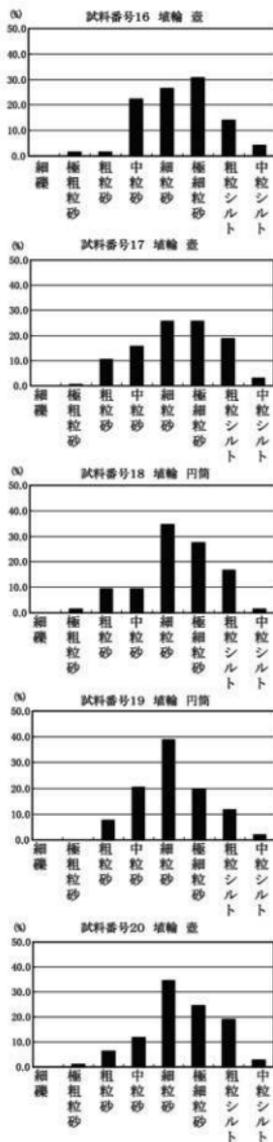
第97図 各粒度層における鉱物・岩石出現頻度 (3)



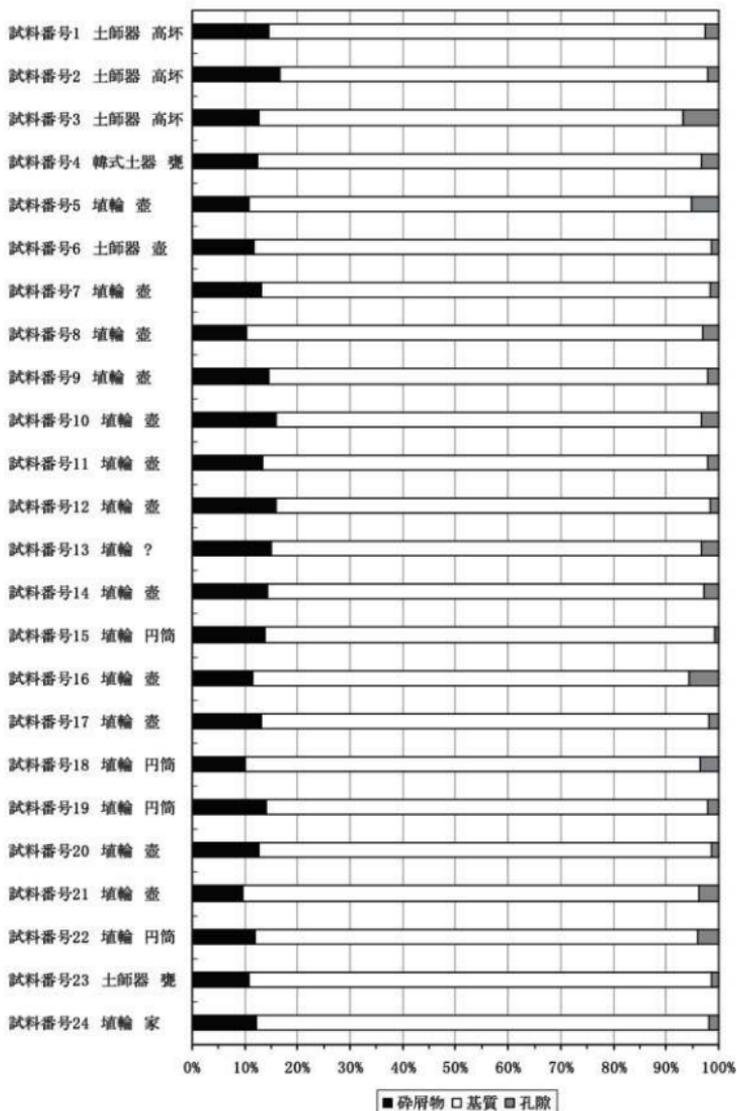
第98図 胎土中の砂の粒径組成 (3)



第99図 各粒度層における鉱物・岩石出現頻度 (4)



第100図 胎土中の砂の粒徑組成 (4)



第101図 碎屑物・基質・孔隙の割合

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを提示する。

3. 結果

観察結果を第9表～第12表・第93図～第101図に示す。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からN類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下のようになる。

試料番号1の試料は、火山ガラスの多い組成が特徴である。また、火山ガラスの形態は、平板状のいわゆるバブル型がほとんどを占めている。火山ガラス以外の砂粒としては、石英と斜長石の鉱物片を少量～微量伴い、岩石片ではチャートや頁岩などの堆積岩類と凝灰岩および多結晶石英を少量含む。火山ガラスの多い組成は、これまでの分類では、A2類とK2類の2種類がある。これらのうち、A2類は、堆積岩類、火砕岩類および花崗岩類の3種類の岩石片を含むことが特徴とされ、K2類は、堆積岩類と火砕岩類の2種類が特徴とされた。試料番号1には微量の花崗岩類も含まれるが、後述するようにこれまでの古加川流域における出現傾向とその地質学的背景から、今回の試料番号1はK2類に分類される。

試料番号2以下のほとんどの試料は、鉱物片では石英が多く、次いで斜長石を多く含み、微量のカリ長石を伴い、岩石片ではチャート、頁岩の堆積岩類と凝灰岩および多結晶石英を少量ずつ含み、試料によっては微量～極めて微量の流紋岩・デイサイトや花崗岩類、脈石英、変質岩、珪化岩、火山ガラスなどを含んでいる。この組成は、上述したK類の組成のうち、火山ガラスが微量あるいは含まれない組成すなわちK1類に相当する。今回の試料では、試料番号2以外にも多数の試料がこれに分類され、上述のK2類の試料番号1と下記のD類に分類される6点以外の合計17点がK1類に分類される。なお、上述したK2類も含めて、今回のK1類中の凝灰岩には、試料によって結晶質なもの、粘土化したものおよび両者が混在するものが認められている。

試料番号13、14、16の3点は、鉱物片の組成は上述したK類と同様であるが、岩石片では、チャートや頁岩の堆積岩類と多結晶石英が主体をなし、K類の主要な岩石片であった凝灰岩は極めて微量が含まれない。このことから、K類とは区別し、堆積岩類を主体とする組成であるD類に分類する。D類の中では、チャートの多いD2類に分類される。

試料番号21、23、24の3点も、上述したD2類の3点と同様に堆積岩類と多結晶石英を主体とし、凝灰岩は極めて微量が含まれない。堆積岩類の構成をみると、チャートと頁岩からなるが、特にどちらが卓越するというものもない。このような組成はD3類に相当する。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料により異なる。ここでは、モードを示す粒径により、粗粒傾向の組成から細粒傾向の組成に向かって、順に1類から6類までの分類を設定した。各分類の内容とそれに分類される試料を以下に示す。

- 1類：中粒砂をモードとする。試料番号2、4。
- 2類：細粒砂をモードとするが、粗粒砂の割合も比較的高い。試料番号1、24。
- 3類：細粒砂をモードとし、次いで極細粒砂が多い。試料番号3以下13点（後述の第13表参照）。

第13表 胎土分類結果

| 試料 番号 | 報告 № | 遺構 | 時期 | 種別 | 器種 | 鉱物・岩石 | | | | 粒径組成 | | | | | | |
|----------|---------|-------|--------|------|----|-------|----|----|----|------|---|---|---|---|---|--|
| | | | | | | K1 | K2 | D2 | D3 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | |
| 1 | 39 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 高坏 | | | | | | | | | | | |
| 2 | 33 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 高坏 | | | | | | | | | | | |
| 3 | 31 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 高坏 | | | | | | | | | | | |
| 4 | 41 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 甕系土器 | 甕 | | | | | | | | | | | |
| 5 | 91 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 6 | 23 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 7 | 134 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 8 | 106 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 9 | 109 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 10 | 117 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 11 | 94 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 12 | 89 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 13 | 165 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 鳥 | | | | | | | | | | | |
| 14 | 162 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 15 | 59 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 | | | | | | | | | | | |
| 16 | 100 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 17 | 92 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 18 | 63 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 | | | | | | | | | | | |
| 19 | 188 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 | | | | | | | | | | | |
| 20 | 88 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 21 | 137 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 壺 | | | | | | | | | | | |
| 22 | 85 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 円筒 | | | | | | | | | | | |
| 23 | 21 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 土師器 | 甕 | | | | | | | | | | | |
| 24 | 167 | 東沢1号墳 | 古墳時代中期 | 埴輪 | 家 | | | | | | | | | | | |

4類:細粒砂をモードとし、次いで粗粒シルトが多い。試料番号5、15。

5類:極細粒砂をモードとする。試料番号10、16、23。

6類:粗粒シルトをモードとする。試料番号13、21。

碎屑物・基質・孔隙の割合では、碎屑物の割合が全点ともに10~15%前後であり、特に分類できるような傾向は認められない。

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成および粒径組成における分類結果は、一覧にして第13表に示す。

4. 考察

(1) 胎土の鉱物・岩石組成と東沢1号墳の地質学的背景

加古川下流域におけるこれまでの分析例では、坂元遺跡や大中遺跡および溝之口遺跡の各地から出土した弥生土器、土師器および埴輪の胎土分析がある。これら分析例では、K類の組成が、試料の多数を占めるという結果が得られており、かつK類の組成は、加古川下流域の地質学的背景と整合するとされた。加古川水系流域に分布する地質については、猪木(1981)や河田ほか(1986)および日本の地質「近畿地方」編集委員会編(1987)などにより概要を知ることができるが、さらに、詳細には、尾崎ほか(1995)、尾崎・松浦(1988)、藤田・笠間(1983)、吉川ほか(2005)、栗本ほか(1993)、栗本・牧本(1990)のいずれも5万分の1スケールの地質図によって確認することができる。加古川水系(すなわち支流も含む)流域のうち、下流域から中流域にかけては、中生代白亜紀の流紋岩やデイサイト質の溶岩および火

砕岩（凝灰岩）からなる相生層群および有馬層群が分布し、上流域には中生代ジュラ紀のチャート・砂岩・頁岩からなる丹波帯が分布する。また、支流の美養川や志染川流域の山地には新第三紀中新世の砂岩・泥岩・礫岩・凝灰岩からなる神戸層群が分布している。この神戸層群を構成する凝灰岩は、支流の東条川や復井町から業多町に至る加古川本流の側壁や川底にも露出しているという記載もある（尾崎ほか、1995）。これらの記載により、K1類を構成する主要な岩石片のうち、堆積岩類の由来は丹波帯とされ、凝灰岩のうち、結晶質のものは相生層群または有馬層群に由来し、粘土化したものは神戸層群に由来すると考えることができる。さらに、上述した加古川流域の地質の中には花崗岩類の分布は記載されていないこともK1類の組成と整合する。それでもK1類には花崗岩類が微量含まれることについては、神戸層群中の堆積岩類や後述する大阪層群中の砕屑物に混在している花崗岩礫に由来すると考えられる。

K2類の特徴とされる火山ガラスについては、加古川下流域の相生層群からなる山地の縁辺に分布する丘陵を構成している第四紀更新世の河成・海成層である大阪層群に由来する可能性がある。大阪層群中には、バブル型火山ガラスからなるテフラ層が多数挟在しているのである。

以上のことから、本分析においてもK1類およびK2類については、加古川下流域という範囲での在地性を示す胎土であると判断される。

一方、D2類とD3類は、堆積岩類が多いことでK類とは区別した分類であるが、結晶質および粘土化した凝灰岩も認められることから、由来する地質学的背景は、K類と同様に加古川流域である可能性が高い。D類の組成には、多結晶石英や脈石英など物理的に残存しやすい砕屑物も比較的多く含まれる試料が認められることを考慮すれば、凝灰岩の少ないD類の組成は、加古川下流域の中でも更新世の段丘堆積物などの浸食と運搬と堆積が繰り返されて形成された地質に由来する可能性があると考えられる。

上述した各胎土分類が、加古川下流域内でさらに局地的な地域性を示すか否かについては、自然堆積物の分析も含めた周辺における分析事例の蓄積をしながら検討を重ねる必要がある。

(2) 土器・埴輪の器種と胎土との対応関係

今回の試料は、全て1基の古墳から出土した土器および埴輪であるが、鉱物・岩石組成では4種類、粒径組成では6種類の異なる胎土を見出すことができた。これら胎土の分類と器種との対応は以下の通りである。

1) 土師器 高坏

3点のうち、2点はK1類であるが1点はK2類である。粒径組成では、K1類の試料も1類と3類とに分かれ、K2類の試料はいずれとも異なる2類に分類された。

2) 土師器 壺・甕

壺は1点のみであるがK1類であり、粒径組成は3類である。これに対して、甕とされた試料は、D3類に分類され、粒径組成は5類に分類された。

3) 韓式土器 甕

試料は1点のみであり、鉱物・岩石組成はK1類、粒径組成は1類に分類された。

4) 埴輪 壺

12点のうち、K1類が9点、D2類が2点、D3類が1点分類された。粒径組成では、K1類の試料のうち、7点はともに3類であるが、1点は4類に、1点は5類に分類された。また、D2類の試料は3類と5類、D3類の試料は6類に分類された。

5) 埴輪 円筒

4点の試料全点がK1類に分類された。粒径組成では1点のみ4類に分類され、他の3点はいずれも3類に分類された。

6) 埴輪 家

試料は1点のみであるが、鉱物・岩石組成はD3類、粒径組成は2類である。

7) 埴輪 器種不明

試料は1点のみであり、鉱物・岩石組成はD2類に分類された。粒径組成では、試料は6類に分類された。

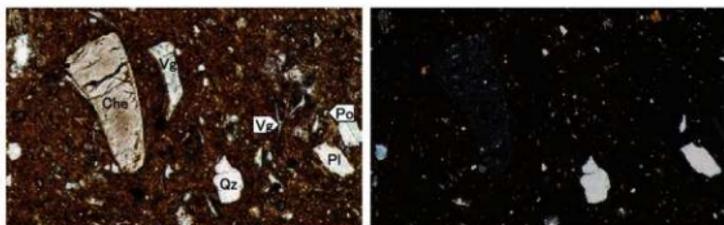
1)～7)までの状況から、東沢1号墳出土の土師器および埴輪は、共通してK1類かつ3類という胎土が主体となっていることが取られる。すなわち、土師器も埴輪も、その多くはほぼ同じような材料により作られていた可能性がある。ただし、詳細に見れば、その事情は器種によって若干の違いのあったことが示唆される。高環には主体となる胎土の試料と、それとは鉱物・岩石組成は同じであるが粒径組成が異なる胎土の試料、鉱物・岩石組成も粒径組成も異なる胎土の試料の3種類が混在し、壺とされた試料は、主体となる胎土とは鉱物・岩石組成も粒径組成も異なっている。また、韓式土器の壺は鉱物・岩石組成は主体となる胎土と同様であるが、粒径組成では異なる胎土を有している。土師器の高環にも同様の胎土が認められることから、特に遠方からの搬入品ということではないと判断される。

埴輪については、K1類かつ3類の胎土が主体となる傾向が明瞭である。ただし、円筒は粒径組成の異なる4類の試料が混在するということが指摘できる。一方、壺形では、12点のうち7点はK1類かつ3類であるが、残る5点のうち、2点は粒径組成が異なり、他の3点は鉱物・岩石組成も粒径組成も異なっている。今回の試料を見る限りにおいては、朝顔や円筒に比べると胎土のばらつきが大きいと言える。さらに家形埴輪は、鉱物・岩石組成も粒径組成も主体となる胎土とは異なっており、製作過程における他の埴輪との事情の違いが示唆される。

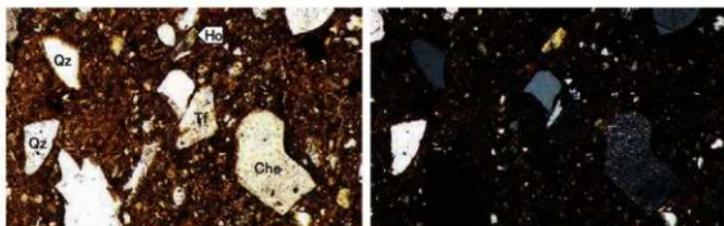
現時点では、それぞれの器種における胎土の違いが、具体的にどのような事情の違いを示しているかまでは知ることができない。製作者や製作場所の違いだけでなく、目的や用途に合わせた材質の違いなども考えられる。今後のこの地域における発掘調査事例からの考古所見の進展とともに、今回のような胎土分析結果を再評価、再検討していきたいと考える。

引用文献

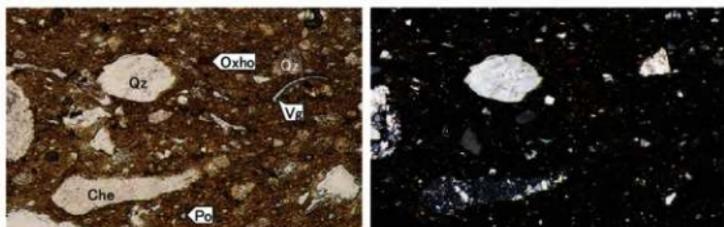
- 藤田和夫・笠間太郎,1983,神戸地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,115p.
猪木幸男,1981,20万分の1地質図幅 姫路,地質調査所。
河田清雄・宮村 学・吉田史郎,1986,20万分の1地質図幅 京都及大阪,地質調査所。
栗本史雄・牧本 博,1990,福知山地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,97p.
栗本史雄・松浦浩久・吉川敏之,1993,篠山地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,85p.
松田順一郎・三輪若業・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-,日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121。
日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質6 近畿地方,共立出版,297p。
尾崎正紀・松浦浩久,1993,三田地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,93p。
尾崎正紀・栗本史雄・原山 智,1995,北条地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,100p。
吉川敏之・栗本史雄・青木正博,2005,生野地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1図幅),産総研地質調査総合センター,48p。



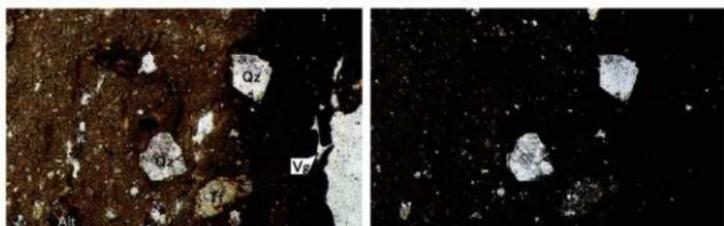
1 試料番号1(報告No.39 東沢1号墳 古墳時代中期 土師器 高坏)



2 試料番号2(報告No.33 東沢1号墳 古墳時代中期 土師器 高坏)



3 試料番号3(報告No.31 東沢1号墳 古墳時代中期 土師器 高坏)



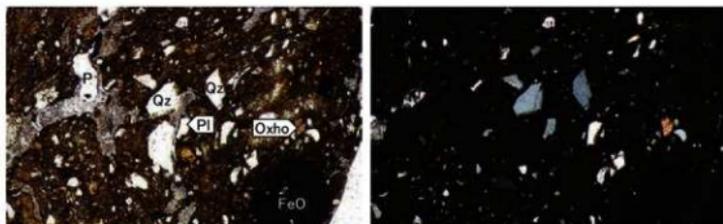
4 試料番号4(報告No.41 東沢1号墳 古墳時代中期 韓式土器 甕)

Qz:石英, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Che:チャート, Tf:凝灰岩,
Alt:変質岩(風化岩), Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体。

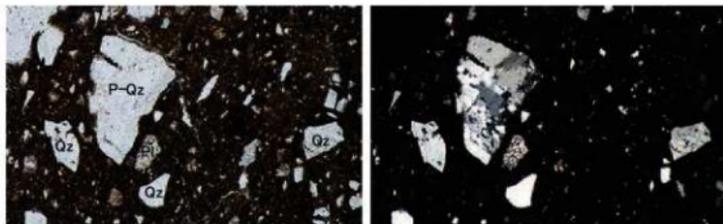
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

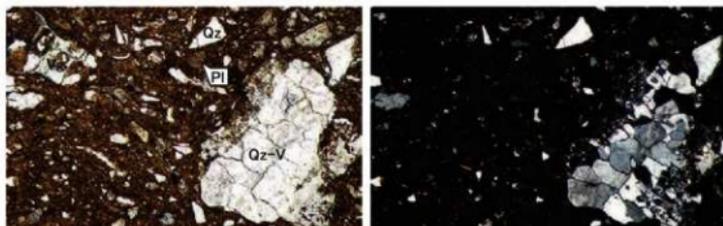
第102図 胎土薄片(1)



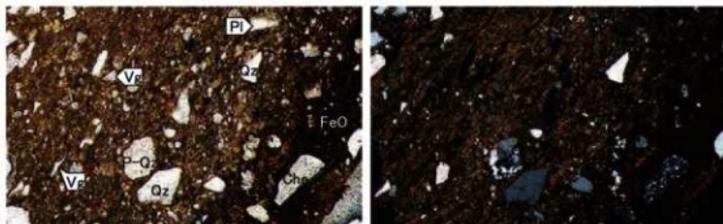
5. 試料番号5(報告No.91 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)



6. 試料番号6(報告No.23 東沢1号墳 古墳時代中期 土師器 壺)



7. 試料番号7(報告No.134 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)

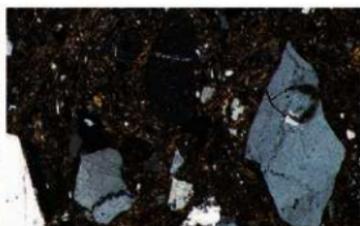


8. 試料番号8(報告No.106 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)

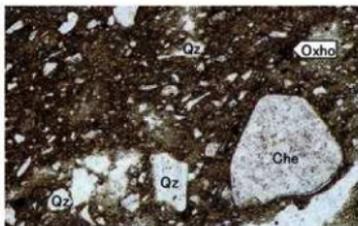
Qz:石英, Pl:斜長石, Oxho:酸化角閃石, Che:チャート, P-Qz:多結晶石英,
Qz-V:脈石英, Vg:火山ガラス, FeO:酸化鉄, P:孔隙。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

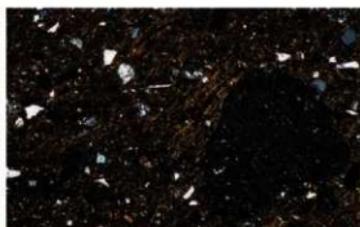
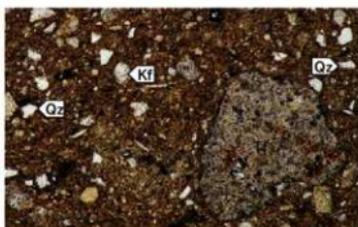
0.5mm



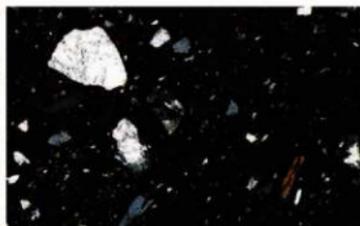
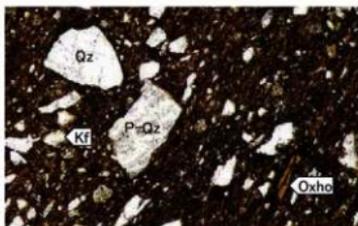
9.試料番号9(報告No.109 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)



10.試料番号10(報告No.117 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)



11.試料番号11(報告No.94 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)



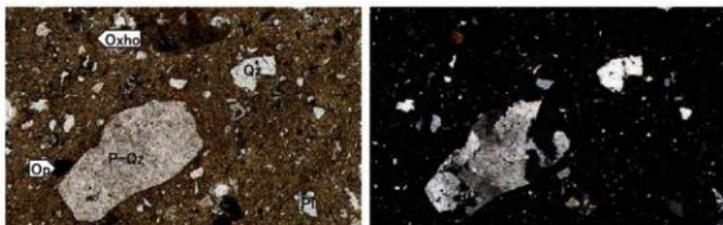
12.試料番号12(報告No.89 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Oxho:酸化角閃石, Che:チャート, Sh:頁岩, Tf:凝灰岩,
P-Qz:多結晶石英

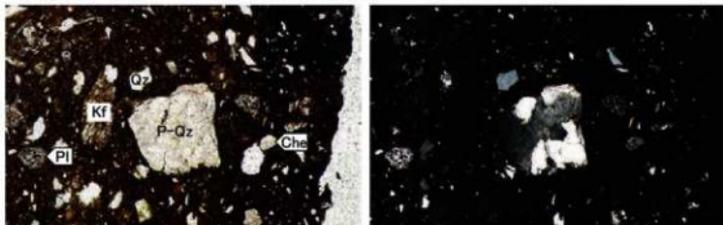
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第104図 胎土薄片(3)

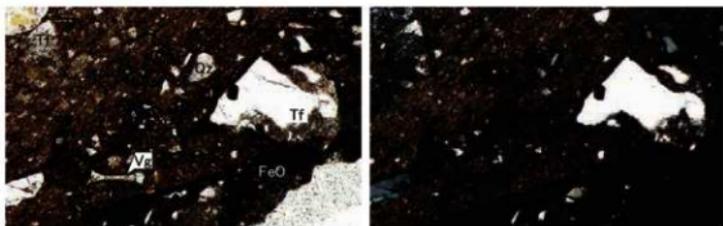
0.5mm



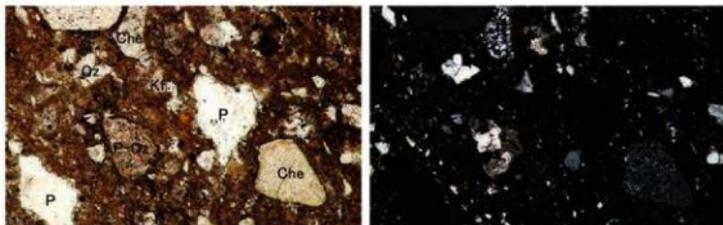
13.試料番号13(報告No.165 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 ?)



14.試料番号14(報告No.162 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)



15.試料番号15(報告No.59 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 円筒)

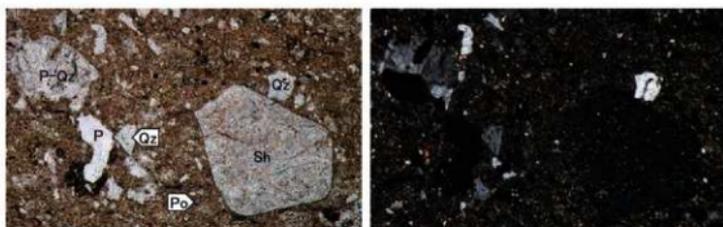


16.試料番号16(報告No.100 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)

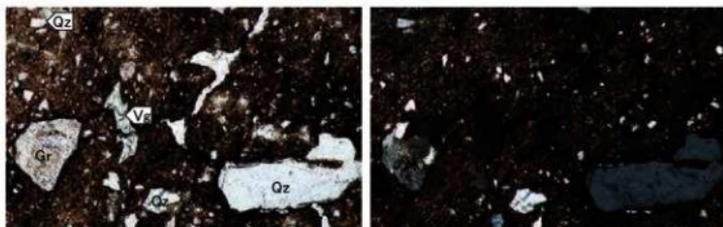
Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Oxho:酸化角閃石, Op:不透明鉱物, Che:チャート, Tf:凝灰岩, P-Qz:多結晶石英, Vg:火山ガラス, FeO:酸化鉄, P:孔隙。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

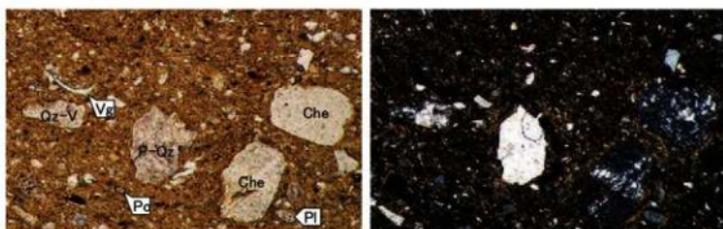
第105図 胎土薄片(4)



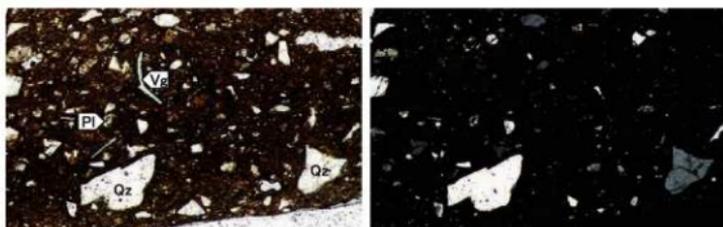
17.試料番号17(報告No.92 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)



18.試料番号18(報告No.63 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 円筒)



19.試料番号19(報告No.188 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 円筒)



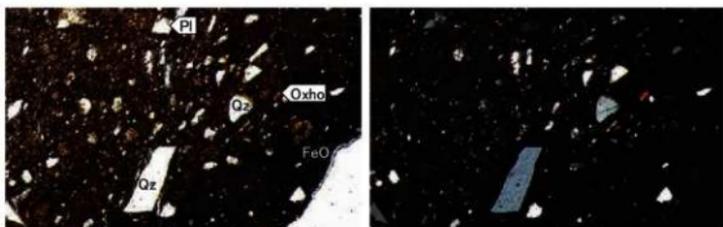
20.試料番号20(報告No.88 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)

Qz:石英, Pl:斜長石, Che:チャート, P-Qz:多結晶石英, Gr:花崗岩, Qz-V:脈石英,
Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体, P:孔隙

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第106図 胎土薄片(5)

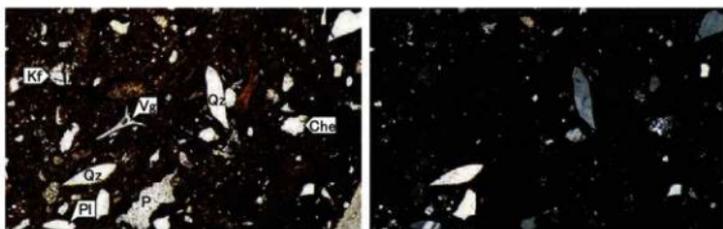
0.5mm



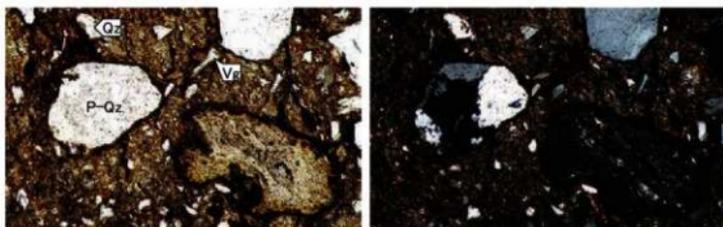
21.試料番号21(報告No.137 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 壺)



22.試料番号22(報告No.85 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 円筒)



23.試料番号23(報告No.21 東沢1号墳 古墳時代中期 土師器 壺)



24.試料番号24(報告No.167 東沢1号墳 古墳時代中期 埴輪 家)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Oxho:酸化角閃石. Che:チャート. Tf:凝灰岩.
P-Qz:多結晶石英. Vr:火山ガラス. FeO:酸化鉄. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第3節 東沢1号墳出土須恵器の蛍光X線分析

大阪大谷大学 三辻利一

1) はじめに

古墳時代の須恵器の大生産地は和泉陶邑であり、5世紀代、6世紀代にはそれぞれ、100基を越える窯跡が発見されている。これに対して、地方窯は限られた地域に、数基程度の少数の窯跡が発見されているに過ぎない。これまでの研究で陶器製品は全国各地の古墳から検出されているのに対して、地方窯の製品は窯周辺の古墳からしか検出されていない。陶器製品は一方向的に、全国各地の古墳へ供給されていたのである。地方窯の製品の伝播はどの程度の広がりをもっているのかまだ、データ集積の段階にある。本報告では東沢1号墳から出土した古墳時代の須恵器(第14表)の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 試料処理法と分析法

須恵器片試料は表面を研磨したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で、100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成し、蛍光X線分析用の試料とした。

理学電機製 RIX2100(波長分散型)の装置をつかって蛍光X線分析した。X線管球(Rh)の使用条件は50kV、50mA(出力2.5kW)である。測定元素はNa、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素である。Si、Alは粘土鉱物の骨格を形成する元素であり、地域差を示す可能性が少ないと判断して、最初から測定しなかった。分析値は同じ日に測定された岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度をつかって標準化した値で表示した。

第14表 分析値

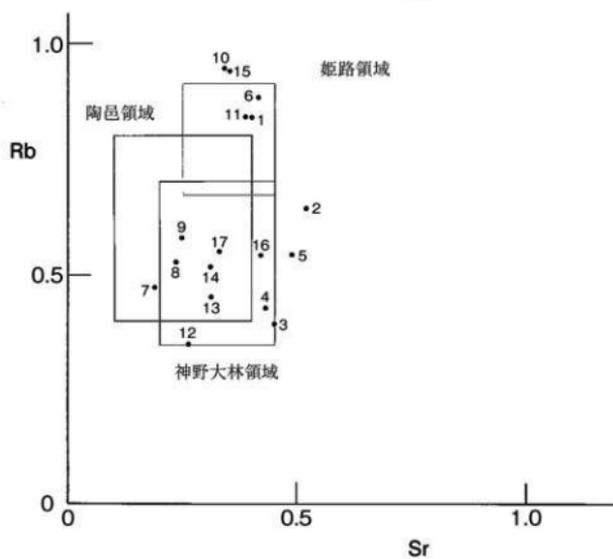
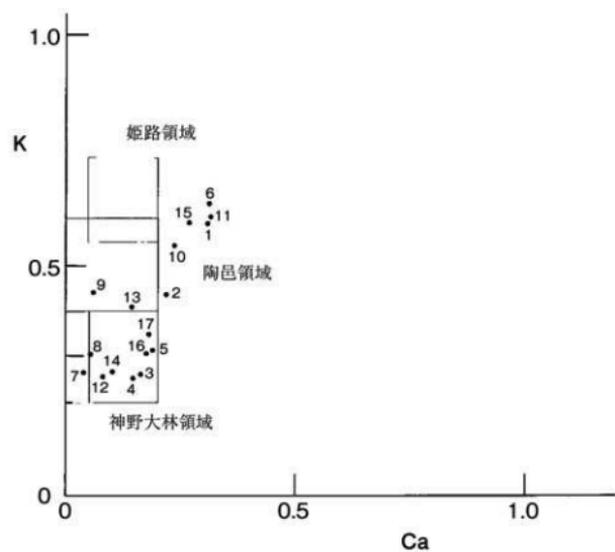
| 試料番号 | 報告No. | 三辻研No. | 器種 | K | Ca | Fe | Rb | Sr | Na | 分類 | D ² (神野大林) | D ² (陶邑) | 推定産地 |
|------|-------|--------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|-----------------------|---------------------|-------|
| 1 | 6 | 23-22 | 高杯 | 0.594 | 0.312 | 2.450 | 0.840 | 0.404 | 0.141 | A | 74.50 | 50.00 | 姫路 |
| 2 | 2 | 123 | 高杯 | 0.435 | 0.221 | 1.880 | 0.641 | 0.522 | 0.229 | C | 14.60 | 12.10 | 不明 |
| 3 | 3 | 124 | 高杯 | 0.263 | 0.160 | 2.300 | 0.388 | 0.452 | 0.120 | B | 12.10 | 33.70 | 神野大林? |
| 4 | 1 | 125 | 高杯 | 0.254 | 0.151 | 2.140 | 0.425 | 0.428 | 0.122 | B | 10.00 | 32.50 | ○ |
| 5 | 4 | 126 | 高杯 | 0.317 | 0.188 | 2.070 | 0.540 | 0.488 | 0.184 | B | 7.80 | 27.30 | ○ |
| 6 | 174 | 127 | 高杯蓋 | 0.633 | 0.314 | 2.330 | 0.880 | 0.417 | 0.152 | A | 77.00 | 52.20 | 姫路 |
| 7 | 175 | 128 | 杯蓋 | 0.267 | 0.036 | 1.730 | 0.470 | 0.190 | 0.071 | B | 2.70 | 10.50 | 神野大林 |
| 8 | 176 | 129 | 杯身 | 0.314 | 0.056 | 3.130 | 0.527 | 0.233 | 0.058 | B | 2.40 | 7.10 | ○ |
| 9 | 11 | 130 | 鉢 | 0.442 | 0.058 | 2.940 | 0.577 | 0.252 | 0.165 | C | 14.20 | 1.30 | 陶邑 |
| 10 | 17 | 131 | 壺 | 0.541 | 0.237 | 1.800 | 0.940 | 0.340 | 0.114 | A | 37.20 | 38.60 | 姫路 |
| 11 | 15 | 132 | 壺 | 0.595 | 0.315 | 2.570 | 0.844 | 0.392 | 0.116 | A | 82.50 | 55.10 | ○ |
| 12 | 14 | 133 | 壺 | 0.257 | 0.081 | 3.130 | 0.348 | 0.258 | 0.110 | B | 4.00 | 14.50 | 神野大林 |
| 13 | 12 | 134 | 壺 | 0.412 | 0.141 | 2.450 | 0.454 | 0.308 | 0.096 | C | 14.80 | 3.70 | 陶邑 |
| 14 | 210 | 135 | 壺 | 0.267 | 0.101 | 2.480 | 0.576 | 0.306 | 0.071 | B | 2.00 | 18.00 | 神野大林 |
| 15 | 13 | 136 | 壺 | 0.594 | 0.272 | 1.870 | 0.938 | 0.352 | 0.115 | A | 62.30 | 51.30 | 姫路 |
| 16 | 18 | 137 | 器台 | 0.31 | 0.177 | 2.280 | 0.543 | 0.423 | 0.096 | B | 3.40 | 21.20 | 神野大林 |
| 17 | 19 | 138 | 壺 | 0.348 | 0.184 | 2.990 | 0.553 | 0.330 | 0.069 | B | 10.50 | 13.70 | 不明 |

3) 分析結果

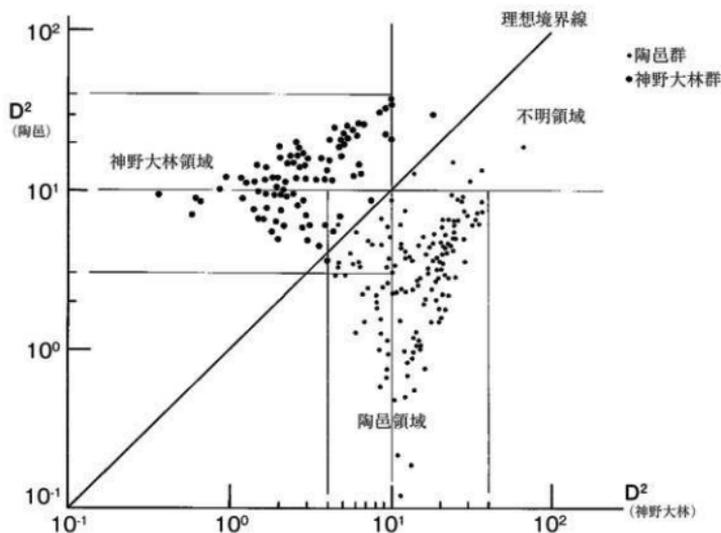
分析値は第14表にまとめられている。全分析値はJG-1による標準化値である。この結果に基づいて作成したKCa、RbSrの両分布図を第108図に示す。データ解析の第一歩は両分布図を作成することである。主成分元素K、Ca、微量元素Rb、Srは素材粘土の母岩を構成した主成分鉱物、長石類に由来する元素である。筆者の30年にわたる研究で、両分布図上で全国各地の窯跡群出土須恵器は地域差を示すことが実証されているが、日本列島の地質の基盤を構成する花崗岩類もまた、両分布図上で地域差を示すことも明らかにされている。その結果、窯跡群出土須恵器の地域差の原因は母岩の長石類であると考えられている。

第108図には比較対照のため、窯跡群出土須恵器の分析データに基づいて定性的な陶邑領域、姫路領域、神野大林領域（相生市）を描いてある。これらの領域と対照することによって、今回分析した須恵器試料の生産地を定性的に推定することができる。まず、No.1、6、10、11、15の5点の試料は両分布図において、他の試料群から離れて分布することがわかる。これら5点の須恵器は同じ産地の製品であり、他の12点の須恵器とは別産地の製品であることは明白である。これら5点をA群と分類した。他の12点の試料は神野大林領域を中心に分布していることがわかる。しかし、KCa分布図ではNo.2、9、13の3点の須恵器は他の9点の須恵器とは少し離れて分布するので、胎土が異なると判断し、これらをC群とした。残りの9点の試料をB群に分類した。これが両分布図による定性的な分類結果である。この結果をさらに詳しく解析するために、2群間判別分析を行った。二つの母集団は両分布図における試料の分布の中心は地元、神野大林領域であるため、神野大林群を母集団の一つとして選択した。さらに、古墳時代最大の須恵器窯跡である陶邑群を母集団の一つとして選択した。陶邑群と神野大林群間の判別分析の結果は第109図に示してある。両軸にとった D^2 （陶邑）、 D^2 （神野大林）はそれぞれ、陶邑群、神野大林群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、K、Ca、Rb、Srの分析値をつかって計算した。第109図をみると、陶邑群の試料の殆どは D^2 （陶邑） < 10 の領域に分布しており、また、神野大林群の須恵器試料の殆ども D^2 （神野大林） < 10 の領域に分布していることが分かる。 D^2 （X） < 10 は母集団（X）へ帰属するための必要条件であることは5%の危険率をかけたホテリングのT₂検定から導き出された条件である。理論的に導き出されたこの条件を、実際に分析した試料集団の分布でも満足していることが109図から分かる。両群の試料集団は理想境界線を挟んで分かれて分布しており、両者の相互識別は十分可能であることが分かる。さらに、両群の試料集団の分布から、互いに、相手群の重心からの距離をつかって、十分条件も経験的に導き出すことができる。陶邑群の試料集団は D^2 （神野大林） $= 4 \sim 40$ の範囲内に分布しており、また、神野大林群の試料集団は D^2 （陶邑） $= 3 \sim 40$ の範囲内に分布していることが第109図から分かる。この結果、陶邑群の試料集団が分布する領域は D^2 （陶邑） < 10 、 D^2 （神野大林） $= 4 \sim 40$ であり、神野大林群の試料集団が分布する領域は D^2 （神野大林） < 10 、 D^2 （陶邑） $= 3 \sim 40$ であることが第107図から分かる。このように、陶邑群、神野大林群の試料集団の分布領域が分かれば、今回分析した須恵器の中に陶邑製品があれば、この2群間判別分析図で陶邑領域に分布するはずであり、また、神野大林製品があれば、神野大林領域に分布するはずである。

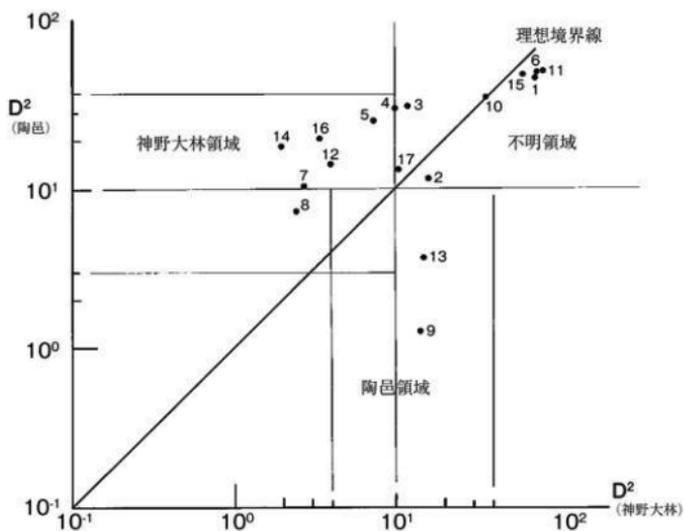
今回分析した須恵器試料の D^2 （陶邑）、 D^2 （神野大林）の計算値は第14表に示されている。この結果に基づいて作成した判別図は第110図に示されている。A群に分類された5点の須恵器は明らかに不明領域に分布し、陶邑製品でも、神野大林製品でもないことが分かる。これに対して、B群に分類された須恵器試料は殆どが神野大林領域に分布することが分かる。このうち、No.3、4、5の3点の須恵器は



第108図 東沢1号墳出土須恵器の両分布図



第109図 陶邑群と神野大林群の相互識別 (K、Ca、Rb、Sr)



第110図 東沢1号墳出土須恵器の産地推定 (K、Ca、Rb、Sr)

第108図の兩分布図でも近接して分布しており、同じ窯の製品とみられるが、第110図の判別図では神野大林領域と不明領域 $|D^2(\text{陶邑}) > 10, D^2(\text{神野大林}) > 10|$ の境界近くに分布しており、神野大林製品の可能性が十分あるが、境界線近くに分布した点を考慮に入れて、神野大林製品?と推定しておいた。しかし、神野大林領域内に分布したNo.7, 8, 12, 14, 16の5点の須恵器は神野大林製品と推定した。また、C群に分類された3点の須恵器のうち、No.9, 13の2点は陶邑領域に分布し、陶邑群への帰属条件を満足したので、陶邑製品と推定した。No.2は不明領域に分布したので、産地不明としておいた。A群に分類された5点の須恵器は今回は生産地である窯跡が特定された訳ではないので、姫路市周辺が産地であると推定するに止めた。産地推定の結果は第14表の最右欄に記載してある。なお、No.17(実験No.88)は型的には韓式であるが、Ca, Srが少ない点から、胎土からは朝鮮半島の製品とは考え難い。第110図でも、神野領域と不明領域の境界近くに分布しており、ここでは産地不明としておいたが、神野大林窯群の周辺で作られた国産品の可能性が高い。型的に見て韓式土器といわれる土器についてはその型式と胎土との関係がまだ、十分に分かっておらず、データ集積の段階にあり、今後、データを集積し、型式と胎土の比較研究が必要である。

第5章 まとめ

第1節 遺物

1. はじめに

本節では、東沢1号墳に伴う遺物について検討する。基本的には、周溝下層出土遺物として報告した遺物を主な検討対象とする。具体的な遺物としては、土器と埴輪が出土している。ここでは、両者の出土位置および特徴を明らかにするにあたって、供献された位置および時期の特定を主眼に検討していくことにする。

2. 出土状況の検討

はじめに 東沢1号墳に伴う遺物について、第3章で報告してきた。この報告をもとに、各遺物が使用・設置された位置の復元を主眼に検討したい。

須恵器 出土地点は、東周溝内の造り出し周辺（東側一括・北側一括）に限られる。したがって、須恵器は全て造り出し上に置かれていた可能性が考えられる。

また、18の器台と13の壺がセットで置かれていた可能性が考えられる。

土師器 東周溝内の造り出し周辺（東側一括・北側一括）以外に、南周溝内からも出土している（第44図）。ただし、小型の高坏に関しては、33・34・40を除いて、造り出し付近から出土している。よってこれらの高坏は、造り出し上に置かれていたものと考えられる。

この他、ミニチュア土器についても、その出土位置（第55図）から判断して、造り出し上に置かれていたものと考えられる。甕についても、20が東側一括から出土しており、造り出し上に置かれていたものと考えられる。

一方、33・34・40に関しては、いずれも南周溝内、中央部から出土している。特に33と34は、ほぼ同一地点から出土している。

瓦質土器 19の1点である。出土位置（第55図）から、造り出し上に置かれていたものと考えられる。

韓式土器 41は東周溝内から、42は南周溝内から出土している。少なくとも42に関しては、造り出し上に置かれていたものとは考えられない。41については、造り出し上に置かれていた可能性も考えられる。

円筒埴輪 86を除いては、南周溝と西周溝から出土している。これらは墳丘縁辺部に並べられていたものと考えられる。しかし、その出土量が限られていることから、一定の間隔をもって並べられていたものと考えられる。

86については、東周溝内から出土しているが、造り出し上に置かれていたものと判断することは困難である。造り出し周辺からは、円筒埴輪片は出土していない。

壺形埴輪 円筒埴輪とは異なり、各周溝内から出土している。円筒埴輪とともに、墳丘周囲に並べられていたものと考えられる。また、造り出し周辺（東側一括・北側一括）からも出土していることから、何点かは造り出し上に並べられていたものと考えられる。

蓋形埴輪 163の1点であるが、その出土位置から、造り出し上に置かれていた可能性が高いものと考えられる。

家形埴輪 家形埴輪1・家形埴輪2ともに、その出土位置は造り出し周辺（東側一括・北側一括）に限られる。2体とも造り出し上に並べられていたものと考えられる。

小 結 以上、東沢1号墳に伴う遺物について、その出土位置を検討してきた。この結果、造り出し上には、須恵器（高杯・壺・器台・鉢・鎌）・土師器（高杯・甕）・瓦質土器・韓式土器・埴輪類（壺・家・蓋）が並べられていたことが明らかとなった（第111図）。

これに対して、円筒埴輪は造り出し上には並べられず、墳丘周囲に一定の間隔で並べられていたものと考えられる。また、壺形埴輪についても、造り出し上に並べられた個体以外にも、円筒埴輪と同様墳丘上に並べられていたものと考えられる。

造り出し祭祀 上記の検討結果において、造り出し上には多くの土師器高杯が置かれていたことが明らかとなった。古暦紀之によると、このような造り出し上への供献形態は多くの古墳において認められること⁽¹⁾のようである。したがって、東沢1号墳において行われた造り出し祭祀の実体は、当該期の古墳一般と同じ形態であったことが理解できる。

3. 出土土器の検討

須恵器・土師器・瓦質土器・韓式土器が出土している。

(1) 須恵器

はじめに 器種としては、高杯・壺・鎌・器台・鉢が出土している。以下、器種ごとにその特徴を明らかにしていきたい。また須恵器に関しては、東沢1号墳の年代を決定する大きな要素となるものであることから、時期の検討も行うことにする。

高杯 1～10の10点出土している。1～3・6については、完形に復元できる個体である。また、10を除いては、杯部を中心に残存する。これら杯部の特徴として、①口縁端部が丸く仕上げられている、②杯部の口縁部と体部の境外面が段（a）もしくは突帯（b）として表現されている、などを指摘することができる。いずれも、植野浩三のB類に分類されるもので、TG232型式からTK23型式まで存続する型式とされている⁽²⁾。

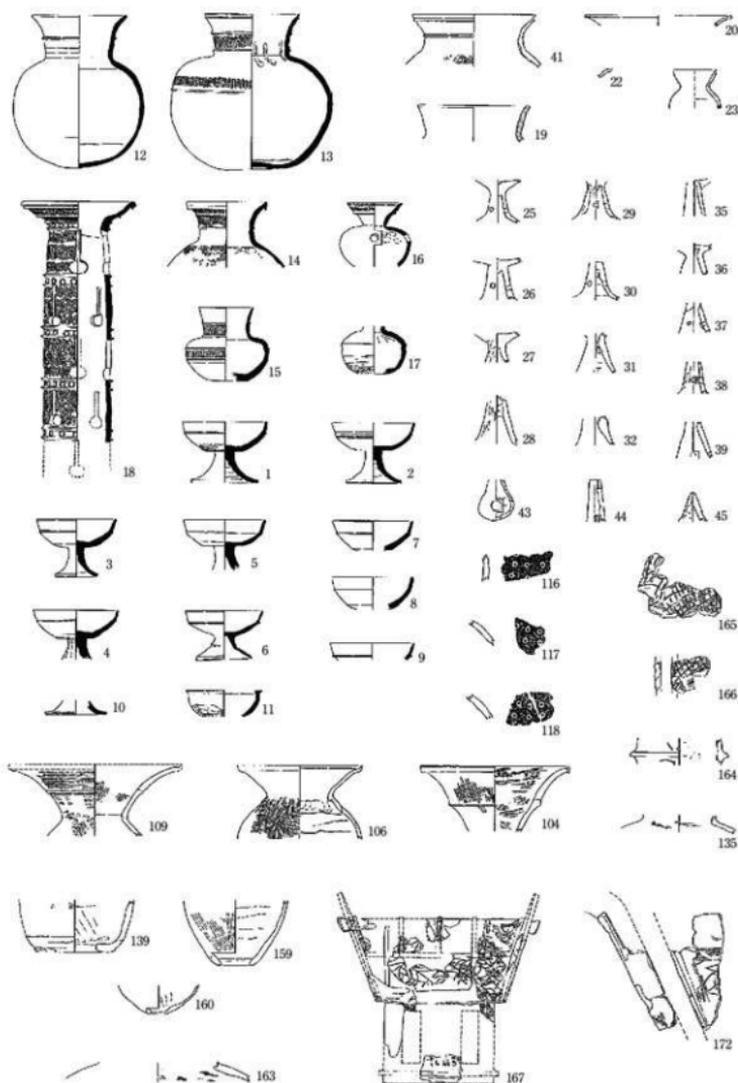
一方、脚部については、1～5を中心に脚部が中実傾向にあり、より古いTK73型式のなかでも古い傾向とみることができる⁽³⁾。また、ハ字形をなすものと、中位で屈曲するものが認められ、後者は②のbと対応する。なお、脚部に透かしの認められる例は出土していない。

このほか、全体的に焼成は十分とはいえず、壺・鎌等とは特徴を異にしている。

壺 12～15・17の5点出土している。14を除いては、口縁端部が丸く仕上げられている。一方、14については、口縁端部を上下に拡張させており、やや時期的に新しい特徴が認められる。17の底部は静止ヘラ削りにより仕上げられ、古い様相を示している。

鎌 16の1点が出土している。口縁部の波状文等、古い様相が認められる。

器台 18の1点が出土している。この土器を特徴付ける組紐文については、TG232型式を象徴する文様と指摘し、TK73型式以降では施されなくなるとされている⁽⁴⁾。器台のみでは、TK73型式以前に位置付けられるものと考えられる。



第111図 造り出し上供献土器・埴輪

また、鍵形の火焙透かしを伴う筒型器台の類例として、六大A遺跡SD1出土例がある。¹⁵⁾TK73型式より古いTG232段階に位置付けられている。しかし、鍵形の形態・規模はやや異なり、文様は櫛播波状文に限られ組紐文が見られない。この点は、東沢1号埴例の方

が古い様相を示している。

小結 以上の検討結果から、東沢1号墳出土須恵器はTK73型式に位置付けられる。特に14を除いては、TK73型式のなかでも古い傾向にあるものといえる。ただし、14の壺については、TK208型式の可能性も考えられる。

また、これらの須恵器の生産地であるが、11と12が陶邑産である以外は、地元産との分析結果が得られている(第4章第3節)。少なくとも、渡来遺物ではないものと考えられる。同じ加古川下流域にある池尻2号墳・砂部遺跡で出土している初期須恵器についても、同様の検討がなされている。⁽⁶⁾

(2) 土師器

はじめに 高杯と小型土製品が出土している。以下、器種ごとにその特徴を明らかにしてきた。
高杯 25~40の16点出土している。いずれも小型の製品で、小型土製品として理解できるものである。完存もしくは完形に復元できる個体は認められない。いずれも脚部を中心に残存し、杯部の出土は認められない。

多くの脚部に円形の透かしが認められる点が特徴的である。当該期の土師器高杯にも認められるが、TK73型式の須恵器高杯に認められる円形透かしとの関連も考えられるのではないだろうか。ただし、東沢1号墳出土須恵器高杯には円形透かしは認められない。

小型土製品 43~45の3点出土している。3点とも類例に乏しく、その模倣対象を特定することは困難である。

このなかで45については、その類例がクワンス塚古墳(兵庫県加西市)造り出しから出土し、円錐形として報告されている⁽⁷⁾。クワンス塚古墳については、同じ加古川流域に位置する古墳であり、時期的にも5世紀前半に位置付けられており、本古墳との関係において注目される。

(3) 瓦質土器

類例 19の1点のみ出土している。口縁部のみの残存であるが、類例が出合窯出土資料に認められる。須恵器と報告されているが、酒井清治は瓦質土器とされている⁽⁸⁾。4世紀代まで遡るとされており、当墳の年代とはやや異なる。出合窯の製品の当否はともかく、伝製品の可能性も考えたい。

胎土分析 なお、前節における胎土分析の結果(第4章第3節)では、産地は特定できないが、他の須恵器とは胎土が異なる結果が得られている。

(4) 韓式土器

はじめに 図化できたのは、41の壺と42の体部片の2個体分である。このほか、幾片かの小片が出土しているが(写真図版17)、いずれも41と同一個体と考えられる。

壺 41については、韓式土器としては、他に類例のない器形である。しかし、形態的特徴に注目すると、須恵器の壺・甕の特徴を備えていることが理解できる。口縁部外面の突帯、口縁端部の特徴などが、先に検討した時期の須恵器甕の特徴と一致する。さらに、13の須

恵器壺との類似を指摘することができる。

このほか、他の土師器とは異なり、①かなり硬質に焼成されている、②黒斑が認められない、といった特徴が認められる。これらの特徴は、円筒埴輪と類似するものである。これらのことから、窯室焼成による可能性が考えられる。

以上から、41については、①渡来人もしくは渡来系人による製品が須恵器もしくは埴輪と一緒に窯室焼成された可能性、②あるいは須恵器製作に渡来人が関わり、須恵器を模倣し一緒に焼成した可能性、を指摘することができる。

体部片 42については、小型の製品で、平底鉢の一部の可能性が考えられる。焼成などの特徴は、41とほぼ同じである。

4. 出土埴輪の検討

はじめに 円筒埴輪・壺形埴輪・家形埴輪を検討対象とする。

(1) 円筒埴輪

概要 東沢1号墳に伴うものとして46～86の41点が、東沢1号墳に伴う可能性が高い整地層から183～190の8点が、出土している。多くは小片での出土であることから、幾片かは同一個体の可能性を否定するものではない。完存もしくは完形に復元できたものがないため、全体の規模等についてまとめることはできない。このなかで、径を復元できたものは、その筒径が21cm～28cmである。また、基底部の高さは10.4cm、突帯間が明らかに見えるのは8.4cmである。

口縁部・底部 口縁部の形状は、いずれも逆L字形をなしている。また、底部は未調整である。一部の底部には、紐状の窪みが認められる。

他の特徴 この他、円筒埴輪全体に共通する特徴として、①黒斑が認められない、②透かしは円形のみである、③外面2次調整はB種ヨコハケにより仕上げられている、④突帯の断面が卵圧技法により方形に近い台形である、などの特徴を指摘することができる。

①から、東沢1号墳に伴う円筒埴輪は、窯室焼成によるものと判断することができる。

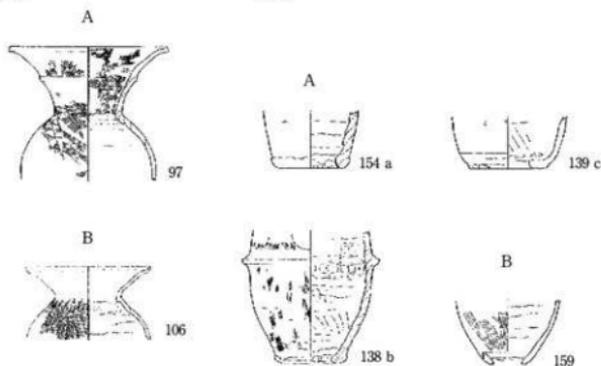
③については、B b種もしくはB c種と判断できるが、その特定は困難である。ただし、64・65などに代表されるように、静止痕の間隔が狭いことから、後者の可能性が高いものと考えられる¹⁰⁾。

④については、断面の後端がシャープで、突帯の高さが4mm～6mmと全体的に突出している。

小結 以上の特徴から、時期的な検討を加えたい。B種横ハケについては、4世紀後半から5世紀中葉に位置付けられている¹¹⁾。しかし、B種ヨコハケのなかのa種～d種のいずれに該当するかを特定することはできなかった。ただし、b種もしくはc種の可能性が高いことから、B種ヨコハケのなかでも後半に位置付けられることが可能である。そして、基本的に窯室焼成であることから、5世紀前葉～中葉に位置付けられるものと考えられる¹²⁾。

口縁部

底部



第112図 壺形埴輪の分類

(2) 壺形埴輪

概要

東沢1号墳に伴うものとして87~162の76点が、その可能性が考えられる整地層から191~196の6点が出土している。円筒埴輪同様、完存もしくは完形で復元できた個体は認められない。幾片かは同一個体の可能性を否定できないものである。

口縁部

口縁部は、複合口縁状をなすもの(A)と、単純口縁のもの(B)とに大きく分類できる(第112図)。壺形埴輪Aについては、複合部外面が突帯状にすることにより複合口縁となっている。ただし、複合部は、突帯を貼り付けるのではなく、粘土紐の重ね方に変化をもたせることにより、突帯状に仕上げられている。

この他、口縁部内面に円形竹管文を押すもの(94・112・120・121)や、線刻を施すもの(99・107)が認められる。

頸部

また、162を除いては、頸部外面には突帯が貼り付けられていない。体部に透かしが認められるのは138の1個体に限られ、円形の透かしが開けられている。また、体部に突帯が認められるのも138に限られ、その断面は円筒埴輪同様、端部がシャープな台形をなしている。

底部

底部は、体部に対して狭くなる傾向にある。全体的に仕上げが複雑なタイプ(底部A)と、いいないタイプ(底部B)の2タイプに分類できる(第112図)。

底部Aは、形態的に直立傾向にあるもの(a)と、内傾が顕著なもの(b)、底部を内側に折り曲げ平底状をなすタイプ(c:139)の3タイプに細分できる(第112図)。底面は基本的に未調整である。内面の仕上げが粗雑で、粘土紐痕が顕著である(写真図版29)。

底部Bは、出土量はわずかである。158~160がその代表で、内外面ともナデ調整を基調にいいないに仕上げられている。ただし、160については、器壁が薄く、埴輪であるのかも含めて検討する余地がある。

(3) 家形埴輪

| | |
|------|---|
| はじめに | 家形埴輪1 (167) と家形埴輪2 (172) の2種分出土している。ここでは、家形埴輪1を中心に検討していく。ここでは、製作技法・屋根装飾・年代等について検討する。 |
| モデル | 高床建物であるが、妻側の透窓が2段であることから、屋根倉を模したものと考えられる。 ⁽¹³⁾ |
| 製作技法 | 前田真由子の分類をもとに検討する。 ⁽¹⁴⁾ 屋根と壁体の接合は、屋根身倉接続のcタイプに分類されるものである(第72図)。これによると、当タイプについては、家形埴輪のなかでも比較的早い段階から存在した技法と考えられており、須恵器および円筒埴輪から比定される時期と矛盾するものではない。 また、身倉と屋根接合後の閉塞方法は、「閉塞B」に分類されるものである。その他、破風板の取り付けについても、「屋根部上面接合タイプ」に分類されるものである。 なお、身倉・屋根ともに粘土板造りによっている。 |
| 屋根装飾 | 家形埴輪1の屋根2の網代表現については、残存しない妻側の1区画も網代表現であった可能性が考えられる。ただし、屋根の両面において文様表現が異なる例は他に認められない。 ⁽¹⁵⁾ |
| 焼成 | 残存する範囲において黒斑は認められない。このため、窯窯焼成によるものと理解できる。これは、他の埴輪類と一致するものである。ただし、前田真由子によると、窯窯焼成の家形埴輪は中期後半以降とされており、検討された年代観とはやや齟齬が認められる。 ⁽¹⁶⁾ |

5. まとめ

| | |
|--------|---|
| 時期の検討 | これまでの検討結果から、須恵器からTK73型式に位置付けられる。そして、小浜 成は、初期須恵器と共伴する埴輪の検討から、Bb種ヨコハケからBc種ヨコハケまでの埴輪とTK73型式からTK208型式までの須恵器がほぼ対応するとされている。一瀬和夫も、Bb種の新しい段階から須恵器との共伴例が見られるとされている。 ⁽¹⁸⁾ 以上から、東沢1号墳における須恵器と円筒埴輪の共伴については、上記の事例に合致するものである。 |
| 年代の検討 | また、TK73型式の年代観については、白石太一郎・小浜 成ともに、5世紀初頭に位置付けている。したがって、東沢1号墳の年代についても、ほぼこの時期に位置付けられるものと考えられる。 ⁽¹⁹⁾ |
| 造り出し祭祀 | ところで、須恵器の造り出し上への供献については、5世紀中葉の神前山1号墳(三重県)の事例をもとに、当該期には行われていたとされている。 ⁽²¹⁾ しかし、東沢1号墳の事例は、上記の検討結果から、5世紀初頭まで遡るもので、その先駆として位置付けられるものと考えられる。 木下 亘によると、古墳から出土した初期須恵器の分析を通じて、初期須恵器はTK73型式からTK216型式への変遷過程において、宝器から祭器へと変化するとされている。 ⁽²²⁾ 東沢1号墳で確認された造り出しへの初期須恵器の供献は、まさにその初期に位置付けられる例と指摘することができる。そして、TK208型式とやや時期的に新しく位置付けられた14の壺が、この変遷過程を物語っているのではないかと考えられる。 |

〔註〕

- (1) 古屋紀之「土器と土製品の古墳祭祀」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社 2011
- (2) 植野浩三「TK73型式の再評価－高杯の消長を中心にして－」『田辺昭三先生古希記念論文集』田辺昭三先生古希記念の会 2002
- (3) 植野浩三「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第十三集 奈良大学文学部文化財学科 1995
- (4) 前掲 (3)
- (5) 穂積裕昌「一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う 六六A遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 2002
- (6) 中村 浩「播磨の初期須恵器－とくに加古川東岸域出土例について－」『大谷女子大学紀要』第16号 第1輯 大谷女子大学 1981
- (7) 森 幸三「クワンス塚古墳」『加西市史 第七巻 史料編1 考古』加西市 2010
- (8) 鎌木義昌・亀田修一「播磨出合遺跡出土の「陶質土器」・朝鮮三国系軟質土器・初期須恵器」『古文化談義』第18集 九州古文化研究会 1987
- (9) 酒井清治「日本における初期須恵器の系譜」『伽耶および日本の古墳出土遺物の比較研究』国立歴史民俗博物館 1994
- (10) 河内一浩「中期古墳の埴輪」『季刊考古学』第79号 雄山閣 2002
一瀬和夫「古墳時代のシンボル 仁徳陵古墳」2009
- (11) 小浜 成「須恵器からみた埴輪・古墳の年代」年代のものさし－陶邑の須恵器－ 大阪府近つ飛鳥博物館 2006
- (12) 関本優美子「百舌鳥・古市古墳群と円筒埴輪研究」『百舌鳥・古市の陵墓古墳』大阪府近つ飛鳥博物館 2011
- (13) 青柳泰介「器物を模倣した埴輪 家－家形埴輪のモデルについて－」『季刊考古学』第79号 雄山閣 2002
- (14) 前田真由子「製作技法からみた家形埴輪の変遷とその画期－近畿地方出土家形埴輪を中心に－」『古文化談義』第61集 九州古文化研究会 2009
- (15) 高橋克壽氏の御教示による。
- (16) 前掲 (14)
- (17) 前掲 (11)
- (18) 一瀬和夫「古墳出土の埴輪と初期須恵器」『小阪遺跡－近畿自動車道松原海南千および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－』大阪府教育委員会・財団法人大坂文化財センター 1992
- (19) 白石太一郎「須恵器の暦年代」年代のものさし－陶邑の須恵器－ 大阪府近つ飛鳥博物館 2006
- (20) 小浜 成「須恵器からみた埴輪・古墳の年代」年代のものさし－陶邑の須恵器－ 大阪府近つ飛鳥博物館 2006
- (21) 前掲 (11)
- (22) 木下 亘「古墳出土の初期須恵器をめぐって－畿内およびその周辺地域の資料を中心として－」『原始古代社会研究6』原始古代社会研究会編 1984

第2節 東沢1号墳について

1. はじめに

本節では、東沢1号墳について検討する。墳丘形態・葺石・造り出しを主な検討対象とする。

2. 墳丘の復元

墳丘規模 ここでは東沢1号墳の墳丘規模について検討する。墳丘の北半部が削平されているため、その規模が確実なのは、東西方向に限られる。その規模は、墳丘裾部を基準とすると、19.50mである。

墳丘形態 南北方向については、残存するのは12mである。造り出しが東側中央部にありと仮定し、造り出しの中央部を基点とすると、南北方向は14m～15.60mと復元される。これは、東西方向より小規模で、墳丘形態が長方形となる。もし、墳丘形態が方形であるとすると、造り出しは墳丘東側の中央部にはなかったことになる。

小結 以上から、①造り出しが墳丘東側にあったと考えるケースと、②南北方向も東西方向と同じ方形であったとするケースの、2通りが考えられる。どちらであったかを判断する材料は見当たらない。

3. 葺石

はじめに 葺石は、東沢1号墳の墳丘側斜面のみに葺かれていた。周溝内に、外側からの転石が認められなかったことから、周溝外側斜面には葺かれていなかったものと判断される。

葺きかた 東沢1号墳墳丘にみられる葺石の葺き方は、かなり特徴的である。基底石の上に小礫が積まれるのではなく、その背後に積まれていることである。また、基底石と他の葺石とでは、石材が明らかに異なり、意識的に使い分けられている。前者は凝灰岩で、後者がチャートである（第4章第1節）。

このような葺き方は、例は多くはないが、尼塚古墳（兵庫県加古川市）などで認められる。尼塚古墳は、東沢1号墳の南西約1.8kmにある西条古墳群を構成する5世紀に位置付けられる造り出し付円墳である。⁽¹⁾

4. 造り出し

はじめに 前節において、造り出し上に並べられた土器・埴輪について検討を行った（第111図）。ここでは、上記の遺物をもとに、造り出し祭祀の特徴について検討したい。

遺物構成 造り出し上に並べられたと考えられる遺物は、土器類と埴輪類である（第111図）。土器類は、須恵器・土師器・瓦質土器からなり、須恵器は東沢1号墳から出土した全ての須恵器が該当する。土師器は、高杯とミニチュア土器が該当する。瓦質土器は、1点の出土で、造り出し上に置かれていたものと考えている。

埴輪については、家形埴輪と壺形埴輪が並べられていた。家形埴輪は、家形埴輪1と家形埴輪2の2点ともである。一方、円筒埴輪に関しては、北側・東側一括遺物中に含まれ

ないことから、造り出し上には並べられていなかった。

造り出しの機能 このように、土器に関しては供献形態の器種とミニチュアが、埴輪に関しては形象埴輪が、主に並べられていたようである。以上の遺物から想定される造り出し祭祀については、他の当該期の前方後円墳等と大きく変わるものではない。つまり、方墳であっても、その内容に差が認められるものの、基本的な構成は同じといえる。これは、田中清美の分析と一致するものである。

造り出しの時期 当墳の時期については、前節での検討結果から、5世紀初頭～前葉と考えられている。造り出しを伴う方墳については、7基以上知られている。⁽³⁾このなかで、当墳と同時期の造り出しを有する方墳としては、葛蒲塚古墳（京都府綾部市）と聖塚古墳（京都府綾部市）を挙げることができ、両墳とも5世紀初頭から前半に位置付けられている。以上から、造り出しを伴う方墳としては、古い部類に位置付けることができる。

ところで、前方後円墳の墳丘に取り付く造り出しについては、栗山古墳（奈良県）など、4世紀末から5世紀前半代以降に出現するとされている。したがって、先に造り出しを伴う方墳としては古いと述べたが、造り出しを伴う古墳全体のなかでも初期の古墳に位置付けられるのではないかと考えられる。

5. まとめ

現在、東沢1号墳周辺においては、他に周知された古墳は認められない。しかし、地元においては、周囲に多くの古墳群があったとの伝承がある。今回の調査では、東沢1号墳以外明らかにすることはできなかった。しかし、周溝上層から出土したやや時期の新しい須恵器（175～177）などは、上記の古墳の存在を暗示しているのではないかと考えられる。

同時期の古墳 加古川下流域において東沢1号墳と同時期と考えられる古墳は、本墳の西側1.8kmにある西条古墳群中に、5世紀前半に位置付けられる行者塚古墳・人塚古墳等が周知されている。また、尼塚古墳についても、これらに続く時期に位置付けられている。⁽⁸⁾ただし、これらの古墳との関係については、今後の検討課題である。

被葬者の性格 本墳の被葬者を考える上で、韓式土器と初期須恵器が注目される。両者は、渡来人との関係を物語るものである。

東沢1号墳が所在する加古川流域においては、カンス塚古墳（加古川市：TK216型式）・池尻2号墳（加古川市：TK73型式～TK216型式）など、初期須恵器を伴う古墳が知られている。

さらに上流域では、黒福1号墳（加西市：TK73型式～TK216型式）・黒福2号墳（加西市：TK73型式）・黒福3号墳（加西市：TK216型式～TK208型式）・小山古墳（加西市：TK73型式）・ジヤマ古墳（加西市：TK208型式）・女鹿山群集墳（加西市：TK208型式）・堀山古墳などで初期須恵器が出土している⁽⁹⁾（第113図）。

他に、中流域の家原堂ノ元遺跡でも、韓式土器が出土している。⁽¹⁰⁾

この他、行者塚古墳においても、その副葬品から朝鮮半島との積極的な交渉が伺うことができる。さらに、同じ加古川下流域の砂部遺跡においても、韓式陶器高杯や韓式系土師器廠が出土し、5世紀前半と考えられている。⁽¹¹⁾



第113図 関連遺跡

このように、渡来土器と断定された初期須恵器は認められないが、少なくとも加古川流域は渡来人もしくはそれと深く関連した人々の往来が盛んであった地域とみることができると考えられる。

当墳からは、初期須恵器をはじめ韓式系土器・瓦質土器が出土していることから、上記古墳以上に、被葬者は渡来人と深く関わっていたのではないかと考えられる。加古川を望む段丘崖沿いに立地していることも、加古川を往来する渡来人を意識した結果と考えることも可能と考えられる。前方後円墳ではなく方墳という形態から、当地における盟主墳とは考えがたいものの、渡来人との交流に大きく関わる役割を果たしていたものと考えられる。さらには、被葬者が渡来人である可能性も考えられる。

〔註〕

- (1) 高野政昭「尼塚古墳」『加古川市史 第四巻』兵庫県加古川市 1996
- (2) 田中清美「57号墳の造出しについて」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅰ－1981年度大阪市長古地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書－』財団法人 大阪市文化財協会 1989
- (3) 前掲(2)
- (4) 中村孝行「聖塚・苮蒲塚試掘調査概報」綾部市教育委員会 1984
- (5) 西田親史「前方後円墳と葬送儀礼－近畿・関東の造り出しの発掘調査例を中心に－」『古文化談叢 第56集 九州古文化研究会 2007
- (6) 森下章司・菱田哲郎他「行者塚古墳発掘調査概報」加古川市教育委員会 1997
- (7) 高野政昭「人塚古墳」『加古川市史 第四巻』兵庫県加古川市 1996
- (8) 高野政昭「尼塚古墳」『加古川市史 第四巻』兵庫県加古川市 1996
- (9) 立花 聡「播磨・玉丘遺跡群出土の初期須恵器」『韓式系土器研究Ⅴ』韓式系土器研究会 1994
加西市『加西市史 第七巻 史料編1 考古』2010
- (10) 富山直人「播磨における大陸からの移住者」『日本考古学協会 2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003年度滋賀大会実行委員会 2003
- (11) 竹谷俊夫「砂部遺跡」『加古川市史 第四巻』兵庫県加古川市 1996
- (12) 中村 浩「播磨の初期須恵器－とくに加古川東岸域出土例について－」『大谷女子大学紀要』第16号 第1輯 大谷女子大学 1981

第3節 「望塚」について

1. 望塚

はじめに 調査地の中央に、「望塚」と称される塚が存在した。その規模は、直径約3m、高さ約70cmと、小規模なものである。この塚は、以前（大正時代）にこの塚から銅鐸が見つかったと伝承されてきた。地元では、この塚を「望塚」と呼び、銅鐸が見つかった場所として、今日まで信じられてきている。

ちなみに、以前この銅鐸（第114図）は個人によって所蔵されていたが、平成22年3月以降、兵庫県立考古博物館の所蔵となっている。

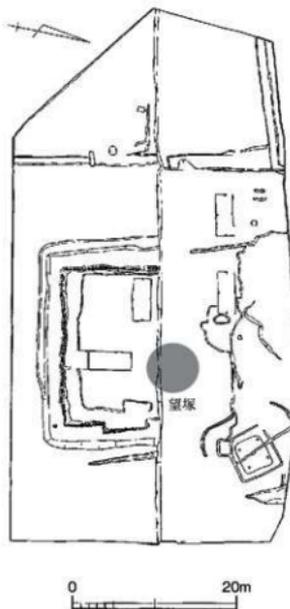


第114図 望塚出土銅鐸

2. 銅鐸出土状況

はじめに 現在、銅鐸が「望塚」のあったあたりから出土したことについては、ほぼ確実視されている状況である。しかし、その具体的な場所・発見のいきさつについては諸説が存在する。おもに4説あるが、そのうちの3説（説1～説3）は、昭和時代初期に直良信夫氏が地元の方から聞き取り調査をした結果に基づくものである。上記4説とは、以下の説である。

- 説1 銅鐸は、耕地整理を行った際に、望塚から土器とともに出土した。
- 説2 銅鐸は、耕地整理の際に出土したのもので、望塚から出土したものでもなく、耕地整理から8・9年経ってから望塚があった田んぼから、耕作をしていた際に出土した。
- 説3 銅鐸は、耕地整理から1・2年経った後、耕地整理で破壊した望塚のあたりを耕作していた際に見つかった。
- 説4 銅鐸は耕地整理の際に見つかったものであるが、当時望塚は存在しなかった。銅鐸発見後、田んぼの持ち主の家に不幸が続いたため、神様を祭ったほうがよいとのことで、銅鐸が見つかった田んぼの真ん中に塚＝望塚を築いた。



第115図 調査地と望塚

3. 調査成果と望塚伝承

発掘調査

ところで、望塚から出土したとされる銅鐸を詳しく観察したところ、2個の銅鐸がセットで埋められていた可能性が考えられている。つまり、調査以前にあった望塚あるいはその周囲にまだ銅鐸が残されている可能性が考えられた。そこで、望塚についても発掘調査をすることになった。また、調査区全域において、銅鐸が埋納されている可能性についても留意し、調査を行った。

調査成果

調査の結果については、第3章第2節で報告した通りである。その結果、今回調査した望塚は、耕地整理の後に造られたことが明らかとなった。望塚は、2枚の水田の境となす段差をもつ畦を跨ぐようにあったが、この段は耕地整理の際にできたもので、望塚はこの段ができた後に造られたことが明らかとなった。

4. 小結

以上から、望塚にまつわる4説のなかで、説4が最も確からしいことが明らかとなった。すると、銅鐸の出土した地点はどこか、という疑問が残る。望塚の調査後、望塚があった2枚の水田全体を発掘した。しかし、望塚以外の地点でも銅鐸はみつからず、銅鐸が埋められていたとおぼしき穴も見つからなかった。銅鐸出土地点は、今回の調査では明らかにすることはできなかった。

〔註〕

直良信夫「播磨国加古郡八幡村望塚における銅鐸出土の状態について」『近畿古代文化論考』1991

報 告 書 抄 録

| ふりがな | ひがしさいわいちごうふん | | | | | | | |
|--------|---|----------|--------|----------------|--|------------------------|-------------|--------------------------|
| 書 名 | 東沢1号墳 | | | | | | | |
| 副 書 名 | (主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 兵庫県文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第431冊 | | | | | | | |
| 編著者名 | 山田清朝 | | | | | | | |
| 編集機関 | 兵庫県立考古博物館 | | | | | | | |
| 所 在 地 | 加古郡播磨町大中1丁目1番1号 | | | | | | | |
| 発行機関 | 兵庫県教育委員会 | | | | | | | |
| 所 在 地 | 〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 ℡078-362-3784 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2012年(平成24年)3月26日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 東沢1号墳 | かこがわしやほちょう 加古川市八幡町 かみさいごう 上高条 | 28210 | 110630 | 34° 46' 52" | 134° 54' 23" | 平成19年10月17日 ～11月27日 | 2006㎡ | (主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 東沢1号墳 | 集落跡 | 弥生時代後期末 | 竪穴住居 溝 | | 土器 | | | |
| | 古墳 | 古墳時代中期初頭 | 東沢1号墳 | 土器棺 | 須恵器 土師器 ミニチュア土器 円筒埴輪 家形埴輪 壺形埴輪 蓋形埴輪 小型土製品 韓式系土器 瓦質土器 | 初期須恵器 | | |
| 概 要 | <p>(主)加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴い本発掘調査を実施。調査地は、以前銅鐸が出土したと伝承されていたところであったが、これに関連する遺構・遺物はみつからなかった。調査ではあらたに一边19mの方墳(東沢1号墳)が明らかとなった。墳丘の北側半分と埋葬施設は削平を受け、周溝を中心に遺存していた。墳丘側斜面には葺石が葺かれていた。</p> <p>この他、東側周溝内には造り出しが認められた。造り出しの周辺から出土した遺物から、須恵器(高杯・筒形器台・はそう・壺・鉢)・土師器(高杯)・ミニチュア土製品・韓式系土器・瓦質土器・壺形埴輪・家形埴輪が供献されていたことが明らかとなった。また、これらの遺物から、東沢1号墳はTK73型式段階の古墳であることが明らかとなった。この他、周溝内からは円筒埴輪が出土している。</p> <p>他に、弥生時代終末期の竪穴住居跡や古墳時代の土器棺などが検出されている。</p> | | | | | | | |

写真図版



調査前全景 北から

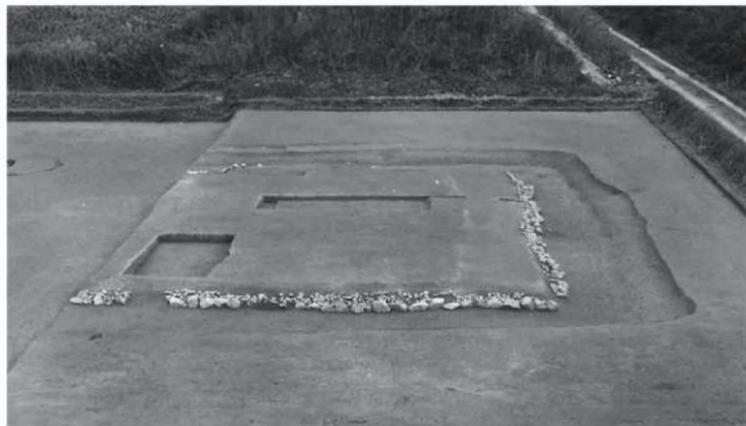


望塚断面 南から

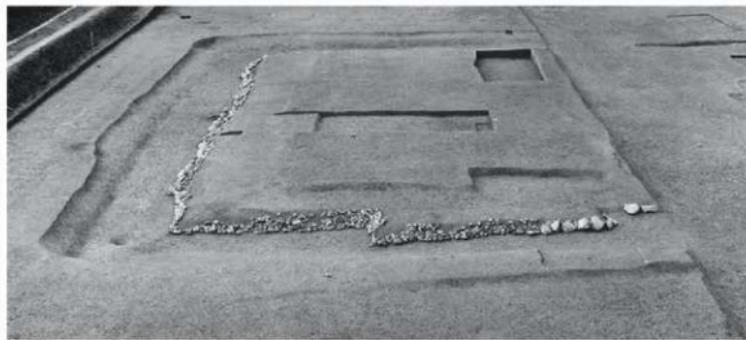


全景 俯瞰

写真図版3 東沢1号墳



全景 西から



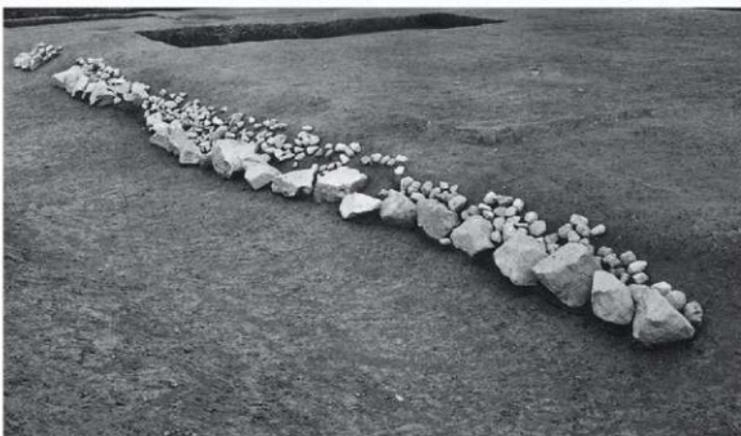
全景 東から



全景 北東から



西側斜面全景
北西から

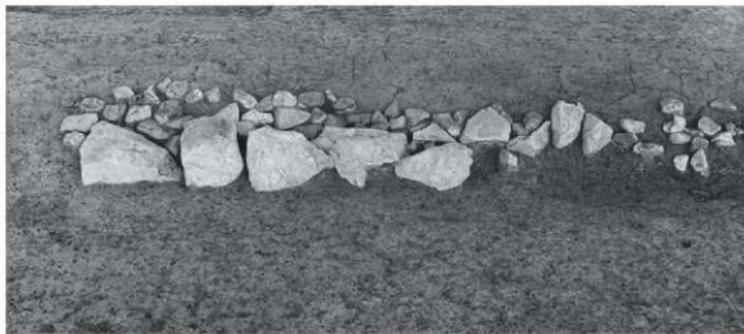


西側斜面全景
南西から

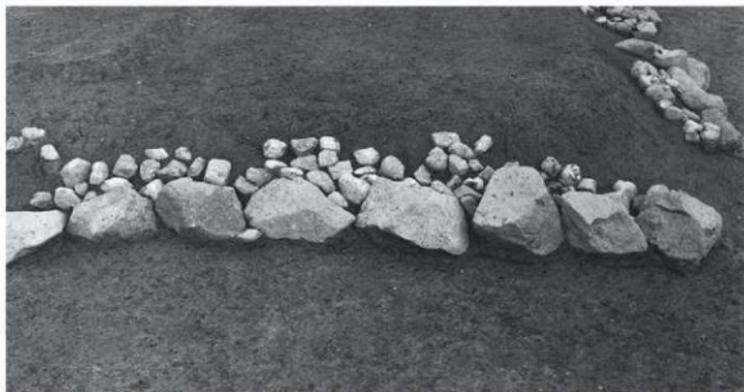


西側斜面北端
北西から

写真図版5 東沢1号墳



西側斜面中央部
西から



西側斜面南端部
西から



南側斜面全景
南西から



南側斜面東半部
南西から



南側斜面西端部
南から



南側斜面中央部
南から



南側斜面東端部
南から



造り出し南東隅
南東から



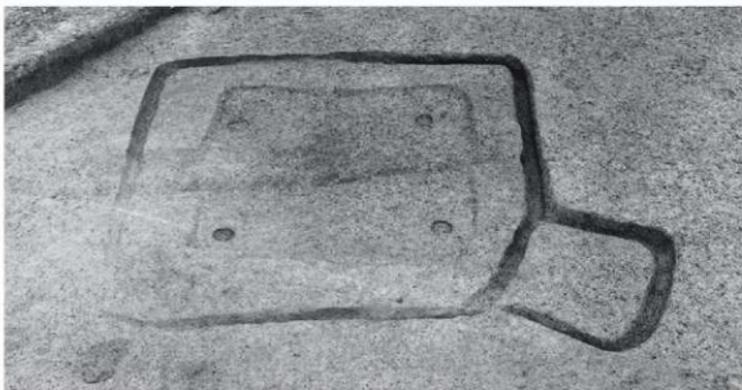
(左) 南側周溝
105出土状況
東から



(右) 南側周溝
105出土状況
東から



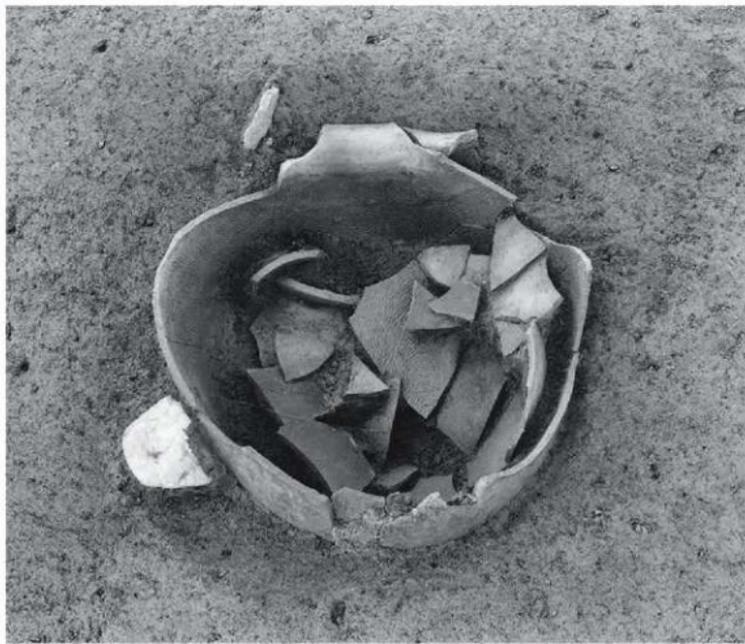
SH01全景
南西から



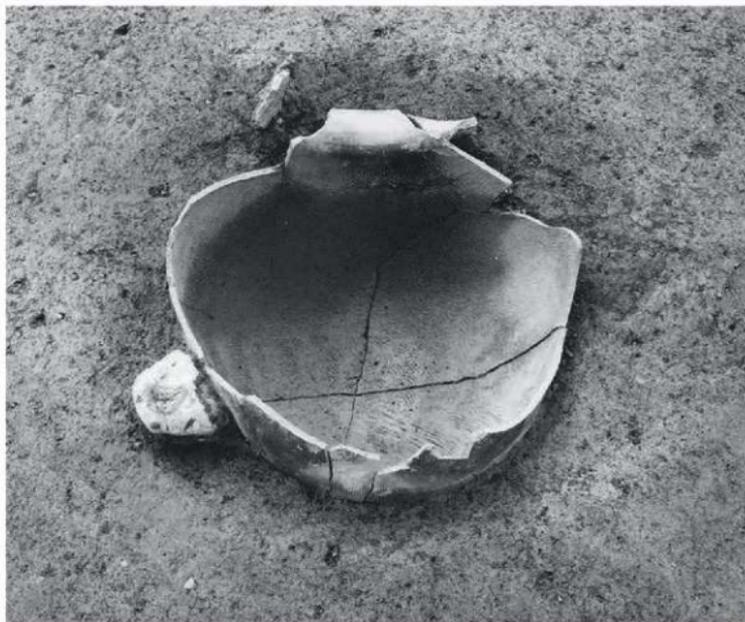
SH01全景
南西から



SH01全景 北から



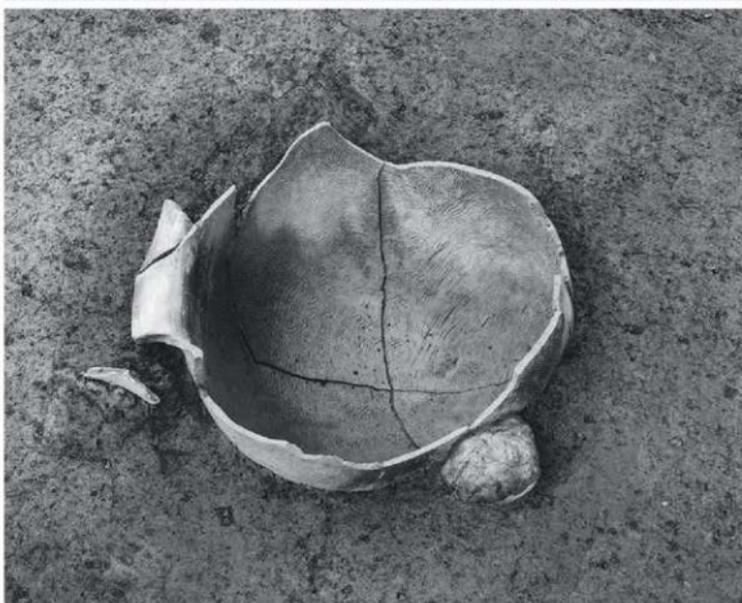
S X01 東から



S X01 東から



S X01 南から



S X01 南から



1



4



2



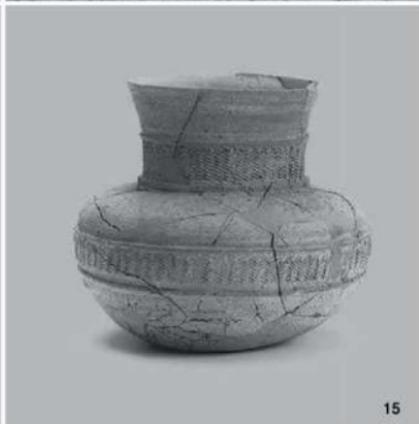
6



3

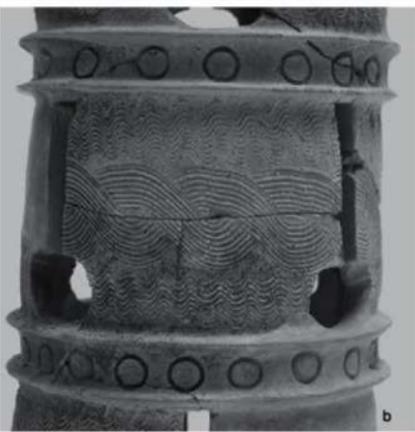


8





18



a · b : 18外面



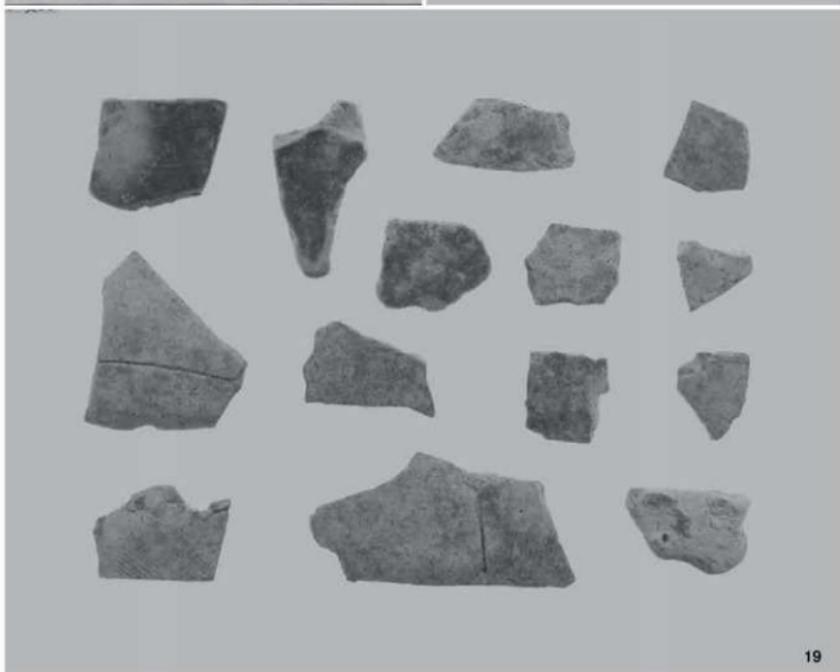
16



17



19



19



23



28



25



29



26



30



33



36



35



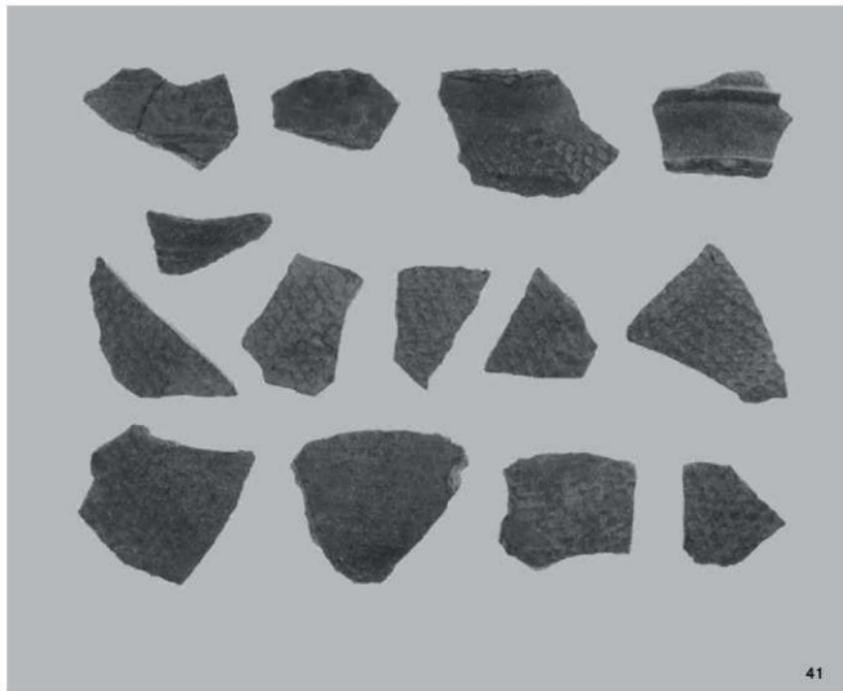
37

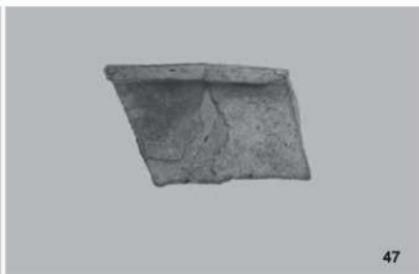
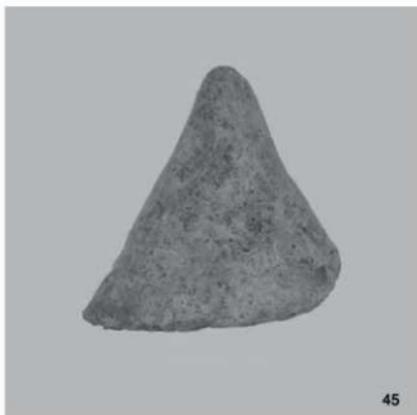


40



42







55



58



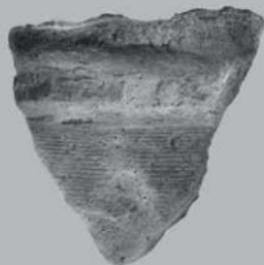
56



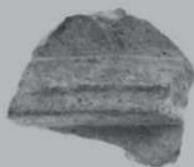
59



60



57



61



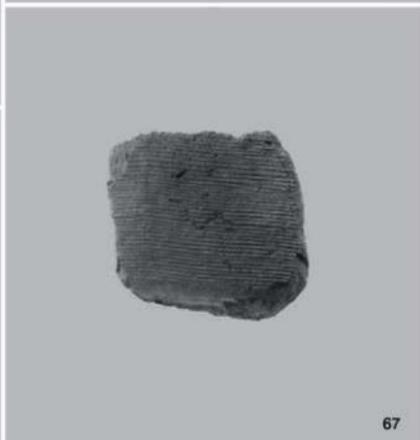
62



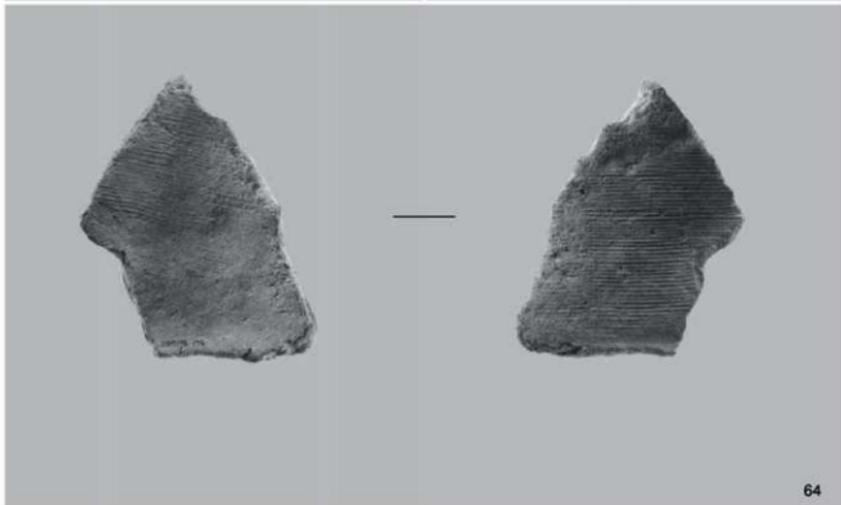
66



65



67



64



70



73



71



75



72



77



79



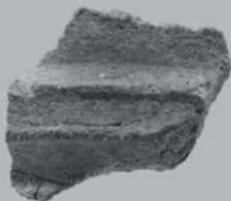
82



80



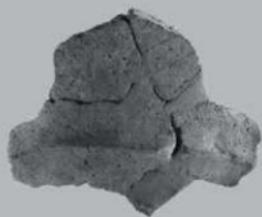
83



81



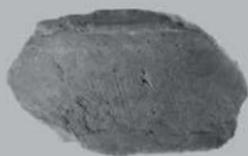
84



87



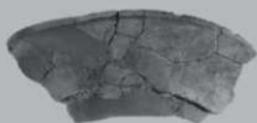
96



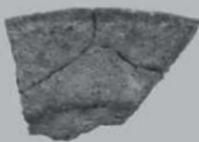
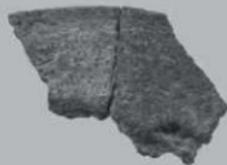
90



97



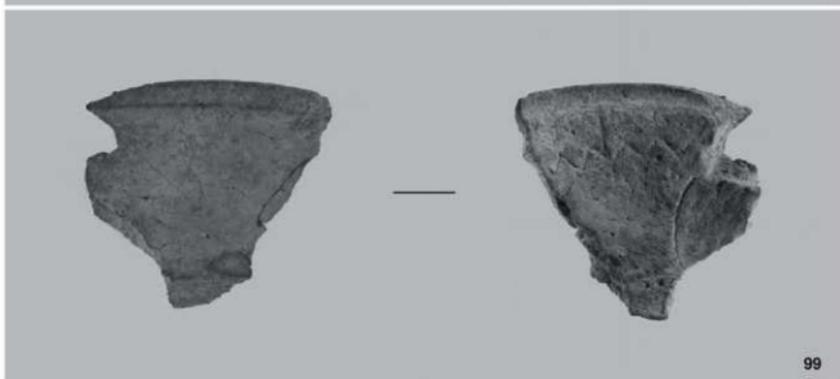
91



89



92



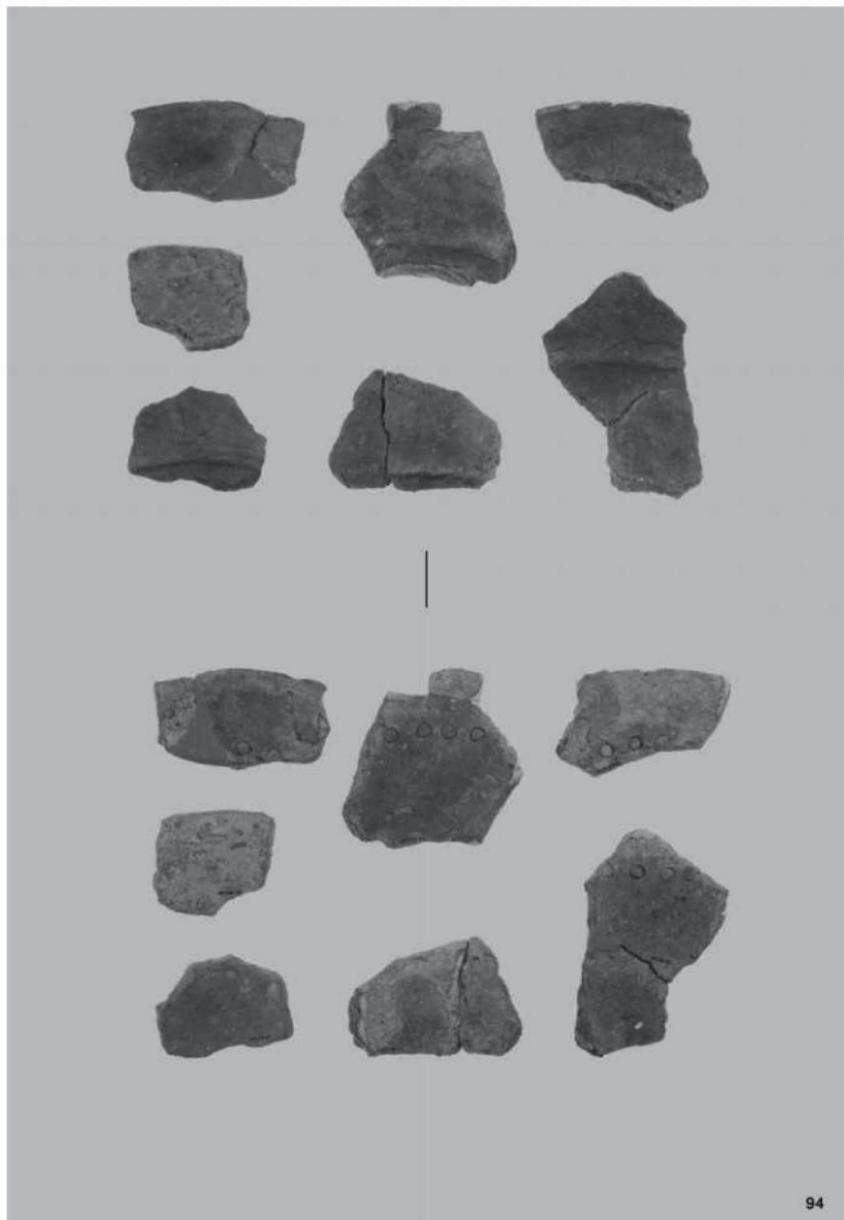
99

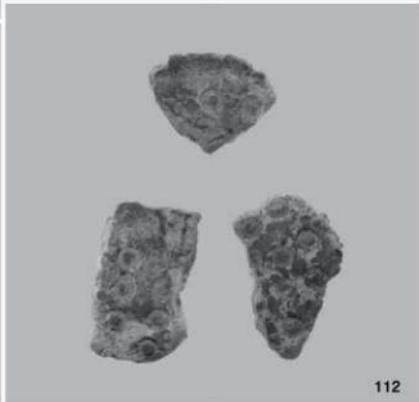
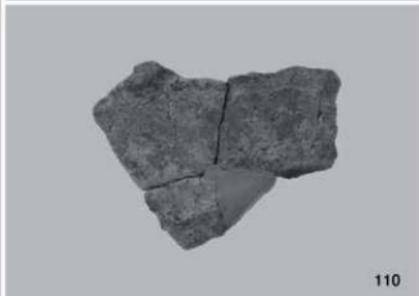


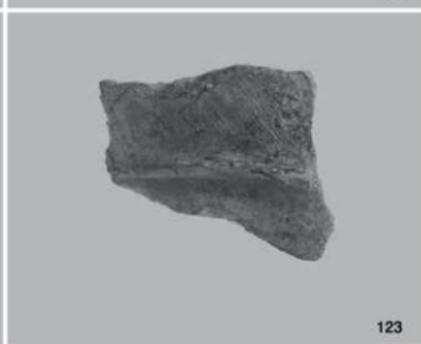
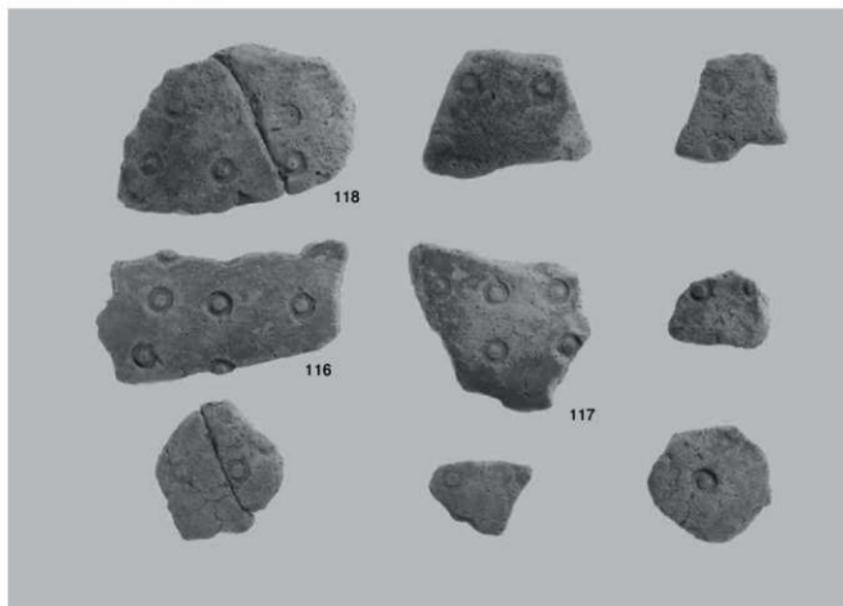
101

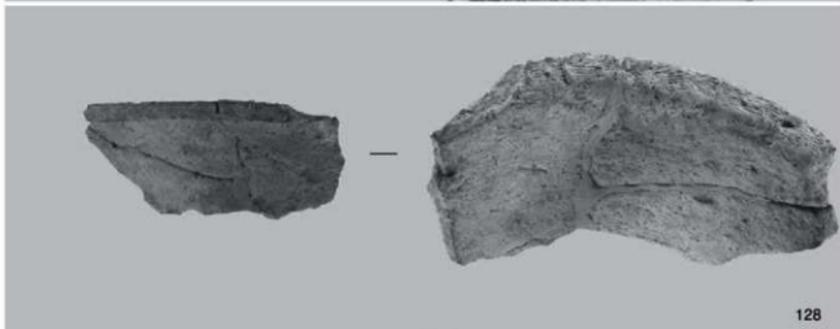
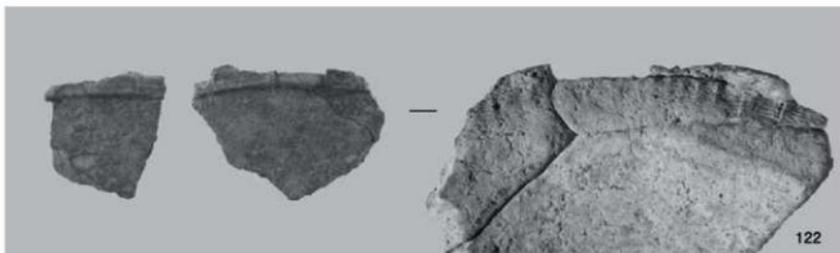


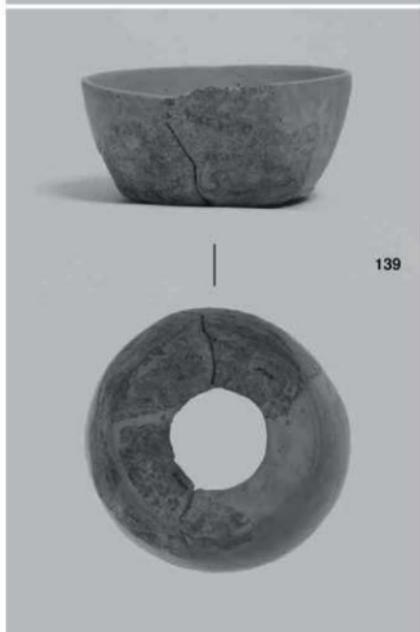
104

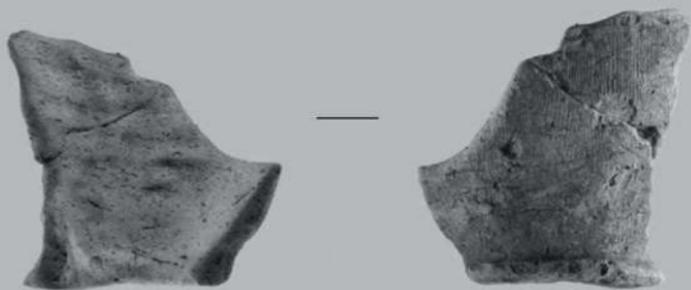








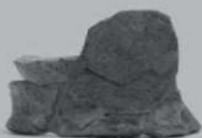




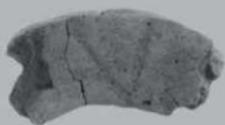
145



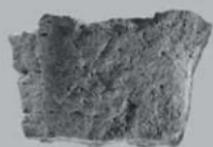
147



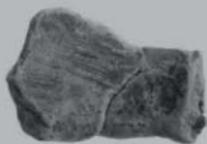
148



149



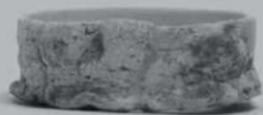
151



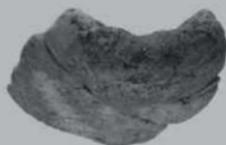
152



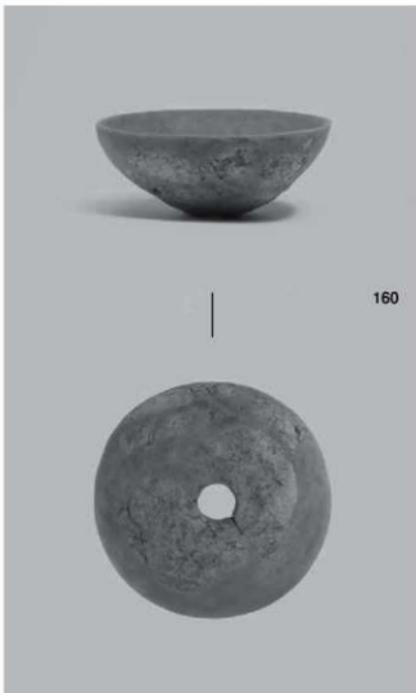
154



150



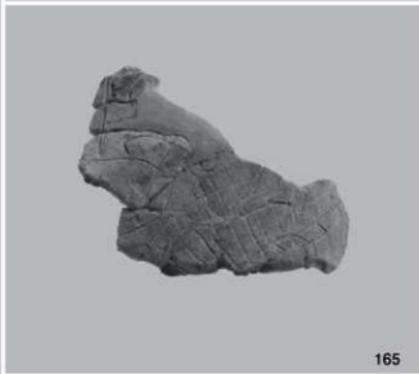
159



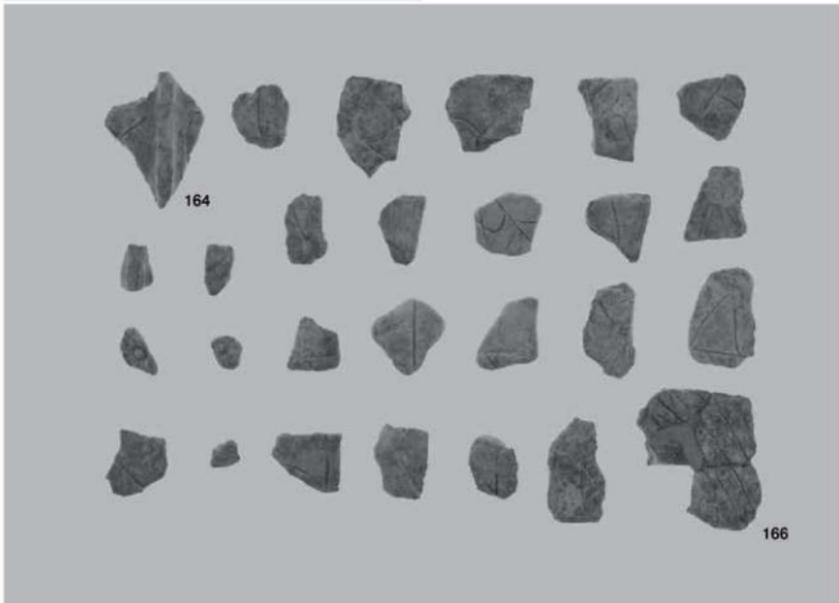
160



161



165



164

166



194



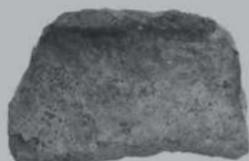
191



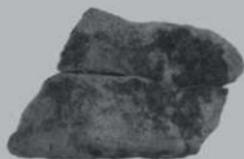
184



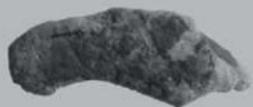
187



183



193

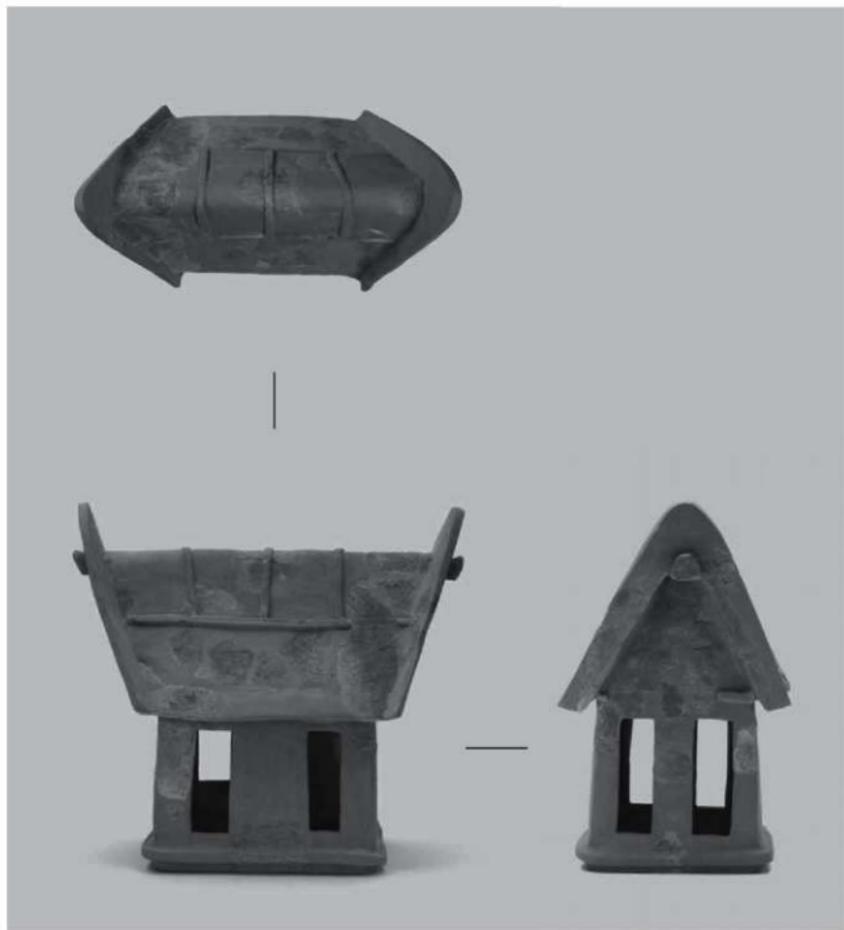


197

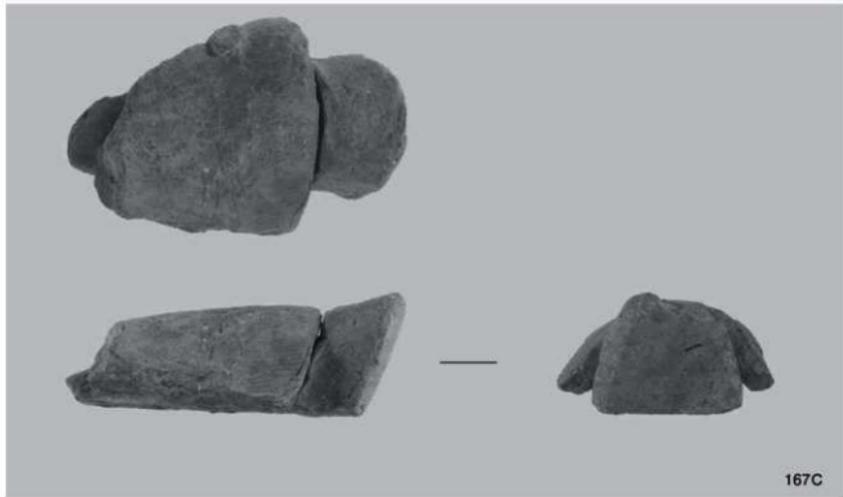
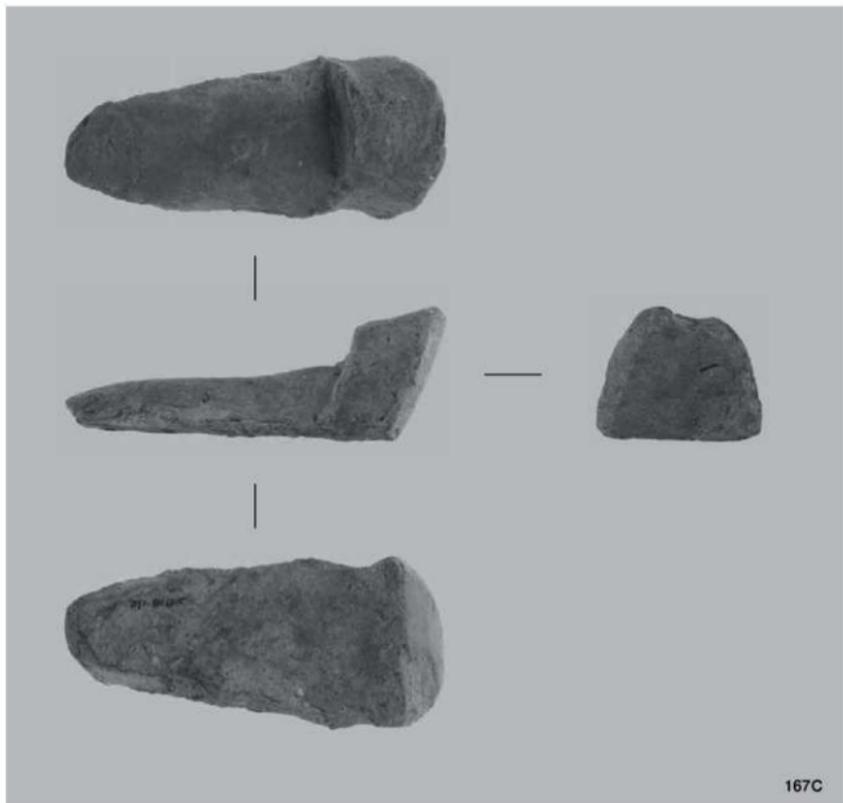


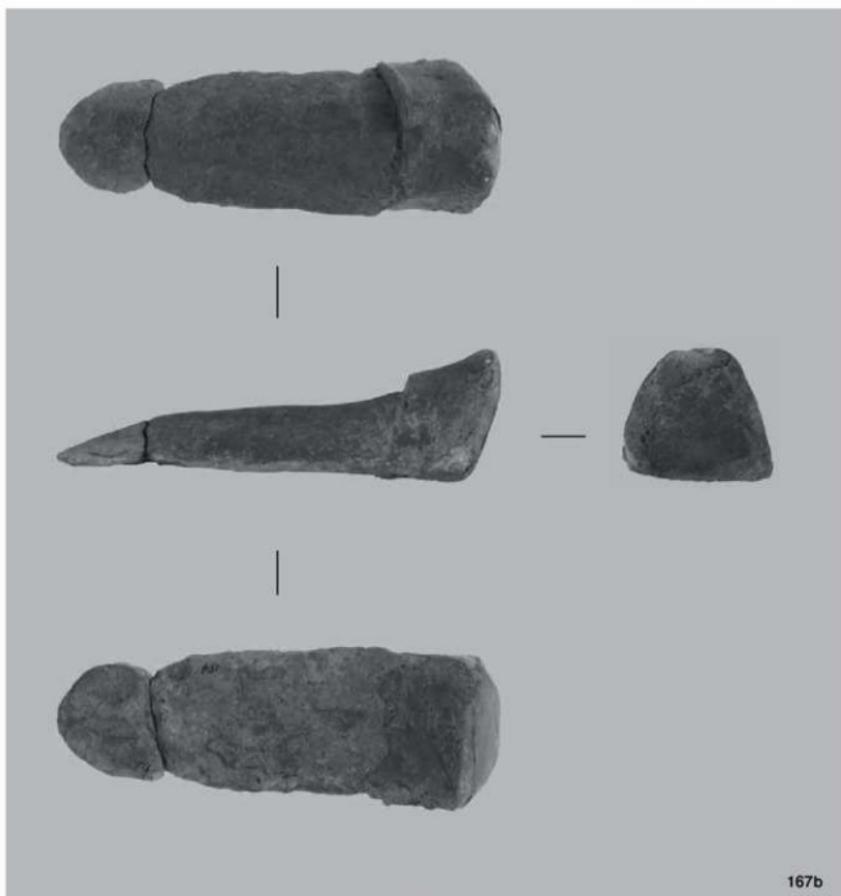


a : 家形埴輪 1 (167) 屋根 (1) b : 家形埴輪 1 (167) 屋根 (2) c : 家形埴輪 1 (167) 妻側









167b



167c



167d

167c・167d: 妻頂部外面



198



205



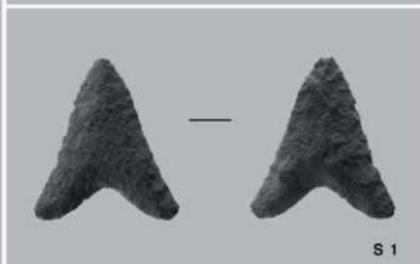
207



202



208



兵庫県文化財調査報告 第431冊

加古川市

東沢1号墳

(主) 加古川小野線(東播磨南北道路)道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年3月26日 発行

- 編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号
- 発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央下山手通5丁目10番1号
- 印 刷 明光印刷株式会社
〒674-0093 明石市二見町南二見17-14
-